Japan Overseas Cooperation Volunteers

技術専門誌（紙）掲載

青年海外協力隊 活動体験レポート集

（1）

農林水産部門

JICA LIBRARY
J1151244[9]

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

青国一
R

No.1 212

技術専門誌（紙）掲載

青年海外協力隊
活動体験レポート集
（1）

農林水産部門

平成11年3月

国際協力事業団

青年海外協力隊事務局

1151244[9]

はじめに

青年海外協力隊発足当初より、協力隊員の活動記事が各種業界誌(紙)に取り上げられていましたが、協力隊事務局は、さまざまな職種の関係者に対して、協力隊をよく知ってもらうことを目的に、啓発及び募集活動の一環として技術専門誌(紙)への協力隊活動記事掲載の促進をはじめました。

昭和63年度からは主に派遣要請が多くあるにもかかわらず、応募者が十分に集まらない職種(重点職種)に関連する技術専門誌(紙)への記事掲載促進に取り組み、読者への協力隊参加の呼びかけはもちろんのこと、各業界団体へは現職参加制度への理解の促進にも力を入れてまいりました。

その結果、青年海外協力隊活動体験レポートの掲載により、技術専門誌(紙)の読者に対して直接的にその魅力を伝えることができ、多くの技術者の協力隊参加にもつながっています。また、青年海外協力隊事業と各種業界の関係を深め、隊員が帰国した後、元の職場に戻って協力隊参加により得た多くの経験を発揮することにより、その職場や業界を活性化していくという様々な人材の環流の一助をも担っているものであります。

このように、その記事掲載は、啓発・募集の役割のみならず、協力隊と各業界との接点ともなっており、各業界からの協力隊支援・連携の観点からも極めて有効なツールとなっております。

昭和63年度から実施してきました技術専門誌(紙)に掲載された協力隊員の活動記事は既に1,000件を超えるに至っております。

そこで今回、これまでに掲載されました記事を「分野(職種)地域(国)別」に3分冊に取りまとめました。

本冊子の用途として、協力隊事務局及びJICA国内機関においては、全国各地で開催する募集説明会での応募相談用として、訓練所においては、候補生の派遣前の専門分野・地域の学習用として、在外においては、派遣中隊員の技術的な参考資料としてなど広範囲な用途に御活用頂ければ幸いでございます。

今後とも技術専門誌(紙)へ引き続き、より魅力ある体験記事を掲載していきたいと考えております。より一層の関係者のご協力、ご意見を頂けますようよろしくお願い致します。

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局長

Japan Overseas Cooperation Volunteers

農林水産部門

食用作物
稲　作
園芸作物
花　き
野　菜
果　樹
きのこ
病虫害
養　蚕
養　蜂
家畜飼育
養　鶏
獣医師
土壌肥料
農業土木
農業機械
農業協同組合
村落開発普及員
食品加工
農産物加工
水産物加工
森林経営
植　林
漁具漁法
養　殖
農林統計
水産統計

農林水産部門　目次

食用作物

アフリカ

リベリア	深沢公史	昭和60年度1次隊	農村報知新聞	1988……1

稲　作

アジア

ラオス	三浦　悟	平成3年度3次隊	農村報知新聞	1993……1
ラオス	牛丸善博	平成5年度1次隊	NGO協力情報	1995……3
マレイシア	小田島成良	昭和61年度2次隊	日本農業新聞	1989……5
マレイシア	田中修二	昭和62年度2次隊	技術と普及	1989……6
マレイシア	佐藤秀樹	平成元年度1次隊	農村報知新聞	1991……8

アフリカ

エティオピア	村田秀行	昭和62年度1次隊	日本農業新聞	1988……9
ガーナ	高橋知見	平成3年度1次隊	NGO協力情報	1994 ……10

中南米

ペルー/パナマ	佐々木理世	平成2･3次/平3振替	農村報知新聞	1994 ……12

大洋州

フィジー	小島英隆	平成元年度3次隊	日本農業新聞	1992 ……14

園芸作物

アフリカ

ケニア	大野和徳	昭和60年度3次隊	農業技術	1990……1

花　き

中南米

ホンデュラス	清水　裕	昭和62年度2次隊	全国農業新聞	1990……1
ホンデュラス	鈴木あや子	昭和62年度3次隊	農耕と園芸	1990……2
ホンデュラス	近藤喜代美	平成2年度2次隊	NGO協力情報	1994……4
パラグァイ	米井尚道	昭和63年度1次隊	花き園芸新聞	1992……5

野　菜

アジア

バングラデシュ	片浦雅之	平成3年度3次隊	農村報知新聞	1994	1
マレイシア	横山和正	昭和61年度3次隊	野菜園芸技術	1989	3
マレイシア	藤原俊次	昭和62年度1次隊	農村報知新聞	1989	4
マレイシア	久保田淳	平成元年度3次隊	農村報知新聞	1992	6
ネパール	小倉浩一	昭和60年度2次隊	日本農民新聞	1988	8
スリ・ランカ	飯塚洋子	昭和58年度3次隊	農村報知新聞	1989	9
ブータン	飯塚洋子	平成2年度3次隊	農機新聞	1993	11
スリ・ランカ	木島祐子	昭和61年度1次隊	日本農業新聞	1990	13
スリ・ランカ	村橋実代子	昭和61年度1次隊	日本農民新聞	1991	14
スリ・ランカ	佐々木透	昭和61年度2次隊	日本農業新聞	1989	15

アフリカ

エティオピア	塩見慎次郎	昭和61年度1次隊	日本農民新聞	1989	16
ガーナ	三木　誠	昭和61年度3次隊	海外新聞	1988	17
ガーナ	星　洋介	昭和62年度2次隊	農村報知新聞	1989	18
ガーナ	伊藤正彦	昭和63年度2次隊	日本農民新聞	1992	20
マラウイ	南　雄三	平成元年度3次隊	農村報知新聞	1991	21
ニジェール	太田恵美	昭和63年度2次隊	農村報知新聞	1990	23
ザンビア	阿部吉夫	昭和59年度1次隊	農村報知新聞	1988	24

中南米

ボリヴィア	小泉雅弘	平成3年度3次隊	NGO協力情報	1993	25
コロンビア	板橋宏暁	昭和62年度3次隊	野菜園芸技術	1990	27
コスタ・リカ	広瀬　泉	昭和61年度1次隊	農村報知新聞	1989	29
コスタ・リカ	間瀬朝夫	昭和62年度2次隊	日本農民新聞	1990	31
コスタ・リカ	執印祐輔	昭和63年度1次隊	農村報知新聞	1990	32
グァテマラ	林かおり	昭和63年度3次隊	農村報知新聞	1990	34
グァテマラ	小坂重樹	平成3年度3次隊	農村と都市を結ぶ	1994	35
ホンデュラス	大道雅之	昭和60年度1次隊	農村報知新聞	1990	37
ホンデュラス	浜田守彦	昭和61年度1次隊	農村報知新聞	1990	38
ホンデュラス	伊崎弘志	平成元年度1次隊	全国農業新聞	1990	40
ホンデュラス	菊地撤吉	平成3年度1次隊	農機新聞	1993	41
パラグァイ	村上　健	昭和62年度3次隊	農村報知新聞	1990	43

大洋州

パプア・ニューギニア	渡辺晃徳	昭和63年度1次隊	機械化農業	1992	45
パプア・ニューギニア	大和田俊雄	昭和60年度3次隊	全国農業新聞	1989	48
パプア・ニューギニア	鶴田博信	平成元年度3次隊	農村報知新聞	1993	49
トンガ	石間　宗	昭和62年度2次隊	農村報知新聞	1989	50
西サモア	兵藤吉之	昭和60年度2次隊	農村報知新聞	1990	51

果　樹

アジア

中華人民共和国	阿部喜至夫	平成3年度2次隊	日本農業新聞	1995……1

アフリカ

エティオピア	橘田　博	平成元年度1次隊	日本農民新聞	1990……3
マラウイ	草地千里	平成3年度2次隊	農村報知新聞	1992……4

中南米

ボリヴィア	石岡　司	昭和61年度1次隊	農村報知新聞	1989……6
ホンデュラス	間瀬　満	昭和62年度3次隊	果実日本	1990……7
パラグァイ	武岡鳴人	平成元年度2次隊	農村報知新聞	1992……8

きのこ

アジア

マレイシア	金田克己	平成元年度1次隊	特産情報	1991……1

病虫害

アジア

マレイシア	廣西秀俊	昭和62年度1次隊	農村報知新聞	1988……1

養　蚕

アジア

タイ	遠藤　久	昭和63年度3次隊	農村報知新聞	1993……1

養　蜂

中南米

グァテマラ	大木智之	平成3年度2次隊	ミツバチ科学	1993……1

家畜飼育

アジア

マレイシア	飯塚　昌	昭和59年度3次隊	畜産コンサルタント	1989……1
フィリピン	小路克雄	昭和57年度2次隊	農村報知新聞	1989……2
スリ・ランカ	鈴木篤志	昭和61年度2次隊	農村報知新聞	1989……4
スリ・ランカ	上野三枝子	昭和62年度1次隊	農村報知新聞	1989……5
スリ・ランカ	西谷義徳	平成元年度3次隊	デーリィマン	1992……6
タイ	里見洋司	昭和60年度3次隊	畜産コンサルタント	1990……7
タイ	佐藤久明	昭和62年度3次隊	畜産コンサルタント	1991……9
タイ	小西洋一	平成2年度2次隊	畜産コンサルタント	1991……11

アフリカ

ケニア	森川伸昭	昭和63年度1次隊	畜産コンサルタント	1991……12
マラウイ	牧野真理	昭和60年度3次隊	養牛の友	1988……13
マラウイ	本山　彰	昭和62年度2次隊	デーリィマン	1989……15
セネガル	菊池香波	平成元年度1次隊	畜産コンサルタント	1993……17

中南米

コスタ・リカ	中條信介	昭和60年度2次隊	デーリィマン	1989……19
コスタ・リカ	下久保綾子	平成3年度1次隊	NGO協力情報	1993……20

大洋州

パプア・ニューギニア	千葉善康	昭和60年度2次隊	畜産コンサルタント	1989……22

養　鶏

アフリカ

マラウイ	原口敏明	昭和60年度2次隊	養鶏の友	1989……1
マラウイ	吉岡　剛	昭和61年度1次隊	養豚の友	1989……3
マラウイ	吉岡　剛	昭和61年度1次隊	鶏友	1989……4
マラウイ	阿久津基弘	平成3年度3次隊	鶏友	1993……5

大洋州

パプア・ニューギニア	丸尾　朗	昭和55年度2次隊	鶏友	1988……6

獣医師

中近東

シリア	宮川幸二	昭和62年度1次隊	臨床獣医	1989……1

アフリカ

マラウイ	久保田早苗	昭和62年度2次隊	臨床獣医	1989……3
マラウイ	橋本能子	平成2年度2次隊	NGO協力情報	1994……5
マラウイ	樋口　充	平成3年度1次隊	WAN	1994……7
ニジェール	平林輝美	昭和62年度2次隊	畜産コンサルタント	1989……9
ザンビア	萩原　博	昭和57年度2次隊	獣医畜産新報	1989 ……11
ザンビア	蔦沢秀之	昭和61年度1次隊	畜産コンサルタント	1989 ……13
ザンビア	石原登美子	昭和61年度3次隊	畜産コンサルタント	1990 ……15
ザンビア	木下秀俊	平成元年度1次隊	臨床獣医	1993 ……17
ザンビア	本谷美智代	平成2年度1次隊	デーリィマン	1993 ……19

中南米

ボリヴィア	藤井淑子	昭和62年度1次隊	鶏友	1989 ……20
ボリヴィア	雷　光博	平成2年度3次隊	臨床獣医	1994 ……23
パラグァイ	三枝正彦	昭和61年度2次隊	養牛の友	1989 ……25
パラグァイ	花井博之	昭和62年度2次隊	畜産コンサルタント	1990 ……28
パラグァイ	大澤健司	平成元年度1次隊	臨床獣医	1992 ……30
パラグァイ	井星哲也	平成元年度3次隊	臨床獣医	1993 ……32
ペルー	松嶌恵介	昭和61年度1次隊	畜産コンサルタント	1988 ……34

土壌肥料

アジア

マレイシア	比嘉勇雄	昭和62年度3次隊	農村報知新聞	1989……1
タイ	高橋裕文	平成元年度2次隊	農機新聞	1991……2

アフリカ

ニジェール	橋本康子	平成元年度2次隊	農村報知新聞	1991……3

農業土木

アジア

ラオス	石綿浩一郎	平成2年度3次隊	海外新聞	1992……1
ネパール	片山正巳	昭和58年度2次隊	農村報知新聞	1988……2
タイ	堤　朝弘	昭和61年度3次隊	測量	1990……4

アフリカ

エティオピア	塩飽康利	昭和61年度2次隊	測量	1989……6
エティオピア	小島正男	平成元年度1次隊	測量	1991……8
マラウイ	尾関　修	平成元年度2次隊	測量	1992……9
タンザニア	田井勇次	昭和62年度2次隊	日刊建設工業新聞	1989 ……11

中南米

ホンデュラス	石井昌樹	昭和62年度2次隊	農村報知新聞	1991 ……13
ホンデュラス	佐藤勝正	平成元年度1次隊	土木施工	1992 ……14
ペルー	江塚利幸	昭和57年度3次隊	土木施工	1989 ……16

農業機械

アジア

バングラデシュ	小笠原一博	昭和59年度3次隊	機械化農業	1989……1
フィリピン	角川　修	昭和59年度1次隊	技術と普及	1988……3
タイ	中野晴彦	平成元年度1次隊	日本農業新聞	1991……4

アフリカ

ガーナ	金子純久	昭和56年度2次隊	機械化農業	1988……5
ガーナ	福永郁夫	昭和62年度2次隊	機械化農業	1988……8

中南米

コスタ・リカ	富岡丈朗	昭和60年度1次隊	機械化農業	1989……9

大洋州

パプア・ニューギニア	出井　努	平成3年度2次隊	農機新聞	1994 ……10

農業協同組合

アジア

マレイシア	多勢伸一	平成元年度2次隊	農村報知新聞	1991……1

中南米

パラグァイ	上山則夫	昭和62年度2次隊	農村報知新聞	1989……2

村落開発普及員

アジア

バングラデシュ	酒井強志	平成元年度3次隊	海外新聞	1992……1

アフリカ

ガーナ	武辺寛則	昭和61年度2次隊	農村報知新聞	1989……2
ガーナ	新岡隆二	平成元年度2次隊	海外新聞	1992……4

中南米

コロンビア	相馬多一郎	昭和62年度2次隊	日本農業新聞	1990……5
ホンデュラス	粟野久夫	昭和61年度2次隊	農村報知新聞	1990……6
ホンデュラス	青西靖夫	昭和62年度2次隊	日本農業新聞	1990……8
ホンデュラス	木伏克実	昭和63年度2次隊	日本農業新聞	1990……9

大洋州

ソロモン諸島	石崎程之	平成2年度1次隊	農機新聞	1994 ……10

食品加工

中南米

ホンデュラス	大淵喜隆	昭和59年度2次隊	水産世界	1988……1

農産物加工

アジア

マレイシア	梅澤みき	平成元年度1次隊	農村報知新聞	1991……1
マレイシア	栗原優子	平成2年度1次隊	農機新聞	1992……2

中南米

ボリヴィア	百田龍治	昭和62年度2次隊	日本農業新聞	1990……4

水産物加工

中南米

コロンビア	石田光洋	平成元年度3次隊	水産世界	1993……1

森林経営

アジア

スリ・ランカ	野々部誠	昭和61年度2次隊	東洋医学	1992……1

アフリカ

マラウイ	坂井勇夫	昭和61年度2次隊	農村報知新聞	1992……2
タンザニア	大沢幸生	昭和61年度3次隊	畜産コンサルタント	1989……4
タンザニア	安　洋巳	平成元年度1次隊	測量	1992……6

植　林

中南米

グァテマラ	金子修一	平成3年度1次隊	林業技術	1993……1

漁具漁法

アジア

スリ・ランカ	倉田九豪	昭和61年度2次隊	水産世界	1989……1
スリ・ランカ	倉田九豪	昭和61年度2次隊	海外新聞	1989……3

アフリカ

ガーナ	高橋信吾	昭和60年度1次隊	水産世界	1989……4
ケニア	森丘貴宏	昭和60年度3次隊	水産世界	1989……6

中南米

ホンデュラス	坂田重登	平成元年度3次隊	水産世界	1991……8

大洋州

パプア・ニューギニア	伊藤淳雄	昭和63年度2次隊	水産世界	1992 ……10
ソロモン諸島	石井優一	昭和61年度1次隊	水産世界	1989 ……12
ソロモン諸島	高橋和久	昭和62年度2次隊	水産世界	1989 ……15
ソロモン諸島	戸田誠人	昭和62年度3次隊	水産世界	1990 ……17
ソロモン諸島	杉山俊士	平成2年度1次隊	海技士コース	1993 ……19

養　殖

アジア

マレイシア	飯沼光生	平成2年度3次隊	養殖	1993……1
ネパール	川田晃弘	昭和62年度3次隊	水産世界	1990……3
フィリピン	新田美砂人	平成2年度2次隊	養殖	1993……5

中近東

モロッコ	村田　忠	平成元年度2次隊	養殖	1992……7
シリア	阿部倫久	昭和60年度1次隊	水産世界	1989……8
シリア	神尾誠司	昭和61年度2次隊	水産世界	1989……10

アフリカ

ケニア	伊藤　毅	昭和62年度3次隊	水産世界	1990……11
ケニア	堀江克之	平成2年度3次隊	養殖	1994……13
セネガル	鈴木　稔	昭和57年度2次隊	水産世界	1988……15

中南米

ボリヴィア	石塚治男	昭和58年度3次隊	水産世界	1988……18
ボリヴィア	石塚治男	昭和58年度3次隊	水産界	1989……20
ボリヴィア	澤志泰正	昭和62年度2次隊	養殖	1989……22
ボリヴィア	澤志泰正	昭和62年度2次隊	水産世界	1989……24
コスタ・リカ	行平英基	昭和60年度2次隊	水産世界	1989……27
ドミニカ共和国	岡本　一	平成元年度3次隊	水産世界	1992……29

大洋州

パプア・ニューギニア	井川龍二郎	昭和60年度2次隊	水産世界	1989……30

農林統計

アフリカ

マラウイ	馬屋原一孝	平成3年度1次隊	日本農業新聞	1994……1

水産統計

大洋州

フィジー	梅村哲夫	昭和62年度3次隊	水産世界	1989……1
パプア・ニューギニア	伊東京子	昭和56年度3次隊	水産世界	1988……3

Japan Overseas Cooperation Volunteers

食用作物・稲作

〈食用作物〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ブータン	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
インド	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2
ラオス	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3
マレイシア	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11
ネパール	7	2	0	0	2	1	0	1	0	0	0	13
フィリピン	13	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	16
スリ・ランカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
タイ	2	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	4
〈アジア地域〉	35	3	1	0	5	2	1	2	2	1	1	53
テュニジア	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3
〈中近東地域〉	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	3
ガーナ	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
コートジボアール	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	3
ケニア	0	3	0	1	0	0	1	0	0	0	0	5
リベリア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ニジェール	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
セネガル	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
タンザニア	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
ザンビア	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4
〈アフリカ地域〉	3	4	0	1	0	3	1	1	3	1	4	21
コロンビア	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	4
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
ホンデュラス	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4
ニカラグァ	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2
パナマ	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	0	4
パラグァイ	8	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	12
ペルー	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
〈中南米地域〉	13	3	0	3	1	4	2	1	1	2	1	31
フィジー	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
パプア・ニューギニア	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
サモア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈オセアニア地域〉	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	3
合　計	52	11	1	4	7	10	4	4	7	4	7	111

〈稲作〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	42	1	0	1	0	0	2	0	1	1	0	48
カンボディア	2	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	4
中国	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
インド	31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31
ラオス	16	0	1	1	0	1	0	0	0	1	1	21
マレイシア	37	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39
ネパール	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4
フィリピン	52	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	54
スリ・ランカ	6	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	7
〈アジア地域〉	189	3	1	2	1	3	2	1	3	3	1	209
モロッコ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈中近東地域〉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
エティオピア	2	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4
ガーナ	10	0	1	1	0	0	1	0	1	0	0	14
コートジボアール	0	0	0	0	0	2	0	1	1	1	1	6
ケニア	34	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	36
リベリア	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
ニジェール	1	1	0	2	1	1	0	0	0	0	0	6
セネガル	10	1	1	2	0	0	1	0	1	2	0	18
タンザニア	11	1	3	1	0	2	1	2	0	0	1	22
ザンビア	8	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	11
〈アフリカ地域〉	81	5	6	6	2	5	3	4	4	4	3	123
ボリヴィア	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
コスタ・リカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ドミニカ共和国	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
ホンデュラス	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ジャマイカ	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
パナマ	0	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	5
ペルー	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈中南米地域〉	4	0	1	3	1	1	0	1	1	0	1	13
フィジー	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4
パプア・ニューギニア	1	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	5
〈オセアニア地域〉	3	2	0	1	0	2	0	1	0	0	0	9
合　計	278	10	8	12	4	11	5	7	8	7	5	355

深澤公史 Hiroshi Fukasawa
派遣国：リベリア
職　種：食用作物
隊　次：昭和60年度1次隊（活動期間1985年7月～1988年1月）
出身地：栃木県
初　出：「農村報知新聞」1983.8.28（㈱農村報知新聞社）

人口増で焼畑から水稲へ

アフリカというと、エチオピアのような飢えに苦しむ人々の姿がすぐ頭に浮かぶが、リベリアでは、そういった人の姿を見ることはない。首都モンロビアの商店街には外国製品が所狭しと並んでおり、予想以上に「豊かな国」という印象であった。しかし、地方での生活は都会でのそれとは全く異なり、貧富の差は大きい。

私の配属先は、農業省の管轄下にある「小農家対象稲種子プロジェクト」である。世界銀行の援助で1982年2月からスタートしたもので、農業試験場が奨励する優良品種をプロジェクト付属の農場と契約栽培農家が生産し、各地の農業プロジェクトや農家への種籾の供給を行っていた。籾の乾燥から消毒に至るまで一貫した種籾処理工場を持っており、1985年には450トンの種籾を供給した実績を持つ。当時はリベリアの稲作の基盤とも言えるプロジェクトであった。

私が赴任した時点で、このプロジェクトが発足してからすでに3カ年が経過しており、運営は軌道に乗っていた。協力要請事項の一つであった水稲の種子生産も、すでにスタートしていたが、その栽培面積は約50ヘクタールと、陸稲の約500ヘクタールに比べてわずか。というのは、リベリアでは焼畑による陸稲栽培が主流だからだ。1987年の統計によると、陸稲の栽培面積は全体の約9割を占め、水稲は残りの一部に過ぎない。収量を見ると、陸稲の11.5トン／ヘクタールに対して、水稲は2～3トン／ヘクタールであり、一見、水稲のほうが効率よく思える。しかし、労働力、肥料代、農具代などがかなりの負担になり、結局現地農民は、簡単で投資と労働力が少なくてすみ、ある程度の収穫が約束される焼畑による陸稲栽培に依存してしまうのである。彼らにとっては、土地面積当たりでなく、労働力と資材の投入量当たりの収穫量が問題なのだ。

だが、陸稲栽培では連作障害があり、2年、あるいは3年おきに新たな土地に移り、森林を伐採して焼かなければならない。一昔前は、再び同じ土地に戻ってくるまでに30～40年の休閑期があったが、人口が増加した現在では、そのサイクルも10年と短かくなっている。そのため、森林破壊や土壌流出といった問題が表面化しつつある。それを防ぐためにも、水稲栽培の普及は必要だ。また、現地の農民が水稲を嫌う理由の一つに風土病もある。水田となる湿地には住吸血虫などがおり、うっかり裸足で入ると、住吸血症や破傷風などに感染してしまうのだ。これの解決も重要な問題であろう。

乾期には、各品種ごとの種子の特徴や精米上の品質特性なども調べた。種籾の生産プロジェクトが精米上の品質特性検査を行うのは業務外のことのように思えるが、我々のプロジェクトが生産する種籾が一般農家に行き渡り、そして最終的には市場に流通するのだから、種籾生産者としても知っておく必要があったし、将来、米のグレーディング・システムを導入する際に役立てばと考えたからだ。

リベリアでは、日本のような米の品種や品質の違いによる価格差がない。また、特に品質がよいとは思えないアメリカからの輸入米が国産米と同価格で販売されている。こうした状況では農家の生産意欲が高まるはずもない。米を主食とするリベリアで、その自給率は70%（1985年、WARDAの統計）。現在はまだ質より量が問題だが、グレーディング・システムの導入はいずれ必要になってくると思う。

（了）

三浦 悟 Satoru Miura
派遣国：ラオス
職　種：稲作
隊　次：平成3年度3次隊（活動期間1992年4月～1994年4月）
出身地：兵庫県
初　出：「農村報知新聞」1993.11.28（㈱農村報知新聞社）

退職しラオスへ、日本の種をまく

家庭がある身での決心

私が海外に興味を持ち始めたのは、農業高校に入ってからでした。高校では海外研究部に所属し、他国の情勢などを研究していましたが、やはり実際に自分の目で確かめないことには何も始まらないと思い、JICAのお世話もあって南米、中国へと足を運ぶ機会にも恵まれました。

とは言っても、短期間の旅行気分では実際何の成果も得られることはできません。それからのち農業関係に就職した私は、十年余りの生活の中で結婚し、子供もでき、何一つ不自由のない暮らしを送ってきました。しかし時が経つにつれ、今しかできない何かがあるのではないか、このままで良いのだろうかという思いが次第に沸き上がってきたのです。

私は職場と家庭のある身です。二年間日本を離れることにより、特に家庭において不自由をするのは目に見えてわかっていました。

しかし、自分自身の兼ねてからの夢であり、将来の家庭の夢も考慮に入れた上で、思い切って参加したのが青年海外協力隊でした。

"日本の種"とたかをくくった私

協力隊へは平成２年の春募集で採用され、同時に職場を退職。翌年１月から長野県駒ケ根で訓練が始まり、難しいラオス語に悪戦苦闘する日々が続きました。77日間の派遣前訓練も無事終了し、４月には不安と期待の中、待望の協力隊員としてラオスの地を踏むに至ったのです。

日本人からあまり知られていないラオスは、代表的な観光地や資源も無く、そのうえ内陸国であるため他国からも閉ざされ、発展が著しく遅れています。空港上空付近から見たラオスの第一印象は、緑一面の田と林であった事を今でも思い出します。

私は地方隊員第一号として、首都ビエンチャンから南へ400km離れたサバナケット県農林局種子改良センターへ着任しました。実際に私の活動する支部種子改良センターは、ここからさらに12km離れたターサノ地区農場にあります。

さて当初は、日本から持参したもみ種子がどれだけラオスの気候に馴染めるか楽しみでした。種蒔きは６月半ば、田植えは７月下旬と、日本と比べると作業は全て１ケ月遅れで行われます。これならきっと収量が見込めるだろうと期待しながら出穂を待っていると、何と草丈が成長しないまま、わずか１週間で穂が出てしまったのです。日本からのもみ種が即収量アップにつながるものと、気軽な気持ちでいた私が甘かったようです。

原因は、どうやら天候と根付けの時期にあるようです。ラオスもタイも同じですが、雨水を重視した稲作体系が基本であり、降雨を待ってから田植えが始まります。メコン川沿いにも圃場は沢山あり、河水を利用したポンプも設置されてはいますが、水位が一定の高さにまで達しないと作動せず、結局降雨を待つしかありません。

日本でも、通常七月に入ってからの田植えは収量増につながりません。にも関わらず、ラオスではこの時期に田植えをせざるを得ないのです。気候は違えど、稲や穂の作られる時期に根と茎がしっかりしていないと穂作りは中途半端になるでしょう。

またラオスの技術水準は、日本の昭和35年～40年代のようです。日本は外国との貿易を基に農業技術を身に付けてきました。しかし、この国は隣接国(特にタイ)が機械化の道を進み、その影響でトラクター等の機械を得られたものの、栽培技術管理体系は未だ確立されていません。

このように今後の私の活動や、後に続く協力隊員に課せられた課題は大変大きいものです。しかし、正面から地道に取り組んでゆくしかありません。

日本の誇りと途上国への尊重

さてラオスの人々との交流ですが、最近では行動範囲も広がり、趣味の合った仲間とテニスを楽しんでいます。テニス後もお互いの家を行き来して、料理パーティーを開いています。

ラオスでは皆と共に食事をとるのが日常で、１人で食事をしていると、とても不思議がられます。どこの家庭でも食事を遠慮することは失礼にあたり、一緒に食べると大変喜んでくれます。

子供たちに与えられる本も玩具も、日本と比べた

ら殆ど無いに等しいでしょう。学校への通学距離も遠いためか、事務所に来て１日中水浴びをしたり、木登りをしながらのびのびと遊んでいます。

また家の手伝いも怠らず、10歳くらいになるとバケツを肩に担ぎ、毎日近くの井戸へ水を汲みに行くのが日課となっています。子供の頃からよく働く丈夫な身体には、いつも驚かされています。このようにラオスの子供たちは、日本の塾や競争社会と違って自由に大きく育っています。

ラオスは日本の40年前のような社会です。教育、文化、交通、医療面においても約束事が少なく、考えられないような経済の遅れがあります。

日本は戦後、復興からわずか数十年で先進国の仲間入りをしました。軍国主義から資本主義への移り変わりの中に、日本人の精神力の強さがあったからこそ、わずかの年月で目覚ましい発展を遂げたのだと思います。このように自らの力で得た社会ゆえに、今後も汚すことなく他国と手を取り合って発展してゆかねばならないでしょう。

そのためには、日本企業がいきなり途上国へ進出し無秩序な開発を行うより、私たち協力隊員がその国の人と共に働き、生活することで日本人への理解と信頼を深めてもらい、その上で援助の手を伸ばし、国の発展をはかるのが最善であると思われます。

現地で活動する中で、こんな事もできないのかと落ち込むことも多く、しばしば限界を感じる時もあります。しかし限界の中でやり遂げる仕事の方が、喜びも一層わいてくるものです。

私たち一人一人は小さな手助けしかできません。しかし共に仕事をし、汗をかき、知恵を出し、苦労もし、失敗があって成長する。少しずつではあるが伸びた喜びが大きい、それが草の根活動であり、協力隊の姿だと思います。短時間の異国生活では味わえないものを精一杯感じ取り、残りの任期に力を注ぎたいと思っています。

（了）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

牛丸善博 Yoshihiro Ushimaru
派遣国：ラオス
職　種：稲作
隊　次：平成5年度1次隊（活動期間1993年7月～1995年7月）
出身地：岐阜県
初　出：「NGO協力情報」1995.2.20（(社) 国際食糧農業協会）

ラオスの稲作援助で頑張る
――農業短期大学で稲作講座を担当――

営業時間に必死の熱唱

私は現在、青年海外協力隊員として、ラオス北部の農業短期大学で活動している。ここは、北部ラオス7県で唯一の農業短期大学で、各地方から将来の公務員を目指す学生が集まってくる。1学年40名、計120名の学生(この大学は3年制)と20名の教職員からなる小規模な学校で、18～21歳の学生が全寮制で生活している。

さて、私は本校において1週間に2回、1回2時間の持ち時間で稲作の講座を担当している。日本の農業高校で働いていた頃の、1週間に20時間以上の持ち時間を考えると、その少なさに驚かされる。しかし、満足にラオス語もできない初期の頃には、週に4時間の授業時間でも少ないとは言えなかった。

語彙数の少ない辞書を使い、それでも分からない単語は、ラオス人に聞きながら授業の準備をするわけだが、時には準備不足のままに授業を迎えてしまうことがある。でも、それを表情に出すわけにはいかない。何しろ校長が「まだ講座を持つのは早い」というところを、「私はできる」と主張して持たせてもらった講座だ。弱音を吐いては、信用を無くしてしまうし、少なからず意地もあった。

そこで、そんなときは、前から準備しておいたかのように日本の歌を教えた。日本の歌を教えるのには準備は不必要だからだ。きちんと正装して、まじめな顔をして座っている学生を前にして「故郷」や「雪やこんこん」を熱唱する自分は、今思うと赤面ものだが、あの頃は真剣だった。「うさぎおいしかのやま‥」歌は勝手に変調を繰り返した。でも、何を考えているのかよく分からない学生や、私を黙って観察している担当の先生の前で長い沈黙は避けたかった。授業の質や、教える内容など考えなくてはならないことは沢山あるが、それよりも2時間を乗り切ることで精一杯だった。

そして、学生はそんな私をよく支えてくれた。そう、共に歌って笑ってくれたのだ。また、中には勘のいい学生もいて、つたない私のラオス語を本来のラオス語に直して説明してくれたりもした。最初の半年何とか乗り切ることができたのは、このラオス人の気質によるところが大きい。

そんな最初の学期が終わった。学期が終わると、一週間程度の休みになり、職員会議が開かれる。その学期の反省点を話し合い、次の学期の計画を決めるためのものだ。激しくラオス語が飛び交う中、私はただ異国を感じて座っていた。何を話しているのか全く理解できない。でも、その中で理解できた部分が少しだけあった。それは教務主任が私の授業について尋ねたところだ。「どうだ、ソンバソン(私のラオス名)はちゃんと教えているか」「授業はやっているが、学生は余りわかっていないようだ」「授業の内容はどうだ。栽培方法などきちんと教えているのか」「いやとてもとても。すごく基本的なことをやっているだけだ」

それを聞いて、頭の中が真っ白になった。私の真剣さは、ラオス人にも伝わっているのだと勝手に思い込んでいた。でもそれは、ラオス側の求めていることではないのだ。当たり前のことであるが、改めて口にされて、自分の実力と、求められていることの違いを痛感した。

種籾入手の悪戦苦闘

私が以前からやりたいと思っていたことに、日本の農業高校で教えていたような問題解決学習（プロジェクト学習)があった。教科書的な知識を教え込むよりも、学生が自ら農作物を観察しながら、問題点や疑問点を発見し、解決していくという手法だ。2年という短い任期のことや、学生の活動環境が一人ひとり大きく異なることを考えると、自ら解決するという意識を持たせることは効果的であり、このためには、まずプロジェクトの核となる実験を始めること、そしてそれを授業と組み合わせていく必要があった。

そこで、まず種籾を入手しようと考えた。あちこちに陸稲もあり水田もあるため、当初種籾の入手は容易であるように思われた。そこで、カウンターパート(現地助手)として一緒に働いているラオス人のウタイさんに、「ラオスで栽培している稲の種籾を10種類ほど集めてくれないか」と話してみた。彼も

私と同じように種籾の入手は容易だと思っていたらしく、比較的軽く返事をしてくれた。

種籾の方は任せておけば大丈夫と考え、私は協力隊事務局へ最高最低温度計や、天秤など、実験に最低限必要と思われるものの援助をお願いした。代用のきくものは、それを使うとしても、代用のききにくい測定器具は、やはり欲しかったからだ。

必要と思われる物品をピックアップし、事務局にお願いした後、ウタイさんに種籾の方はどうなっているか尋ねた。すると、種籾の入手は思ったより難しいという返事だった。彼は、引き続き親戚などにも聞いてみると言ってくれたが、どうもはっきりしない。

そこで、次に農林局へ種籾の提供をお願いした。ここも、最初は快く引き受けてくれるのであるが、現実には種籾の入手は困難のようであった。最悪のケースも考え、事務所に紹介状を書いていただき、ビエンチャンの種籾会社から6種類の稲を入手することができた。でも欲を言えば、広く在来の稲が欲しかったのだが・。

そこで、最後に私とウタイさんが頼ったのが、ラオスのIRRI(国際稲研究所)である。ルアンパバーンに在るIRRIの代表者はオランダ人で、陸稲の専門家だ。ほとんど初対面であったが、私が計画と問題点を話すと、陸稲の種でよければ何とかしようと非常に協力的な返事をしてくれた。種籾の入手が容易だと思っていた頃なら、水稲の種籾にもっと固執したのだろうが、その時は種籾なら何でもよいという感じだった。

ボーペンニャンで頑張る日々

こうして待つこと約1か月。IRRIからは78種類の種籾を提供してもらうことができた。そして半年あきらめていた農林局からも3種類の種籾の提供を受けることができた。最終的には、あちこちから98種類の種籾を提供してもらうことができた。

この提供してもらった種籾を学生と一緒にバケツに土を入れて、1ポット3粒ずつ撒いた。5月15日のことだ。そして、苗がある程度大きくなったところで、ひと株を残して間引きした。最初は、本当に育つものかどうか心配だったが、害虫の被害を受けながら、ほとんどの品種は順調に育った。現在平均120日くらいで収穫できるラオスの稲は、もうほとんどが収穫期を迎えている。でも、残念なことに、ほとんどの稲は鶏の被害を大きく受けて、まともなデータをとることができなかった。被害を発見した時点で、魚を捕るための網を使って稲を囲ったり、見つける度に鶏を追うことを繰り返したが、結局思わしい結果にはならなかった。実際のところ、2年の任期の中に稲の成育をすべて見ることができるのは、この機会しかないので、非常に残念であるが今となっては仕方がない。このほか、せっかく撒いた野菜を水牛に食われたり、余りに雨が多くて実験田が水没したりと、予想外の被害は後を絶たない。

一日目を離すと、予想外の被害を受けるこの国の農業の現状に驚きながら、またあきらめることも学んだ。何か起こっても、「ボーペンニャン(別に我慢できないほどのことじゃない)」を繰り返すことにしている。そうするうちに、また新たな活力もわいてくるというものだ。

今後のラオスの課題

ところで、ラオスの稲作の現状に少々だが触れてみたい。この国では、主食用にカオニオと呼ばれるもち米を食べている。最近では、裕福なラオス人の中でうるち米を食べる人もいるが、多くはもち米を蒸したものが主である。箸もうまく使いこなすが、ご飯は手で直接握って食べる。そのため、栽培種も多くはもち米である。陸稲で1ヘクタール当たり1トン強、水田では2から3トンという現状のようである。この話が、どの程度信用できるものかわからないが、学校の職員の多くは、このくらいの数値を口にする。

余り飢えているというラオス人を目にすることはないが、森林保護の観点から、焼畑を減らそうとしている現状を考えると、水田での単収を増加させるための技術は必要のように思われる。また、北部は地形的にどうしても陸稲に頼らざるを得ないように思われる地域もあり、他の作物との混作も含めて、同じ畑での連作を可能にする技術の確立、普及が必要だと思われる。

また隊員としては、短期大学のカリキュラムの整備、実習や、授業のやり方について今後とも微力ながら関わっていくことになると思う。何をしたらよいかという部分や、人間関係で悩んでいる隊員も多いと聞く。その点、私は恵まれていると思う。授業や、カウンターパートの指導が、はっきり私の仕事として決められているからだ。今後も語学力や技術力の向上を目指しつつ、より多くのラオス人と酒を酌み交わしていきたいものだと思う。

(了)

小田島成良 Narlyoshi Odashima
派遣国：マレイシア
職　種：稲作
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1989年2月）
出身地：岩手県
初　出：「日本農業新聞」1989.3.19（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種は様々な分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回は、その1つ、マレーシアで稲作の指導に活躍している隊員のレポートを紹介する。

*　　*　　*

チーム協力の新たな試み

マレーシアの主食は米。以前はタイからの輸入が多かったが、かんがい施設の整備、品種改良、二期作の推進などで生産量は飛躍的に向上している。

私はフェルクラ(マレーシア土地再開発公団)・スプランペラ・プロジェクトに属し、稲作では初めての試みのエステート方式(フェルクラの職員がほ場を管理)の4500㌶もの広い地域のプロジェクトに取り組んだ。

大規模でざん新な試みであるため、フェルクラ本部は特別プロジェクトに指定、そのため、このプロジェクトは成功が絶対条件。このような中、「稲栽培の何たるかを考える前に、エステートのマネージメントを再検討」を課題とし、作目は異なるが、民間エステートの労働者管理システムと作業マニュアル、近くの先進稲作地域の大規模ほ場管理技術を取り入れ、スプランペラ用に融合させればよいと考えた。

一年前に、日本に申請していた追加メンバーと必要機材がそろい、さらに計画を練り、チーム一体となってプロジェクトを推進、今はまだ階段を一段上ったところだ。本当に大変なのは、実際的な活動が進んでからで、さらにチーム解散のタイミングであると思う。そして何よりも肝心なのは、当該部局の取り組み姿勢であることは言うまでもない。

（了）

田中修二 Syuji Tanaka
派遣国：マレイシア
職　種：稲作
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1990年3月）
出身地：東京都
初　出：「技術と普及」1989.8.25（(社)全国農業改良普及協会）

まったく羨ましい国!?マレイシア

昭和62年12月、私はマレイシア国クランタン州のKADA（クムブ農業開発公社）へ、稲作隊員として派遣された。帰国予定は平成元年12月中旬である。

ここクランタン州は、マレー半島の東海岸にある。気候は日本の7月初旬が1年中続くと思ってもらいたい。10月から2月まで雨期となり、特に11月下旬から12月は年に1，2回洪水となり、去年は死者も出た。

マレイシアの人口構成は、全体としてはマレイ系55%、中国系35%、インド系10%で、複合民族国家的要素が多分にみうけられる。しかし、クランタン州だけではマレイ系93%と他の人種を圧倒しており、言語、宗教等でマレイ人色が濃く出ている所である。その分貧困層が多く、西海岸と比較して、経済、社会の発展は遅れている。

平均的マレイ人は農村に住み、貧困層を形成している。イスラム教徒であり、生活はイスラム教の教えを中心として営まれている。異教徒である日本人の私には、時としてこのマレイ人のイスラム教への信仰心が溝となることがある。人間関係がうまくいかない場合もあり、宗教の持つ影響力の強大さを思い知らされる。

家は高床式木造住宅であり、周りを木に囲まれているため、日中でもひんやりとして過ごしやすい。金持ち層が好んで住みたがるレンガ作りの家は、綺麗ではあるが、日中の暑さには閉口する。ここマレイシアでは木造住宅が一番似合っている。

マレイシアの国土は日本の9割、人口は1割強であり、食物は豊富、石油資源はあり、子供が10人いるような家でも、生活に困ることはない。職のない若者が多く、いたる所でたむろしているが、彼らも生活に困っているわけではない。しかしながら多くのマレイ人は、時間の浪費をしている。1日が無意味に終わっていく。日本人で彼らの生活を羨ましく思う者がいるであろうが、彼らを一年中見ている私には、人生の浪費にしか見えない。
日本人のように1年中仕事でも、人生の喜びを知りえないであろうが、決してマレイ人も人生の喜びを知ってはいない。

主食は米であり、ごはんの上に魚、肉、野菜等をのせてカレーをかけて食べる。とうがらしをふんだんに使い、からい。慣れるまでは、水を片手に持ちながら食べることになる。現地の人は、はしもスプーンも使わずに、右手を器用に使いながら食べている。

稲は日本品種のジャポニカと異なり、インディカとよばれる長粒種であり、炊いても日本の米のようにねばりはなく、さらっとしている。

マレイシア産の米の食味は決して良いほうではない。隣に世界最大の米の輸出国であるタイ国があり、タイ産の米の安価なこと、そして食味も良好であることより、マレイ人も好んでタイ米を食べている。現在、米の自給率は70%であり、年々減ってきている。米の未来は決して明るいものではない。

農民は都市部に近い者ほど兼業農家が多い。それは、1家族当り土地所有が0.5㌶にも満たない者が多く、農業収入だけでは生活できないことにもよるが、農業収入と農業外収入とでは、大きなひらきがあるためでもある。また、若者は街で働きたがるので、農民の高年齢化が進んでいる。離農者も多く、耕作放棄田がいたる所にあり、そこは雑草が生い茂り、放し飼いの牛や山羊が草をはんでいたりする。

現在の日本の農業問題との類似点も多く、米の貿易自由化問題を考えてみると、ここのような耕作放棄田が、やがて日本にもたくさんできるのではないかと、そら恐ろしくもなる。

稲は種をまいてから135日で刈り取ることができ、年二期作である。日本の農家が苦労して苗を育てているのと比較すると、ここでは種をまけば後は何もしなくても、りっぱな苗に育ってくれる。そして田植え後も肥料まきと、除草剤をまく程度の作業で、田は荒れ、草ぼうぼうでも、収量は日本の半分はある。年二期作と考えれば、年収量は同じである。
その労働力から考えてみれば、マレイシアの方が楽に稼れる。太陽の恵みの大きさを思い知らされる。

しかしながら、農薬などは日本で販売禁止の物が、無造作に使われている。この点は無知が生んだ悲劇である。人体に及ぼす影響も大きいであろう。

私の仕事は、農村での普及技術のデモンストレーション、実験及びKADAの普及活動への助言である。

今の生活に満足し、辛い思いまでして、生活の向上を望んでいない人間に、技術の普及や助言をするのは難しいことで、私を悩ましている。国民性、生活習慣、気候、他の条件を考えてみれば、マレイ人に日本人のような仕事を望むのは無理であろう。

日本人より大きな家に住み、自動車を持ち、腹いっぱい食べることもでき、仕事ものんびり少しすればいい。まったく羨ましい国である。

（了）

佐藤秀樹 Hideki Sato
派遣国：マレイシア
職　種：稲作
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1991年9月）
出身地：青森県
初　出：「農村報知新聞」1991.9.6（㈱農村報知新聞社）

心が澄みきった人々

マレーシアの首都クアラルンプールを出発して、私の配属先であるFELCRA(フェルクラ)の持つ稲作エステート地帯スブランペラへ車で向かい走ること3時間、永遠に続くパームオイル園が途切れたと思いきや、一面金色、遥か彼方地平線まで黄金色が続いている。ついに私の任地スブランペラに到着したのである。それにしても広い。あまりの広さに自分が小さく見えたほどである。

まず水田であるが、一区画12ヘクタール(200×600㍍)でそれが約30区画で1つの小ブロックを形成している。その小ブロックが約5ブロックあまりで、1つの大ブロックを形成している。その大ブロックが約25ブロックあるわけだから、要するに国立競技場のトラックが約4000個以上である。それら全てに灌漑設備が行き届いている。

また耕起、代かき作業も60～80馬力級の大型トラクター数十台で一斉に行い、そしてミストブロアーで肥料散布、病害虫防除し、その後大型コンバインで収穫できる。また種もみは、種もみ工場へ運ばれ、次シーズンのため約500㌧生産される。

とにかく、こういった作業面に関しては発展途上国とは思えない。日本並みかそれ以上に思われる。とは言っても施肥システムもまだ確立されていなく、稲の生理も殆ど知らないため数々の問題が発生しているのが現状だ。

ここに着任して1年間の間実際に稲作栽培に携わってきたわけだが、今後の課題にしたいことが多々あった。というのも今までに、栽植密度、クロロフィール、葉色、倒伏、品種比較試験及びデモンストレーション圃場、共同プロジェクト栽培、稲作講習会の中でクロロフィール、葉色試験、倒伏試験が施肥量のミスにより失敗したことだ。これは私からのアシスタントへの伝達がうまく伝わらなかったことや、アシスタントの理解度が原因だったと思う。

またデモンストレーション圃場に関しては施肥ミスもあったものの、白葉枯病、紋枯病にかかったことや、倒伏およびウンカが大発生したことである。この倒伏については、生育中期の施肥量のミスにより、その後の肥料タイミングが計画された通りに行われなかったことや、水管理が原因していると思われる。

またウンカについては薬剤散布の時期や、散布のやり方について問題があるのではないかと思われた。といった具合でデモンストレーション圃場は目標収量8㌧/ヘクタールにほど遠く、5.8㌧/ヘクタールしか収穫できなかったものの、この数字はここスブランペラでは、平均以上の数字である。

以上が今までの業務状況であるが、今回は試験等が失敗に終わったことにより、アシスタントも試験の大切さがわかり良い体験になったと思う。また、栽植密度試験、品種比較試験に関しては、まずまずのデータが得られたことやデモンストレーション圃場を行ったことにより、今後の施肥システム作り(施肥量、施肥タイミング)に何らかの形で役立つものと思われる。

私もあとわずかで帰国するが、この2年間日本では体験できないことを数々体験し、この大地で汗を流し、苦しんだり村の青年と遊んだりしたことは一生忘れないと思う。現地の人達にはそれなりの生活があり、欲がなく、心が澄みきっていて、わたしも真に彼らのような心が持てたら嬉しいと思う。

2年という短い期間ではあるが、協力隊として活動したことを私は誇りと思っている。

（了）

村田秀行 Hideyuki Murata
派遣国：エティオピア
職　種：稲作
隊　次：昭和62年度1次隊（活動期間1987年7月～1989年7月）
出身地：大阪府
初　出：「日本農業新聞」1988.11.20（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じ所に住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたっており、それぞれ活発な活動を展開。その一つ、エチオピアで稲作の指導に活躍している隊員のレポートを紹介しよう。

*　　*　　*

ガンベラで稲作指導

飢餓を境に「米」に注目

エチオピアは国土の大半が高原で、気候は冷涼。標高約2500メートルの首都アジスアベバでは、年間を通じて気温が25度C以上になることはほとんどなく、雨期には雪が降ることもある。だが、赴任先のガンベラでは気温が毎日30度Cを軽く超え、乾期には40度Cに達する。それだけに土地は肥よくだ。

エチオピアの稲作栽培はまだ始まったばかりで、米の食べ方を知らない人がたくさんいるし、流通も確立されていない。だが、稲は主食のテフ（ケシ粒ほどの穀物の実で、つぶして水を加え、発酵させてパンケーキ状に焼いて食べる）に比べて単位面積当たりの収量が格段に高い。食糧増産を模索していたエチオピア政府は、1984年の飢餓を境に米という新しい穀物に注目しているし、また、エチオピアの初代稲作隊員がこのガンベラで大成功を収め、一層期待が寄せられている。

ガンベラで栽培している稲はすべて陸稲である。水稲に比べて収量は少ないし、町の南側にはバロ川という大きな川もあるのだが、①栽培・管理が簡単である②かんがい設備を整えるのに費用がかかる③水田のような場所に入ることを嫌う――などの理由で、陸稲オンリーなのだ。

陸稲など、生まれてこのかたお目にかかったことがなく戸惑ったが、施肥方法や除草の重要性などは同じだし、陸稲と言っても稲なのだから、いくらかは私の知識も役に立つ。現在は、試験栽培用の約90品種と周辺農場への種もみ供給用の稲を、合わせて5ヘクタール栽培している。また、集団移住政策による村があるので、9村でこの235ヘクタールの土地を受け持って活動している。

（了）

高橋知見 Tomomi Takahashi
派遣国：ガーナ
職　種：稲作
隊　次：平成3年度1次隊（活動期間1991年7月～1992年12月）
出身地：静岡県
初　出：「NGO協力情報」1994.10.10（(社)国際食糧農業協会）

ガーナにおける米作り

灌漑農業研究センター稲作部門研究員として

とりあえず体当たりで

今思うと実際にガーナに到着するまでは，この国の稲に関する知識をほとんど持ち合わせていなかった。途上国の稲作関係の文献といえばアジアを対象にしたものが主で、西アフリカの資料はごくわずかだった。頼りになるのは過去にガーナで活動していた農業隊員が書いたレポートぐらいだったが、技術的なことは少なく事業報告が中心であった。とりあえず、何年か前の稲作隊員の報告書で、わざわざ種を持って行って育てた日本の稲が雀にことごとくやられたという話を読んだので、ジャポニカ米をガーナで作り、他の隊員に売ってしまおうという考えは捨てた。

ガーナ料理の主食の種類は結構豊富である。芋、豆、バナナ・トウモロコシなど。これらと共に米もよく食べられている。白米の上に辛いシチューをかけたり、豆と一緒に炊きこんだりする。こういった御飯料理は当然のことながら、他の現地食と違って最初からわりと抵抗なく楽しめた。

アシャマン農業の実態

私の配属先はガーナの農業省の傘下である灌漑開発公社で、全国に点在する14の大規模（1ha以上はある）灌漑農場を持ち、そこでの稲・野菜の増産を図っていた。私の仕事はこの公社に属する灌漑農業研究センターの稲作部門の研究員だった。

同センターには他にも農業機械・農業環境の各部門に隊員が各1名いた。さらにセンター長はJICA専門家であった。全部で20人足らずのところに4人もの日本人がいるのは、かなり特殊な例ではないかと思う。場所は首都アクラから車で約30分の町、アシャマンにあり、地方で孤独な戦いを強いられる隊員に比べるとかなり恵まれた環境であった。

センターはアシャマンの灌漑農場に隣接しており、稲作部門の実験圃場はこの一部を使っていた。アシャマン農業の作目はほとんどが稲で、野菜はところどころあぜにトマトやオクラが植わっている程度だった。私の活動はこの1haほどの水田をうろつくことだった。

赴任したばかりの8月半ばごろ、栽培されている稲は無く、田にびっしりと雑草がはびこっていた。来る前は年3作可能と聞いていたが、実際、水源となるダムの水のたまり方で作数が変わってくる。農場の責任者が水路を開ける予定を農民に知らせ、それに合わせて本田準備を進めるという手順になっていた。もっとも、予定はあくまで予定でしかなかったが。

アシャマンの稲作は、低賃金で重労働をする人々に支えられていた。田んぼの草刈りは人手で行われる。前の作から半年以上手を入れなかったから作業はきつい。刈った草は刈り残しと共に火をつけて、きれいに燃やしてしまう。焼け跡は、トラクターを持つ人に依頼して起こしてもらう。この後水を張り、人が入って、底を手でさらって大きな草の根などを除いていた。

ここでは直播栽培をしていたので、催芽させた種子を本田にばらまく。移植栽培は、他の農場で試している所もあるが、労働がきつい割に収量が上がらない、という理由でアシャマンでは敬遠されていた。

ゴミ取りに1合1時間

日本の稲を見慣れている人間から見ると、いかにも頼りなげな稲、実を結ぶがつき方がバラバラ、青いものから熟しきったものまで色々になってしまう。収穫までの間、田に見張りが雇われて大声とパチンコで雀を追い払う。収穫方法は、まず稲を刈り倒し、シートを張った上で稲を直接地に打ちつける。打ち終わった株はまとめて積んで、豪快に長い棒を振り下ろし、残りの籾を落とす。集めた籾はコンクリートの上に広げて干し、ある程度まで乾くと、大きな洗面だらいに入れる。これを頭上に上げて少しずつこぼすと、重い籾は真下に落ちるが、軽いものは風に飛ばされるので、選り分けができる。ここまで終わると、市場の女性達が買い求めに来る。

収穫過程で土や石が混ざるので、精米機の損傷も激しい。米を買いに行くと、たいてい3ランクほどに分けられていて、一番安いのが地元産である。粒が大きくてきれいな輸入米の半分くらいの値段であ

る。何せ異物が多い。私は何回かこの米を炊いたが、ごみを取り除くのに、１合当たり１時間近くかけてしまった。いまいましいことに、米とそっくりな白い石が混ざっていて歯を痛めた。砕け米も多いし、炊いて食べるとザクザクした感じである。

現状に対する課題はたくさんあるが、解決策はなかなか見つからない。何か良いヒントはないものかと四六時中考えていたように思う。単に増産するだけなら打つ手もあろうが、生産者の利益向上を狙うのは結構難しい。稲作の知識も必要だが、大きな視野を持って柔軟な発想をすることが大切かと思う。あいにく稲作隊員というのは後任が取りにくく、隊員の入らない期間が出来たりするが、なるべく多くの人に来てもらって知恵を絞って頂きたい。ガーナは農業隊員の数が減ってきているが、農業で生活を支える人達はたくさんいる。

ガーナは歌声と共に

ガーナは治安が良く、女性１人でも気軽に旅行ができる。貴重品や金銭にはもちろん気を付ける必要があるが、温和な人間性のためか人を傷付けてまで物を盗る、という話はほとんど聞かなかった。観光地が無いのが良いかもしれない。

マーケットマミー（市場で物を売る女性）に代表されるガーナ人女性のたくましさは、称賛に価する。子供の世話から力仕事まで、朝から晩まで実によく働いている。

彼女らは教会に熱心に通う。日曜日の午前には、ドラムに合わせて歌って踊れるミサが行われ、教会は震動で壊れてしまいそうだった。最初に見た時はディスコかと思った。

移動に使う乗り合いバスの中では、時々賛美歌の大合唱が始まる。日本人ではなかなか出せない、低くて良い声で歌う。現地語の歌だから意味はさっぱりわからないが、ガーナを離れて２年近くたった今でも、あの声はよく覚えている。

ガーナに着いた当初は女性達の力の強さと子供の数に驚いた。面白半分で見ていたものの、次第に興味を覚えなくなった。しかし、彼女らの生活の厳しさ、その中で働く強さ、心の寛容さ、快活さなどが、時間をかけて自分の心に伝わってきたらしい。バスの中で賛美歌を聴きながら、こんなにしっかりした歌声は日本では聴けないだろうと思った。

（了）

佐々木理世 Michiyo Sasaki
派遣国：ペルー／パナマ
職　種：稲作
隊　次：平成2年度3次隊（活動期間1991年4月～1991年9月）／平成3年度振替（活動期間1991年9月～1993年4月）
出身地：秋田県
初　出：「農村報知新聞」1994.5.18（㈱農村報知新聞社）

稲作の80%が陸稲 多様な農場が混在

ペルーの平和を願いながら

中学生の頃から漠然と行きたいと思っていた協力隊へ稲作の職種で参加できたのは、91年の4月だった。赴任先はペルー。「おや、ラテンアメリカで稲作を？」と思う人も多いだろう。私もアジア以外で米を主食とする国が、しかもラテンにあるとは想像もつかなかった。

ペルーでの稲作は、コスタ（海岸部）で行われ、そのほぼ90%が水稲作である。いわゆる日本で外米と呼ばれる細長いインディカ米だ。着任当初、私の職場である農業試験場はちょうど収穫の時期であり、大きな田が一面に広がっていた。精米歩合を計る部屋にはいると、そこでは労働者たちが働いていた。精米機は長時間使うと熱くなるので30分やっては休み、また30分やっては休みという作業ぶりであった。

町外れではプエブロ・ホーベンと呼ばれるスラム街が風に吹かれており、時々なるゲリラ、センデロ・ルミノソの仕掛ける雷のような爆弾の音にも、いつしか慣れっこになっていた。

下宿先のおばさんと、やっとスペイン語を介して気持ちが通じはじめたかと思う間もなく、JICAの専門家3人がセンデロ・ルミノソに殺害され、我々日本人は強制的に帰国した。

インフレのための短縮労働に加え、6時30分にならないと日が昇らない中、寒さに震えながら車に乗って試験場へ向かう途中、パン籠を頭に乗せた女性と子供が、前を見つめながら裸足でひたむきに歩いていた。その光景は今でもはっきりと心に残っている。その姿が、私にとってのペルーとペルー人のイメージであり、一日も早く安定した政情になることを心より願う。

バイオで先進国に追いつけ

第二の任地はパナマであった。飛行機から降りた途端、ものすごい蒸し暑さに襲われた。ペルーのコスタは乾燥地帯だったので、その違いは大きかった。パナマは中米、コスタ・リカとコロンビアの間に位置し、年間雨量約3300ミリ、平均気温27.4℃の高温多湿な熱帯性気候、面積約77㎢（北海道とほぼ同面積）人口約240万人の共和国で89年度米軍侵攻の傷跡もまだ残る。しかしながら、アメリカ資本の流入は激しく、アメリカナイズされており、アメリカドルがそのまま使われている。

任地は首都よりバスで3時間半、パナマのほぼ中央に位置するディヴィサという村にある農業試験研究所だ。

さっそく上司や同僚を紹介され、研究所内を見学する。その研究所はパナマ国の中でも農学研究の重要な位置を占め、バイオテクノロジー部門、土壌分析、育種、病理の研究部門がある。

私の入った育種のプロジェクトでも、稲の葯培養、バナナ、さつまいも等の組織培養が行われており、大学の研究室となんら変わりのない、その様子には驚いた。

冷房の効いた部屋でチチャ（果物ジュース）を飲み、談笑して後ろの圃場へ行くと、私と同じくらいの男の人たちが袋に土を詰め、水やりをしている。彼らはテクニコ（技術者）よりももっと安い給料の半月75ドルで雇われている肉体労働者である。彼らは真っ黒に日焼けし、冗談を云い云い働いていた。

圃場にはイン・ヴィトロで作られたバナナ、パイン等が植えられ、そのほか稲、ピーマン、トマト、アヒ・チョンボ（とうがらしの類）が所狭しと並んでいた。すなわち、彼らの希望はバイオ・テクノロジーなのである。

しかし発展途上国のパナマには、ただヨーロッパやアメリカ、日本を真似るだけでない、この国なりの発展の仕方があると思うのだが…。

稲作（インディカ米）は、全体の80%が陸稲で20%が大規模灌漑田である。陸稲の場合、1ヘクタールも土地を持たない農民が、棒と草刀で作業しているのに対し、大規模灌漑田は企業が介入し、播種（パナマはほとんど直播）や薬剤散布はヘリコプターである。まさに様々な段階が混在している。

乾期になるとちゃんと時期を知ってなるマンゴー、パパイヤなどのトロピカルフルーツの実はおしげもない。マンゴーは1つの木に2000以上も実をつける。こんな林でみんな仲良くのどかに暮らしている人々を見ると、私はうらやましくて仕方がなかった

が、彼らにしてみれば、それ以上に経済大国日本がうらやましいのだろう。その証拠にはいつも最後にはお金の話になっていた。

日本では経験できない階級の苦痛

またラテンアメリカの特徴として、階級が非常に厳しいことがあげられる。ドクトール（博士号を持つ人）、インヘニエロ（高校卒の人）、トラバハドール（肉体労働者）、その他、秘書や運転手とはっきり各々のタイトルが決まっている。

ドクトールやインヘニエロと聞くと態度が丁寧になり、言葉の最初や最後にはドクトールやインヘニエロをつける。私はただのセニョリータ（娘っこ）と思われ、初めはタイトルで区別するのは変だと思っていたのだが、何回もそう呼ばれるうちに、自分で「私はインヘニエロだ！」と言ってしまい、自己嫌悪に陥ることもあった。それだけ階級付けを感じさせる国でもある。

豊かな自然の中、踊りが好きで人なつっこい素朴な彼ら。我々日本人とパナマの人々の行く先を思うとき、日本人の友達と、そして彼らとを同じレベルで考え、愁うことができるのは、協力隊で得た財産である　と私は思う。

（了）

小島英隆 Hidetaka Kojima
派遣国：フィジー
職　種：稲作
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年4月～1992年4月）
出身地：愛知県
初　出：「日本農業新聞」1992.4.18（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊は、アジア、アフリカ、中近東、中南米などの開発途上国の人々のために自分の持っている技術を普及させる目的で各国に派遣されている。今回は、フィジーで現地の人々と一緒になって活躍している隊員のレポートを紹介する。

*　　*　　*

フィジーで稲作普及員

南太平洋に浮かぶ常夏の国フィジー。人口約72万人、その約9割がビチレブとバヌアレブの2つの大きな島に住んでいる。

人口の比率は、フィジアン約50%、フィジーインディアン約45%、その他5%となっている。国土面積は約1.8万平方キロメートルで島の数約300。日本の四国より少し大きい位だが、「南太平洋の十字路」と呼ばれ、南太平洋諸国のリーダー的立場にある。

私が着任したのは、フィジーの第一次産業省農業局かんがい排水部のレケティプロジェクトで、ポジションは稲作普及員であった。レケティは、フィジー北部のバヌアレブ島最大の町ランバサから西へ70キロメートルの所にある小さな村であった。住んでいる人々は、「フレンドリーノース」と呼ばれる親切で優しい人たちが住んでいる地域で、住むにはとても良い所であった。

フィジーの稲作面積は、1989年度約1.3万ヘクタール、収穫量32万トン、単収2.4トン／ヘクタール、輸入量22万トン、総消費量54万トン、自給率約60%。政府は外貨節約の為に、米の自給率向上を目指している。米の作付面積の49%が北米地域に分布していて、私が直接かかわっているのは、約800ヘクタールのかん排水プロジェクト地区であった。

言葉とルーズさがこれからの課題

私の業務は、デモンストレーションフィールド（展示ほ場）の管理運営、農家の勉強会の教材作成、講義、展示ほ場の説明会の企画運営、各地で催し物を行い、米の増産を呼びかけるキャンペーン週間の企画運営の援助が主な仕事。農繁期以外に行い、各稲作地区で行うもの、オフィスの隣にあるトレーニングセンターで農家を集めて行うものとがある。

仕事上、一番困るのは言葉の問題。展示ほ場の説明会や農家の勉強会では、まず最初に私が英語で話し、その後でインディアンの同僚がヒンディー語に訳す、そのまた後にフィジアンの同僚がフィジー語に訳すといった具合なので、普通の講義の3倍位の時間がかかる。少し慣れてきて、簡単なあいさつなどの会話ができるようになり、得意顔でするのだが、一言三言話すともう相手の言っていることがわからなくなり通訳が必要となり、もっと現地語を勉強しなければと痛感する。

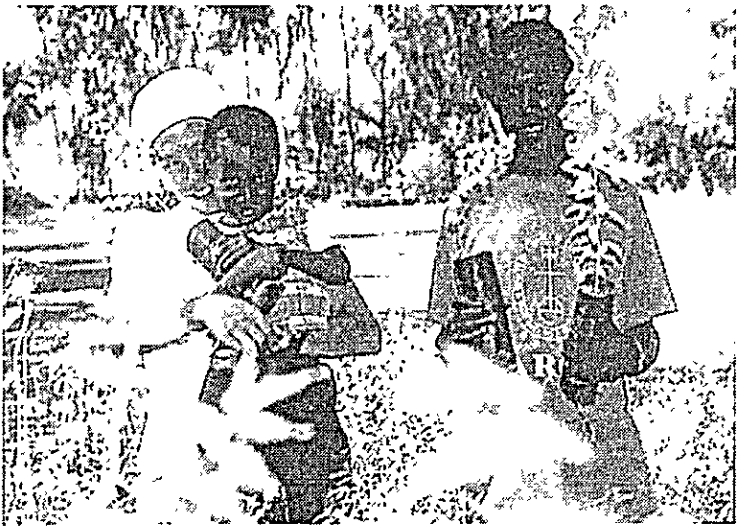
もう一つの問題は、時間にルーズなこと（のんびりなこと）。これはフィジータイムという言葉によくあらわれており、6時集合と言えば、完全に集まるのは早くて7時、バスが1、2時間遅れても気にもしない。明日やるといった仕事が完成するのは1週間後、予定通りにならなくても「フィジータイムだから　」といって笑っている。始めのうちは1人で怒っていたが、今では私も「フィジータイムだから　」とのんびり笑えるようになった。

今後、フィジーの米の自給率を上げるために、青年海外協力隊員の立場からどのように協力していくか、農家の勉強会、フィジー語、ヒンディー語の教材作成、展示ほ場の増設、農家からの情報収集などが今考えられるものであるが、どれも私1人だけでできる仕事ではないので、同僚と「フィジータイム」でのんびりやっていくより仕方がないと思っている。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

園芸作物・花き



〈園芸作物〉年度別・国別派遣実績

国　　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	15	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	16
ブータン	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
インド	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
インドネシア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ラオス	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
マレイシア	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ネパール	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
パキスタン	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
フィリピン	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
スリ・ランカ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈アジア地域〉	39	1	0	1	1	0	0	2	0	1	0	45
チュニジア	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
〈中近東地域〉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
エティオピア	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3
ケニア	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
マラウイ	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	3
タンザニア	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
ジンバブエ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
〈アフリカ地域〉	32	0	0	0	1	0	1	1	0	0	0	35
チリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
ホンデュラス	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
ジャマイカ	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	2
パラグァイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈中南米地域〉	3	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	6
パプア・ニューギニア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
サモア	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
〈オセアニア地域〉	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2
合　　計	75	1	1	1	2	0	2	3	1	3	0	89

〈花き〉年度別・国別派遣実績

国　　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
中国	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	3
フィリピン	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
タイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
〈アジア地域〉	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	5
ケニア	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈アフリカ地域〉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ボリヴィア	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
チリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
エル・サルヴァドル	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
グァテマラ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
ホンデュラス	8	0	2	0	1	0	0	0	0	1	0	12
ニカラグァ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
パラグァイ	4	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	6
〈中南米地域〉	12	0	2	1	1	1	2	0	1	4	2	26
ブルガリア	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
ハンガリー	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
〈ヨーロッパ地域〉	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
合　　計	14	0	2	2	1	1	5	0	1	5	3	34

大野和徳 Kazunori Ono
派遣国：ケニア
職　種：園芸作物
隊　次：昭和60年度3次隊（活動期間1986年3月～1988年3月）
出身地：長崎県
初　出：「農業技術」1990.5.23（(財) 農業技術協会）

青年海外協力隊員のレポート

ケニアでは国内向けにとうもろこし、豆類、トマト、にんじん、玉ねぎ、キャベツが栽培されているが、需要は高くない。輸出用作物にはコーヒー、茶、さとうきび、綿花等がある。果樹も輸出を伸ばしている。

私はThika国立園芸試験場で半年働いてから、Embu地区農業事務所のマカダミア園芸担当補佐となった。ここはケニア山麓の標高1,500mに位置するコーヒーと茶の産地である。ここでの私の業務はマカダミアナッツ、アボカド、マンゴーの接ぎ木苗生産とこれら実生木の高接ぎ更新の指導、普及である。

まずマカダミアの接ぎ木苗生産の計画を次のように立てた。農家に配布する苗木の生産をEmbu地区公営農場で行う。第1段階として年間1,000本を生産する。また、私が農家を巡回して良い母樹を選び、種子を確保する。穂木は試験場より取り寄せる。苗木生産方法は次のようにする。まず根の生育の旺盛なテトラフィラ系統のものを台木用種子として用い、これらを播種床に播き、約3カ月後、地上部が10cm程度に成長した頃に鉢上げする。それから約半年後、接ぎ木部位が鉛筆程度になった頃、割り接ぎか腹接ぎを行い、ろうか糊を接ぎ木部位にすきまなく塗って、乾燥を防止し、さらに苗木全体を鉢ごとビニール袋で包み込む。その後約3カ月間日陰で馴化し、その間ビニール袋に穴をあけていき、最後に露地で3カ月間自然に馴化させ、樹勢をつけてから雨期直前に定植を行う。だが、台木本数、接ぎ木本数とも、当初の予定を著しく下回ってしまった。原因として、発芽に時間がかかりすぎて、年間2回播きができなかったことが挙げられる。しかし播種後3カ月で発芽率70%以上に達する母樹もあったし、播種前に種子に鉄切りのこで傷をつけると発芽が早まることも確認された。

一方台木に発生するクロロシスが大問題となった。カルシウム又はホウ素欠乏症ではないかとpHを測定したが、クロロシスの発生との関連性は見られない。草木灰等の追肥も効果がない。肥料の吸収を妨げる要因が土壌中にあるのではないかと何種類もの土、堆肥、化学肥料を使用したが、効果はやはりない。ただ、カルシウム、ホウ素、マンガン等約10種の配合微量要素(フォーリア・フィード)の葉面散布は効果があった。この同じ土をアボカドとマンゴーの苗木生産に用いても問題がないことも確認できた。ケニアの用土は団粒構造がなく、雨が降ると固まり、乾燥して風が吹くと舞ってしまう。今後このような用土の物理的特性を改善する必要がある。そうすれば、クロロシスを解決できるのではないか。

接ぎ木作業に関しては、私達スタッフ全員がマカダミアの接ぎ木は初めてであることを考えて、活着率はせいぜい60%と予想していた。しかし接ぎ木後1カ月で70%、最終的には80%以上になる勢いで、今後に大きな不安はない。結局私の帰国までに農家に苗木を配布できなかったが、今後の苗木生産の規模拡大の土台を作ることができたと思っている。これと並行して、マカダミアナッツ園を開設し、穂木用母樹、台木用母樹を計78本定植したので、近い将来、穂木や種子の入手に役立ち、クロロシスの解決にもつながるだろう。

アボカド、マンゴーの接ぎ木苗生産は、農家まで充分に普及しておらず、接ぎ木苗の持つ意味が理解できていない農家もかなりあった。そこでその生産より普及に重点を置いて活動した。

マカダミア、アボカド、マンゴーの高接ぎ更新技術は、ケニアではほとんど普及しておらず、その存在さえ十分には知られていなかった。そこで2人の技術員に対して技術指導を行い、この方法を紹介することを主目的とした。高接ぎ方法に関して、幾通りも試した結果、主幹を切り倒し、そこに木の大きさに合わせて数本の穂木を接ぎ木する方法が最も良いように思えた。この方法でアボカド、マンゴーではほぼ100%の活着率を得られたが、マカダミアでは30%弱であった。マカダミアの木はアボカド、マンゴーよりも堅く、台木の状態によって接ぎ木の成功が左右されるせいらしい。従って、接ぎ木前の一定期間に灌水等を行って、その効果を調べる必要がある。アボカド、マンゴーに関しては、活着こそしたものの、その後の成育についてはほとんどわかっていないので、今後の追跡調査が必要だ。

以上私の2年間の活動を振り返ってみたが、2年間では活動の成果を見極めることも、仕事の後始末をすることも十分できなかった。だが、自分自身一

生懸命努力したし、日本では学べない多くのことをケニアから学んだ。ケニア側は、私達がケニア農業省の一員として業務に携わることを望んでいるのだ。今後、相手国政府の一員として、技術的にも経営、管理面においてもよりすぐれた協力隊員が求められることだろう。

（了）

清水　裕 Yu Shimizu
派遣国：ホンデュラス
職　種：花き
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1991年2月）
出身地：埼玉県
初　出：「全国農業新聞」1990.1.19（全国農業会議所）

異国で身につく忍耐

素直に受け入れる懐深さ

私は、中米ホンジュラス国の北部カリブ海岸、ラセイバ市に1988年2月、2年間の任期で赴任しました。

同国は面積で日本のおよそ3分の1、中米諸国の中では経済的にも下から数えた方が早いです。

気候は山岳部を除き北緯13度から16度にかかる熱帯性気候です。

農業の方面では、世界的に有名な米国系企業チキータバナナやドールバナナの商標の2社が強大な影響力を持っています。とくに、北部カリブ海岸における平坦地は、大きな部分を2社系列の大農場がしめています。バナナ、パイナップル、かんきつ類の広大な果樹園が広がり、完全なモノカルチャーの様相を見せています。

このような大農場で働く労働者は、厳しい労働条件の下で働いています。しかし、こうした企業で働ける人は恵まれている方で、定職につけない人たちが大勢います。一部上流階級の人たちの暮らしは、平均的日本人には考えも及ばぬものがありますが、一方、初等教育も受けられず、1日10レンピラ（700円）の仕事も得られない人たちが大勢います。

農産物生産に偏り

このような中、生産された果物は、世界中に前述の商標で売られていきます。同様に、サトウキビの生産も盛んですが、これも輸出に向けられ、時に国内消費分が不足することもあります。収益性を追求する、大企業のエゴのため農業生産物は、著しい偏りを見せ、主食であるトウモロコシ、小豆、小麦にいたるまで不足することが少なくありません。

また、いまだに焼き畑による農家も多く、森林荒廃、沃土流失をまねいているほか、教育の停滞による新たな貧困の発生など、悪循環が見られます。

私の配属されている学校では、農学部に学ぶ学生が1,000人余りいます。農業分野では唯一の国立4年制大学です。4年間にわたり学生は農業総論を広く学び、おのおのに取り組んでみたい分野について、細かく学べる状態にはありません。また、資機材、予算、人材の不足から、実習の不足も目立っています。

同校を卒業していく学生たちの多くは、前述のフルーツ会社に技師として就職したり、ほかの農業関連会社や研究施設に入ったり、自営の農場を継いだりしていくため、実際に農民のレベルで現状を変えていく大きな影響力にはなり得ないと思われます。

担当は花ほ場管理

配属先での私のポジションは、花きほ場の管理と実習指導です。

新しい分野ということで、来た当初は荒れ果てたほ場以外何もない状態でしたが、徐々にではありますが、形ができてきました。

慢性化した労働力の不足（金銭面）、国内での資機材入手の困難、物品・植物の後をたたない盗難、あてにならない約束の時間などは、どの隊員も経験する問題点であり、それ自体問題として扱う質のものではないようです。同地では、すべてことにあたるには、忍耐ということが一番大切なもののように思えます。

私たち協力隊員、異国の稚拙な若者たちを、両手を広げて受け入れてくれる、そんな懐深さが、このような途上国と呼ばれる国にはあると思います。私たちも、それを素直に受け止め、胸をかりるつもりで、活動していくことが肝要かと思います。

（了）

鈴木あや子 Ayako Suzuki
派遣国：ホンデュラス
職　種：花き
隊　次：昭和62年度3次隊（活動期間1988年3月～1990年6月）
出身地：岩手県
初　出：「農林と園芸」1990.1.23（誠文堂新光社）

ホンデュラスの花き園芸の現状

ホンデュラスは中米に位置し、グァテマラ、エル・サルバドル、ニカラグァと国境を接し、太平洋、大西洋に面し、山間地帯の多い国である。わずかな平野は南・北海岸沿いと中央にある。熱帯気候であるが、高度や位置によってかなりの気候差がある。主産業は農業であるが、バナナ・パイナップル・コーヒーなど外資系（とくにアメリカ合衆国の）の企業のプランテーション栽培であるため、外貨獲得は少ない。

私の任地のインティブカ県ラ・エスペランサは首都テグシガルパから西へ200kmの所に位置し、標高1,700mの高地にあり国内ではもっとも冷涼な気候である。年平均気温は約15℃、最低5℃、最高28℃である。ジャガイモ栽培で有名なこの地方は、国内生産の80%を占める生産量をあげ、他に野菜・トウモロコシ・コーヒー・果樹などを栽培している。

花きに関してはほとんど栽培されていないのが実情で、せいぜい家庭の庭作り・花壇に栽培される程度である。国内消費の切り花はそのほとんどをグァテマラ、メキシコなどからの輸入に頼っており、首都近郊や幹線道路沿いの平地等でのバラ・キク　カーネーション・グラジオラスなどの生産がみられるが、まだまだ需要に追いつかない状況である。花き栽培技術はかなり遅れており、生産資材、土壌消毒剤などの薬剤、種子・苗等を国内で入手することも難しい。

ラ・エスペランサ地区は降水量も多く、乾季（11～5月）でも容易に水を得ることができる。しかし、大部分の耕地は斜面にあり、花き栽培となると少々難しい。露地栽培で可能な作目もあるにはあるが、雨よけの下で栽培したほうがより価値の高いものが栽培できる。斜面に2m位の高さに雨よけをとりつけて花き栽培をする人間がこの地区にいるだろうか、と思うほど大部分が貧しい農民である。その日暮らしと言っても過言ではない。

日本の農業と比べたら、本当に原始的に思えるような農業が行われている。牛や馬にすきを引かせたり、あるいは人間が少しずつすきで耕やしていく。かん水用の溝を用意している畑もあるが、まったくのばら播き（トウモロコシなど）の場合もある。

施肥は化成肥料が導入されているようだが、貧しい農民にとってはそれらを買う余裕もなく、大部分がたい肥を入れたり、あるいはまったく地力だけに頼っている場合が多いようだ。しかし、一部の協同組合になっている集団では、計画的に運営・栽培されているところも見うけられるが、まだまだ改善する点が多いようだ。

天然資源省ラ・エスペランサ支局には、牧畜部門、農業試験・研究部門、および普及部門、ラ・エスペランサ農業デモンストレーションプロジェクト（以下略称　PDAE――Proyecto Demostrativo de Agricultura, La Esperanza）がある。ラ　エスペランサ地区の農牧畜業の技術同上、普及、発展、そして農民の生活改善と向上を目標に、各部門が連けいした仕事をしている。

私はPDAEに属しており、このプロジェクトは日本の無償援助による肥料の販売の売上金を資金源にしている。野菜・食用作物・果樹・花き・植物病理・害虫・食品加工・市場調査の各セクションに協力隊員がおり、各々にカウンターパートのホンデュラス人農業技師がいる。このプロジェクトは第2期を迎えようとしており、普及がその中心になっている。

花きのセクションは、まだ試験・研究の段階である。普及作目はまだ決定しておらず、試行錯誤的にいろいろな花き植物を栽培し、その適応性等をみたり種々の栽培試験をしている。

たとえば、カーネーションはラ・エスペランサ地区の気候に良く適応し、将来性は大きいようにも思えるが、生産コストに資材費・苗代がかなり大きな割合を占めるので、この地区の貧しい農民、協同組合に普及させることは危険が多いと思う。他の地区の富裕農家・協同組合になら普及可能かもしれないが、その他、輸送、肥料・農薬・資材等の調達、種子・苗の生産などの問題がある。

ラ・エスペランサ地区の花きの普及にはまず露地で栽培可能であり、斜面でも品質の落ちないもの、そして手入れが簡単な作目の決定が急がれている。

日本の援助で運営されているプロジェクトにもかかわらず、いつも資金がないとか、あるいは運用がうまくなされていなく、何を買うにも立て替えで買わざるをえない。日本の援助の肥料はどこへ行った

のか。天然資源省ではストックが底をつくことがよくある。隊員レベルではどうすることもできないだろうが、この省の体質の改善が必要だと思う。

ホンデュラス人農業技師はほとんど土に触れようとせず、作業をするのは労働者であり、技師は指示するだけである。完全分業体制になっている。極端な話、机上の理論だけで通用するという妙なエリート意識があるようだ。しかし、経験をともなった理論を重視する日本人的感覚を押しつけるのもどうかと思うし、そのへんをうまく調節しながら土や植物に触れて、いっしょに仕事していくようにすることが大切で、率先してほ場に出るようにしている。

気候に関しては日本と大変異なるので、日々発見の連続である。日本で考えられている常識は覆される場合が多く、たとえば、１年草が２年間以上開花を続けることもよくある。カーネーションは１年以上株が老化することなく採花できる（もっともこれはラ・エスペランサ地区に限って言えることだが）。

また、ホンデュラス人はのんびりで、いっしょに仕事していていらつくことがよくあるが、逆に、日本人の忙がしさが普通なのだろうかと考えさせられることもしばしばである。

花き生産は、ホンデュラスではまだまだ発展途上にあるので、限界もあるだろうが、可能性のほうがはるかに大きいと思う。食糧生産はもっとも大切であるが、それと並んで心の糧としての花きの国内生産は必要不可欠な存在であろう。

（天然資源省ラ・エスペランサ農業デモンストレーションプロジェクト）

（了）

近藤喜代美 Kiyomi Kondo
派遣国：ホンデュラス
職　種：花き
隊　次：平成2年度2次隊（活動期間1990年11月～1992年11月）
出身地：愛知県
初　出：「NGO協力情報」1994.5.20（(社) 国際食糧農業協会）

蘭の大量増殖を目指して
――ホンデュラス国立自治大学の培養実験――

中南米の花好きな国

ホンデュラスは中南米に位置し、一年中全くと言っていいほど気候の変化のない、割に過ごしやすい国です。その中でも、私が赴任したラ・セイバは、ホンデュラスの北部、カリブ海に面した港町であり、南国特有のハイビスカス　ブーゲンビリア等が庭木としてよく見られる熱帯の町です。

この地方には観葉植物の自生も多く、5～10mはあると思われるゴムの木や、ベンジャミンが街角に植わっています。花き栽培は高原地域では盛んですが、低地ではほとんどなく、切り花は隣国グアテマラから輸入しているほどです。

また、この国の人々は花に大変興味を持っていますが、気候のせいか、鉢物や切り花を買い求める人は少ないようです。

前任者の意志を継ぐべく…

さて、私の配属先であった国立自治大学の農学部には花きに関する科目がなく、そこで、前任者が学生へのデモンストレーションとして花きの圃場を作りました。しかし、気候が合わないためか余り成果が上がらず、今度は自然に着生している蘭の栽培に目を付け、栽培実験室を作ることにしました。

私の活動の主なものは、この仕事を引き継ぎ、実験室を完成して運営することでありましたが、このような実験室は大学としては初めての試みでしたので、正しく一からの出発でした。

初めは現地の人々のほとんどが興味を示してくれ、なかなか協力的でした。しかし、何をやるにものんびりなお国柄、考えているように事が進まず、一時は、私の任期内に研究室が開始できないかと思えるほどでした。

例えば、ガラスの修理に1年、部屋の水道を取り付けるまでに半年かかるなど、そのため最初の仕事は、他の実験室から物を借りることから始めなければなりませんでした。また、物が簡単に手に入らないので、試験管の代わりにジャムのビンを集めたり、試験管立てや柵を木で作ってもらったり、いろいろ工夫を凝らしました。

しかし試行錯誤してあつらえたにもかかわらず、試験管立てに試験管が入らなかったり、棚が傾いたりと、苦労も多かったのです。

また、花き圃場の運営は2年間という短期間でしたので失敗も多く、育たない植物も沢山ありました。成功例としては、ベゴニア、ガーベラ・菊・蘭・なでしこ・けいとう・日々草・ききょう・インパチエンス等で、ポインセチアはクリスマスに向けての販売を考えていましたが、挿し木がうまくいかず失敗に終わってしまいました。

大いなる“花”を咲かせてほしい

赴任当初は言葉の問題もあり、カウンターパート（助手）とのコミュニケーションがうまくとれず、意見が合わないことが多く苦労しました。しかし、彼らの心情がわかるようになるにつれ、次第に彼らのペースに合わせることもでき、最後は公私共に親しく付き合える間柄になれました。

また彼らとの付き合いの中で一番心掛けたのは、何をやるにも自分から手本を見せること、そして彼らにやる気を持たせるように努力したことです。しかし、蘭の大量増殖により、輸出ができればという当初の目標とは反対に、これらの作業は大変時間がかかるため、彼らの興味が薄らいでしまったのがとても残念でした。

しかしこの圃場も、その後学生の実習に活用されており、カウンターパートたちにも必要性を感じとってもらえるようになりました。そして今では、徐々にではありますが、研究室の成果が出て来つつあるようです。またそれに加え、最近は近くの企業の協力もあり、仕事がしやすくなったので、良い方向に向いてくれればと思っています。

2年間の活動の中では、異国で何かを行うということの難しさを知りました。そして、今後の彼らの努力に期待しつつ、ペンを置きたいと思います。

（了）

米井尚道 Naomichi Yonei
派遣国：パラグァイ
職　種：花き
隊　次：昭和63年度1次隊（活動期間1988年7月～1991年10月）
出身地：千葉県
初　出：「花き園芸新聞」1992.4.25（㈱花き園芸新聞社）

パラグァイに花を

栽培に理解えられ収穫

農水産業、土木、建築など、多くの分野での技術協力を世界各国で行う、青年海外協力隊。数多くの日本人青年たちが、自分の技術を伝えようと活動を続けている。

米井尚道氏もその１人。昭和63年度第１次隊員として、パラグァイへ派遣された。彼が行った技術協力は「花き栽培」で、以下はそのリポートの一部による。

「花は美しい、奇麗だ」…　世界中どこでも聞かれる共通の言葉であろう。私も花の美しさに魅了され自分で花の栽培をすることになったひとりである。パラグァイの人々も、もちろん花は好きである。しかし花を購入して家に飾るという人は少なく、田舎の方ではほとんどないといっても良いであろう。

私は、このように花に対しての関心が少ないパラグァイに、花をひとつの生産物として、また花き園芸分野の向上のために活動している。しかしこのような発展途上国において、花というものは農業の中の一部ではあるが、主たるものではなく、あまり注目されていないのが現実だ。花よりダンゴと言ったところであろう。そのためにも花き栽培のメリットの多さを理解してもらうために苦労が多い。

ところで、パラグァイは季節的には、日本と反対であり、沖縄や台湾と気候が似ているようだ。私たちは（現地のカウンターパート〈助手〉を含め）花き栽培をすることにより、集約農業ができ、その収益性の高いことを売り物に、花き栽培を地域に普及させることを目的としている。また、この国では花き栽培は女性の仕事の一部であり、暇な時に行うものと思われており、男性からは軽視されている。この考え方を改善するのも目的のひとつであった。

私の活動している地域は、私を含めて３代目の協力隊員が派遣されているので、約８年近く花の栽培普及をしていることになる。しかしながら、田舎での花き栽培普及には少々難しいものがあり、いつも彼たちについていて面倒見なければならず、少々説明しただけでは理解してもらえない。また資本がほとんど無い彼たちに、色々なアイデアでいかに低コストで生産させるか考えながら行動しなければならない。

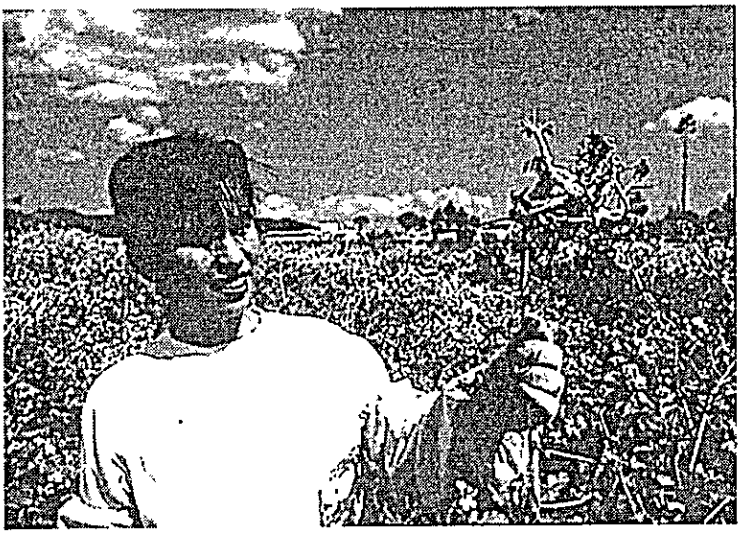
栽培の基本的なことに灌水がある。これは井戸から水を汲み上げる作業であるが、これが彼たちにとって大きな仕事であり、特に夏場は大変だ。多くの人たちがいやになり花栽培を諦めてしまう。それでも、秋の収穫期になってみると生き残った植物から花が咲き、それを収穫し売ってみると多少の売り上げになり、これが彼らの刺激となって、とりあえず今回の反省をして次回、また頑張るのである。しかし、また夏場でくじけてしまい、同じような結果を見るのである。

それでも中には努力して奇麗な花を咲かせ、高収入を得るものもいる。そして、少しずつ溜めた収益の一部を手動ポンプ購入費にあてたり、また電気が家にある者は、電照栽培を試みたりとまだまだ数少ない人たちではあるが、このような人々も出てきた。これは３年目になろうとする私の活動の励みになると同時に、これからのパラグァイの花き栽培に将来が見えてきたという手ごたえを感じさせるものである。任期の中でやりたいことはたくさんあったが、これといって満足した結果のなかった私にとって、花栽培をしてその価値を理解してくれた人たちがいたことは大きな収穫であり、これからどのように発展していくか楽しみである。

（了）

Japan Overseas Cooperation Volunteers

野 菜



〈野菜〉年度別・国別派遣実績

国　名	88年度まで	89年度	90年度	91年度	92年度	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度	98年度	総　計
バングラデシュ	40	0	2	4	1	2	0	2	1	2	0	54
中国	1	1	0	2	3	1	1	0	0	0	0	9
インド	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
インドネシア	0	0	0	0	0	0	1	1	1	2	0	5
ラオス	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
マレイシア	47	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	53
モルディヴ	4	2	0	1	1	0	2	0	0	1	1	12
モンゴル	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
ネパール	18	1	1	4	3	1	1	8	0	3	2	42
パキスタン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
フィリピン	86	1	1	1	2	0	0	1	0	0	0	92
スリ・ランカ	23	0	0	2	3	1	3	0	0	0	0	32
タイ	2	0	1	1	1	2	0	1	1	0	2	11
〈アジア地域〉	242	8	6	16	15	7	8	13	4	9	5	333
ジョルダン	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
シリア	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
イエメン	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
〈中近東地域〉	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	4
ボツワナ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	1	4
エティオピア	10	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	14
ガーナ	9	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	11
コートジボアール	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	4
ケニア	44	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	47
リベリア	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
マラウイ	4	1	0	2	0	1	0	1	2	0	0	11
ニジェール	1	0	1	2	5	2	3	3	3	3	2	25
セネガル	40	3	5	6	3	6	6	3	3	9	3	87
タンザニア	61	0	1	1	4	2	2	3	1	2	0	77
ザンビア	8	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	12
ジンバブエ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
〈アフリカ地域〉	181	7	9	14	12	14	13	13	9	17	8	297
ボリヴィア	6	0	0	3	1	1	1	0	1	0	1	14
チリ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
コロンビア	2	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	8
コスタ・リカ	9	0	0	0	0	1	2	3	3	3	0	21
ドミニカ共和国	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	6
エクアドル	0	0	0	0	0	1	0	1	2	1	0	5
エル・サルヴァドル	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
グァテマラ	1	0	1	1	1	2	2	3	0	2	1	14
ホンデュラス	13	3	1	3	1	2	0	0	2	0	0	25
ジャマイカ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
メキシコ	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	1	4
ニカラグァ	0	0	0	1	0	2	0	1	2	0	0	6
パナマ	0	0	0	1	2	3	2	0	0	2	1	11
パラグァイ	18	2	10	5	5	5	3	2	1	2	1	54
ペルー	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
〈中南米地域〉	56	6	15	18	11	18	11	10	11	14	6	176
フィジー	1	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	4
パプア・ニューギニア	8	2	2	2	0	1	2	0	2	0	1	20
トンガ	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	4
サモア	12	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	13
ソロモン諸島	0	0	1	0	0	1	0	1	0	2	0	5
ミクロネシア	0	0	2	1	2	3	2	0	3	0	4	17
ヴァヌアツ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
〈オセアニア地域〉	22	3	6	4	3	5	5	3	5	3	6	65
合　計	503	24	36	52	41	45	37	39	30	43	25	875

片浦雅之 Masayuki Kataura
派遣国：バングラデシュ
職　種：野菜
隊　次：平成3年度3次隊（活動期間1992年4月～1994年4月）
出身地：宮城県
初　出：「農村報知新聞」1994.8.8（㈱農村報知新聞社）

喧嘩、失望、懐疑…そして涙

気持ちの違いが大きな溝に

バングラデシュの首都ダッカ、そこから南西に300km、インドとの国境にジュソール県シャシャ郡という場所がある。一面田園で緑豊か、逆を言えばそれだけしかない殺風景な場所でもある。主として、この地域の農民に対してローンの貸し出しをするところがシャシャ郡農村開発勅局（BRDB）である。私はそこに4代目の野菜隊員として、この地域の農村女性に家庭菜園を指導し、生活向上に努めるという任務に就いた。

私には他人に農業を教えるほどの実力と自信がない。その分、現地の人と一緒になって汗を流せばいいではないかと考えていた。そしてこの農場は彼らとコミュニケーションを図るためのものと考えていた。

しかし、その思惑は反してしまった。私が農作業をしていると、彼らがからかい半分にレンガを投げ捨てたり、できた作物を盗んでいったりする。結局コミュニケーションを図るどころか、あげくのはてに現地の人間と喧嘩になってしまった。

そんなある日、その喧嘩相手が配属先に書類を提出した。それには私がナイフを振り回し子供を追いかけたとか、他人の家に石を投げ捨てたなどと書かれていた。その文章を真に受けた配属先の上司がヘッドオフィスに提出し、一時は任地変更さえ言い渡された。

その後、その文章の内容はでたらめだとわかり難なく事が済んだのだが、こういう事態が起きた以上デモンストレーション農場で仕事をすることはできなくなってしまったのである。

その後数カ月は何をしてよいか分からず、事務所でボーッとしている日が続いた。本格的に村まわりをしたくても、交通手段がないこの場所では、それもままならない。しかし、そのうちJICA現地事務所からバイクを貸与され、村まわりおよび、再び試みようと思っていた家庭菜園も順調かのように見えた。

しかし雨・動物・泥棒による被害、そして何よりも彼女たちのやる気の無さによって全くといってよいほど利益というものはつかめなかった。なるほど、3代にわたり協力隊員が入ってきたのにもかかわらず、進歩を感じなかったのはこういう事だったのか、着任して1年たってやっと分かったのである。

本当にこれが協力隊活動か？

バングラデシュは貧しい国といっても、ほとんどの人は食べるには困らない生活を送っている。農村の人でさえ同じである。私はそういう人達を対象として活動するのが任務である。野菜など作らなくてもバザールで買うことができる人達を・である。

こうしたことを繰り返すうちに、これで良いのだろうかという疑問が頭に浮かぶようになった。私の住んでいるところから西に7km程行くとそこはインドの国境である。何回となく足を運んだが、検問所を少し離れるとこの国の裏側を見ることができる。田園の向こうからこちらに向かって女、子供が果実やサリー等を抱えながら走ってくる。密輸である。もし捕まれば2・3年監獄に入れられる。それでも毎日のように多くの人間がこうしたことを繰り返す。しかも女、子供ばかりである。

一体何故か？バングラデシュの特に農村部では結婚したあと、夫が妻子を残して出ていくことがよくある。イスラム教のこの国では、女性の社会進出が極めて低く、こうした女性達は生活のために裕福な家の使用人として低賃金で働かされるか、炎天下の下で石を砕く作業等をする。40km離れたジュソールに向かうバスの中で、隠し持っていたサリーを検問の人間に見つけられ、泣き叫びながら引きずり降ろされた女性を何度見ただろうか。

最悪の場合、やはり体を売らなくてはならなくなるであろう。ダッカやジュソールのある場所の前を通ると、厚化粧をした女の人達を見かける。まだ10代前半としか見られない女の子もおり、彼女にどうしてこんなところにいるんだと聞いてみたら、親に売られたと答えた時には驚いてしまった。

こういった人達をある程度生活に困らない人達は蔑んだりする。赤子を抱え、ボロボロになった衣服を着ながら施しをもらい歩いている女性がいたとしても彼らは道ばたの石のようにあしらう。

我々青年海外協力隊員は、現地の人々と一緒になって草の根活動を行っている。しかし、実際は本当

の援助を必要としている人達に対しては、何もできないのではないか　。そう思う時もあった。

最後の涙の意味は…

もう帰国してかれこれ2ヶ月たってしまった。日本の生活に慣れるにしたがい、あの時の情熱も薄らいでいく自分を情けなく思う。この2年間を振り返ってみると、まるで一睡の夢のようである。本当に2年間異国の地で生活していたのか疑問に思うこともしばしばある。

私自身、バングラデシュは希望外の国であった。派遣国がそれと決まったとき、愕然としてその日一日寝込んでしまった。しかし、今振り返るとあの時の思い出は忘れられない一生の記録である。

日本では使い捨てライターでも、彼らにとっては何度も何度もガスを補充して使う大切なもの。ビニール袋1枚、紙1枚でさえ無駄にはしない。私の身の回りの世話をしてくれた使用人。癇癪を起こして何度も泣かせたけれど最後まで付いてきてくれた彼女には多大の感謝をしている。今ではバングラデシュでも良かったのではなく、バングラデシュだから良かった、そう思う。

任地を離れるバスの中でこらえても流れ出す涙。帽子の庇で目を隠し、誰にも悟られないようにしながら泣いた。この涙の意味は何だったのだろうか。今でもはっきりと答えることはできない。

（了）

横山和正 Kazumasa Yokoyama

派遣国：マレイシア
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度3次隊（活動期間1987年3月～1989年3月）
出身地：静岡県

初　出：「野菜園芸技術」1989.3.1（(社)全国農業改良普及協会）

青年海外協力隊は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野に亘り、それぞれ活発な活動を展開。その1つ、マレイシアで野菜栽培の指導に活躍している隊員のレポートを紹介しよう。

＊　＊　＊

マレイシアはNIESの一員として発展目覚ましく、日本、韓国に学べと活気に満ちている国だ。主な農産物としてあげられるのは、まずオイルパームと天然ゴム。1985年現在、パーム油及びゴムの生産量は世界市場のそれぞれ60%、34%を占め、カカオ豆についても、今世紀末までには世界の3指に入る勢いである。だが、①主農産物が国際商品のモノカルチャー的生産物であるため、国際市況の影響を受けて経営が不安定である、②伝統的な小規模農家についても、その小規模・分散性ゆえに収益性・競争力が弱い――という問題もかかえている。

そんな農業背景の中で、私が協力隊員として派遣された今の任地は、首都クアラルンプールの北西300kmの沿岸地帯で、軍港とリゾート地をひかえたスティアワンという町。この町のはずれに、私の職場、フェルクラ中央訓練所がある。ここはマレイシア土地再開発公団（FELCR）に属し、農村の再開発を目的とし、主にゴム、オイルパームの栽培技術、経営技術を指導している。

この訓練所のコースの中に、換金作物栽培コースがある。このコースは、昭和61年に協力隊員の発案でできたもので、私で4代目となり、現在までに300名近い卒業生を送り出した。私の任務は、現在まで行われてきたコースの内容再検討と現状に見合ったコース作り。また、入植地と訓練所を結び付ける組織作りを行いつつ、実習圃場の作付け・管理を行っている。

FELCRの入植地でも、やはりゴム、オイルパームが栽培されているのだが、前述の通り、国際市況の影響を受ける作物だけに、入植者の現金収入の安定と現金の流失を防ぐ目的で、換金作物の栽培が奨励されるようになってきた。ただ、現在はゴムやオイルパームの価格が盛り返して安定しているために、換金作物の栽培を手掛ける者は少ない。しかし、中には野菜のコマーシャル栽培を行っている入植地も見られる。

私は、この6月に今の任地に転任したばかりだが、マレイシアの野菜栽培を1年余り見て、最重要課題は土壌の保全・改良だと感じる。30℃を超す毎日、土壌中の分解速度は早く、一雨降れば土壌養分が雨に持っていかれる。しかも、もともと肥沃な土地ではない。有機物の施用とマルチングは重点的に行わなければならないし、訓練所でも行っている。

またこの国では、農薬の乱用も問題となっている。先日もシンガポールが、マレイシアの高原地帯でとれた野菜の輸入を禁止したばかりである。ゆえに、農薬使用に関する病害虫防除、または農薬外での防除にも力を入れなければならない。

農業隊員にとって、2年の協力活動は短い。私の描いていた発展途上国での協力活動とその要求とではギャップもあるが、主役は現地の人々であることを忘れず、残る任期も自分に素直に活動していきたい。

（了）

藤原俊次 Shunji Fujiwara
派遣国：マレイシア
職　種：野菜
隊　次：昭和62年度1次隊（活動期間1987年7月～1989年10月）
出身地：高知県
初　出：「農村報知新聞」1989 5.28（㈱農村報知新聞社）

自分の未知の部分が見えてくる

私の任地は、マレイシアの中で最も宗教色（イスラム教）が強いクランタン州の最南端に位置し、山間部の盆地にあり、入植地の回りにはジャングルが点在する。したがって、時々珍しい動物及び行動場面に遭遇することがある。しかし、現在この地域にも森林の伐採の波が押し寄せている。したがって、野生動物達の姿もより奥地へ行かなければ、しだいに見えなくなると思われる。

気候は熱帯性気候で、雨季は11月から翌年の1月迄。その他は乾期が続くのだが、私の住んでいるグアムサンでは、1年間に約260日は雨が降る。また盆地のためにフェーン現象が起り、日中の最高気温35℃以上、また夜間でも28℃と高い日が続く時はめずらしくない。でも雨季は反対に寒い日が続く時がある。しかしながら近年マレイシアにおいても、異常気象が現われている。

民族はマレー系50%、中国系20%、インド系5%、その他25%の割合である。言語はマレー語が主と言いたいが、今でもクランタン語（方言）が日常会話で使われている。他に、中国語（ホッケン語）、タミール語、タイ語、アスリー語がその民族の間で使われている。したがって、卦任時は全くわからないが、半年ぐらい生活していると少しずつとわかり始める。

マレイシアの産業は第1次産業が主体で、ゴム・オイルパーム・果物等である。私が居る入植地もゴム・オイルパームが主体であるが、収穫は来年からと思える。したがって、現在入植地の人々の生活経済はあまり良くなく、入植者達の1か月の給料は1人当りM$200で、夫婦で働いている者はM$400となる。これに対し、ここグアムサンでの物価は大変高い。その理由は、ここの地域はマレイシア山間部にあり、全ての野菜・衣類・肉・魚・果物等は他の地域から陸上輸送で来るため値段が大変高い。全ての品物の小売価格はコタバルより1.5倍から2倍という高い値段である。

入植者達の住宅状況は、今は全員の入植者達が6軒のロングハウスに収容されているが、現在地の場所に新しく住宅を建築している。3年後には、新しい住宅に移る計画になっているが、無償ではない。ゴム・オイルパームの収穫が始まれば、その時点から月に決まった額が給料の中から天引されるのである。返済期間は30年から35年とされているようである。

ここの入植地は、グアムサンの街より約20km離れているため、公共設備の電気また水道は来ていない。したがって入植地内では、電気はジェネレーターによる自家発電で、午後7時より翌朝午前7時迄使用が出来る。水の方は、近くの川よりポンプで汲み上げられているが、毎日午後2時より午後5時迄と決められている。しかし、大雨の時等は、川の水が真っ赤になり使用できないので、2日ぐらいはポンプを回わさない。したがって多くの住民は、ドラム缶または、プラスチックの容器に、川の水がきれいな時の水を貯めている。これは生活の知恵だと思われる。

マレイシアの農業事情は、現在までは政府政策によって水稲が主体であったが、自給率が80%台に達したため、これからは野菜の方に力を入れるようである。野菜産地としては、平均して主部クアラルンプール付近から南が主体であるが、ペラ州とクランタン州の境いにキャメロンハイランドがあり、気温等が高級野菜栽培に適しているため、シンガポール向けのマレイシア唯一の輸出野菜等も栽培されている。

一方、マレイシア北部国境付近の州では、タイ国が近くコストの低い野菜が輸入されているため、この付近の州の野菜自給率は平均して低い。このため私の配属先であるFELCRAは政府政策に従い、主要作物（ゴム　オイルパーム）の他に換金プロジェクトとして、プロジェクトエコノミー（総合プロジェクトの名前）があり、私の配属先の入植地でも、養魚・養羊・野菜等のプロジェクトがある。

私は、入植地において野菜と食用作物の担当スタッフとして卦任当初から普及を目的として活動している。現在、入植地の職員に対し自給自足を目的に（超過分については販売）、入植者に対しては販売を目的とし、畑を開き栽培普及に努めている。卦任当初私は、野菜の熱帯栽培知識が無かったために大変苦労した。播種時は、アリによる食害、育苗中は、ナメクジ類による食害、また本圃においては、家畜・野生動物による進入及び食害などと、日本では

考えられないことを体験した。

また、入植地及び付近では、土の酸性度が高く栽培しにくいのが現状である。よって、草木灰の利用、草によるマルチング、タバコの吸いガラ、食酢の利用等を今まで私自身も勉強し、彼らに教えている。また、彼らの栽培技術については、今までのマレイシアに合った自給自足の栽培技術は持っている。しかしながら、多収、品質の向上における集約栽培技術は、今なお普及されているとは言えない段階と思う。

赴任当初から1年半を過ぎ、今私の感じていることは、日本では、自分自身のことを知りつくしていたと思っていたが、日本を離れ、家族と離れ、外国で自分1人外人を相手に、毎日仕事と生活をしていると、自分の未知の部分がよく見えて来る。自分の良い面、悪い面、また、日本人としての良い面、悪い面等が・・。

協力隊活動2年間、この2年間に、自分の人生（形態は違う）が集約されているのでは・、と考えさせられる今日この頃である。

（了）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

久保田　淳 Jun Kubota

派遣国：マレイシア
職　種：野菜
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年3月～1992年3月）
出身地：愛知県
初　出：「農村報知新聞」1992.1.1（㈱農村報知新聞社）

努力と行動が自信へ

今いるこの大地の発展に期待を馳せ、今日も熱い陽射しの中で彼らと共に野菜を見つめている

マレーシアは東南アジアのほぼ中央に位置しており、マレーシア半島とボルネオ島北部にある東マレーシアとからなる国である。国土面積が約33万平方キロメートルと、日本の総面積の90%ほどの小さな国である。全体の人口も1,700万で、人口密度は低い。また以前、イギリスの植民地だったこともあり、プランテーションの労働者として多くのインド人のみならず、中国人などが移住している。それにサワサラのイバン族、サバのカダサン族という土着民から構成されている複合民族国家でもある。

このようにそれぞれ民族が、それぞれの宗教・文化・生活様式を今でも維持しており、言語もそれぞれの母国語を使うなど、自分達の社会をこの国の中で形成しているところである。

私の任地は、マレーシア13州の中で最も小さな最北の州、ペルリスである。ここでの配属先の"連邦土地総合整備公団"は1966年に設立された各州の開発が不成功に終わった土地の再開発・辺境村落隣接地の開発・既存農山村の開発、統合などを目的としている団体である。そしてそれを目的として、ゴム・オイルパーム等のプランテーションも行っている。その中で野菜栽培は副収入源プロジェクトの1つで、私はそこのアドバイザー的な存在である。

任地からは市場が比較的近く、野菜栽培経験者が多いことから副収入源として栽培が行われており、それと同時にゴム・オイルパーム・果樹苗木の株間、宅地予定地の有効利用等の研究も兼ねている。

ここで着任当時、私がまず当惑したのは栽培方法・習慣の違いである。広大な土地、道路工事現場のような土壌。コナガ・キスジノミハムシなどの害虫の大群。思わず笑い出したくなるような激しい風雨。乾期、etc　。しかしこれらの環境は彼らにとっては当たり前の事で、驚くのは日本の農業しか知らない私だけであり、環境が違えば栽培方法も違って当然なのだが、当初はかなり異質なものに感じられた。なにせニンジンのような"オクラ"や、大根のような"ナス"がここでは元気に育っているのである。食文化と嗜好・品質基準の違いから、このような野菜が出来るのだろうと思われるが、なかなか豪快である。

日本の農業と言っても、大学時代の実習程度の経験と知識しかなかったのだから、かなりのカルチャーショックを受けたわけであるが、それも実際に彼等と一緒に自分で栽培してみると、「なるほど。この方が手っとり早いや」というような事がいろいろと多いのである。日本の習慣や方法ばかりを論じて、「えっ？そんなことしたら・」などと思っていても野菜は育っていくのである。作る人間がおおらかならば、野菜もおおらかなのである。

この状況に慣れるまでに1年あまりかかってしまったが、大切なのは"その国の環境に合わせたやり方で、いかに日本での知識や経験を取り入れていくか"なのである。そうでないと、せっかく協力隊としてへ赴任しても、なかなか行動を起こせないままで終わってしまいかねない。2年間は以外にも短いものであり、その中で精一杯の努力と行動がやがて自信へとつながってゆく。努力のないところから自信など湧くはずがない。私自身、どれだけの自信がついたのかはまだ分からないが、この国で、野菜栽培というものを通して痛切に感じたことである。

最後にこの国に来て、驚いたことがもう一つある。それはプランテーションによる、森林伐採の問題である。これは野菜栽培をする場合でも同様で、着任当時4エーカーほどであった圃場もあれよあれよという間に、40エーカーほどに膨れあがってしまった。果樹の成木していないこともあってか、「植えられるところにはどんどん植えてしまえ」というおおらかなマレー人気質がここにもうかがえる。ゴム園などにいたっては、森林を片っ端から切り開き、少々の山も何のその。切り倒した木も木材しとして利用するのではなく、ほとんど燃やしてしまうのである。

切り開かれたはげ山を前に、"日本だったらどんなものを植えるか"という質問に「俺だったら植林する」と答えると、「ミカンとかリンゴじゃないのか」と言われてしまった。

彼等にとっては多分、木材に対する認識と必要性が不足しているのだろうと思われるが、世界的に森林保護が叫ばれている今、農業形態の改善を含めて、

解決しなければならない問題だろう。

以前読んだ、落合信彦氏の本の中で書かれていたマレーシア、タイ、インドネシア、フィリピンが、ASEAN諸国とオーストラリア、ニュージーランドを加えた8カ国の共同体を作った場合の穀倉になり得るという文章を思い出した。今ではそんな事を思い出す余裕がなかったが、これからの残された協力隊活動を行ううえで、この言葉を思い出しながら、この国で感じたこと、経験したことを誇りに思う日が来ることを願うと同時に、今いるこの大地の発展に期待を馳せて、私は今日も熱い陽射しの中で彼等と共に、野菜を見つめている。

(了)

小倉浩一 Koichi Ogura

派遣国：ネパール
職　種：野菜
隊　次：昭和60年度2次隊（活動期間1985年12月～1987年12月）
出身地：神奈川県
初　出：「日本農民新聞」1988.11.22（日本農民新聞社）

国際協力事業団の青年海外協力隊（中村武事務局長）では、先進国の人材を求める開発途上国に対して、協力隊の派遣を実施している。現在、41カ国で約8,400名の日本の若い力が現地のさまざまな分野で活躍し、それぞれの国の経済的・社会的発展に貢献している。ここではその一人、ネパールで野菜栽培隊員の小倉浩一さん（神奈川県横浜市出身、26才）のレポートの一部を紹介しよう。

＊　＊　＊

ネパールからのレポート

ネパールというと山岳地帯のイメージがあるが、インドに接する南部は、うっそうとしたジャングルである。気候は乾期と雨期に分かれ、南部地方や私の赴任地の4、5月の暑さは、ヒマラヤのイメージとは程遠いものである。

農業省農業局に配属された私は、アネコットという村に居を構えて、野菜栽培の巡回指導にあたることになった。この国でも大根やキャベツ、カリフラワーなどお馴染の野菜が作られてはいるが、ネパールの一般的な暮しはほぼ自給自足であり、作るのは米、ジャガイモ、トウモロコシといった穀物がほとんどだ。野菜については、流通システムが確立されていないため、せっかく作ってもやはり自給自足という状況だ。

なかには本格的に野菜栽培に取組み、かなりの現金収入を得ている農家もあるが、さらに普及させるには流通システムの確立が急務であることは当然だが、より根本的な、彼ら自身の意識改革が必要となろう。そのためにも、より一歩進んだ篤農家の人々による周辺農家への助言・指導も重要である。

村は山の中にあり、歩くことにはすっかり慣らされてしまった。なにしろ、3時間、4時間かけて1軒の農家を訪ねることなどざらなのである。もっとも、ようやく辿り着いた農家で、遠く山の上を指さして「あそこにもまだいる」と聞かされた時は、さすがに気が遠くなりそうだったが。

（了）

飯塚洋子 Yoko Izuka
派遣国：スリ・ランカ
職　種：野菜
隊　次：昭和58年度3次隊（活動期間1984年1月～1987年1月）
出身地：神奈川県
初　出：「農村報知新聞」1989 9.28（㈱農村報知新聞社）

素直に感動できる自分に…

私は高校卒業後、公務員としての毎日を過ごしていた。自分の将来について特別な希望を持つ訳でもなく、ただ毎日の忙しさにまぎれていた。けれどその生活も2年が過ぎた頃、なんとなく自分の世間的な位置というものが見え始め、自分がいつでも取り替え可能な歯車である事を自覚した。そして直情的な私は目に見える生産性のないこの仕事にうんざりすると共に、何かを作り出す仕事がしたいという欲求が高まり、とうとう退職して農業系短大へ入学した。この時代にJOCVについてポスター等で知ってはいたが、あくまで自分とは異質な世界だと思い込んでいた。

短大卒業間近、ひょんなことからJOCV受験のチャンスを得た。"まさか私が"訓練所に入所するまでとても信じられない気持ちであった。そして雪の降りしきる1月下旬、スリランカに飛び、1カ月の現地語訓練を受けた。

私が赴任したのは、スリランカの首都コロンボから4時間程離れたキャンディ・ベルウッドという場所にある職業訓練校であった。山あいに面した高地で周りは一面の茶畑であった。任地では初めての日本人ではあるし、現地人スタッフも私をどう取扱うべきかだいぶ迷ったようである。その原因の一つとして、私の語学力不足が挙げられるだろう。そしてもう一つは、青年雇用省側からはそこに農業訓練コースを作るという話だったにも関わらず、当訓練所にその話が伝わっていなかったことである。ともかく意志疎通がままならないし、どうしてよいかわからないしと、あせりの毎日であったが、どうにか半年後、農業訓練コースができたのは幸運であったとしかいいようがない。

さらにはその頃、JOCV隊員で、女性の養鶏指導の隊員が来たため、この6カ月の訓練コースを分担して行えるようになった。

しかし新規のコースであったため、指導者はほとんど私達2人きりで心細いこと限りなかった。

一応訓練という形をとるからには、野菜栽培だけでなく畜産、稲作、工芸作物、果樹、園芸等も講義しなくてはならず、専門外のものは、教科書の読み聞かせに終始してしまい、現地の事情に合わない点も多かった。しかしこれは少しずつ改善してゆくことでどうにかカバーできたのではないかと思っているし、任期中、最初と最後では講義内容がかなり変わっていた。

また、実際の畑作業を通して、この地が高地であるという環境を生かし、高冷地野菜の栽培を試みた。その結果、いく度かの失敗はあったにせよ、かなり品質の良い野菜ができるようになった。しかしこれらは田舎の市場へ出荷しても、珍しがられるだけで売れはしない。4時間かかる首都まで運んでこそ、価値がでるのだ。おおよそ普通の野菜の10倍から時には100倍の値で売れる。しかし一番目の問題点は、私が所属している訓練校側から、所外への物品持ち出しを禁止されたことであった。これはなにも私達だけでなく訓練所内にいる訓練生、スタッフ共々、所内の物品を持ち出すことに関してかなり厳しい規則がある。そこで訓練所や青年雇用省へ幾度も嘆願書を提出し、許可がおりるまで1年が過ぎていた。

やがて訓練終了生の何人かは、自宅で高冷地野菜（レタス、セロリ、アスパラガス、イチゴ、白菜）を作り始め、時々、私と一緒に出荷をするようになった。それをきっかけに近くの農村に出かけ普及指導を行うようになった。

しかしもう一つ問題がでてきたのである。生産量が少ない間は、できたら、ともかく担いで売りにいけば済んでいたものが、交通（運送）を考えなくてはならなくなったからだ。これは何度か、運送会社に依頼しようかという話もでたが、とうとう3年の任期内では果し得なかった。また、これらは、私一人に引きずられ続いていた部分が多く、帰国した後どうなるかという問題が一番不安であったし、その後、この不安はある程度的中したようである。けれど、何事も、雨が降ってこそ地が固まるのであって、今後、何らかの形で地が固まるための雨であることを願って止まない。

3年間の任期中、任国外旅行も一時帰国もせずに過ごしてしまったが、何より、村に入り現地の人と接し、周りも自分も、そこにいることに違和感がなくなった。時折、違う土地へ出かけると、日本人だといわれ、初めて「ああ、私は今、外国にいたのか」と思える位であった。むろん赴任当初は、大変なカルチャーショックで、いろいろな意味で誤解が誤解

を生んでいた。けれど、人々がいったい何を軸にして生活しているか理解した時、自分が今まで持っていた、人や歴史に対する価値観が、砂をくずすようにあっけなく変わっていった。ある日突然といってよい位、自分の中でそれを感じとれた時、自分自身や周りの物に対して素直に感動できるようになり、このことが最も心に残ることである。

（了）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

飯塚洋子 Yoko Iizuka

派遣国：ブータン
職　種：野菜
隊　次：平成2年度3次隊（活動期間1991年4月～1993年4月）
出身地：神奈川県
初　出：「農機新聞」1993.7.26（㈱新農林社）

青年海外協力隊員の報告レポートを紹介する。今回は、平成2年度第3次隊としてブータンに派遣された飯塚洋子さんのレポート。飯塚さんはブータンの首都であるティンプー近郊にある農業試験場で食用作物の生産に携った。

*　　*　　*

ブータン王国の野菜栽培

遊牧中の牛が侵入、圃場を荒す
JICAの西岡先生、種子生産に努力

雄大な秘境、ブータン

ブータン王国は、最後の秘境と呼ばれているヒマラヤの小国である。しかしこの国の雰囲気は、我々日本人にとってどこか懐かしさを感じさせる空気に満ちている。

ブータンの人々の顔だちは、日本人と同じモンゴル系で、衣装さえ違わなければ、ほとんど区別がつかない。また彼らの性格も一般に大らかで、些細なことにはこだわらない人が多い。この伸びやかさは、きっと山国の一国でありながらも、古くから外国との交易が盛んであり、またブータンの人自身も、積極的に各国の土を踏みしめていったという経験からであろう。その気になりさえすれば、インド、中国はもとより、中東、ヨーロッパまでもてくてく歩いて、自分自身の2本の足だけで辿り着けるという背景があるからに違いないと思う。

であるから、とく自然に守らなければならない文化、異文化とが混じりあって成長してゆくことに敏感である。また現在ブータン自身も、消化しきれなくなった現代文化の波を受け、新しい方向付けが必要となる時期に差しかかっている。

市場に並ぶ豊富な野菜たち

例えば農業を例に挙げても、かつては大きく分けて稲作、または畑作（麦、ソバ、トウモロコシ）中心の耕作と、ヒマラヤ牛（ヤク）や乳牛、山羊などの遊牧に分けられていたが、近年、果樹栽培が盛んとなり、特にリンゴはインドネシアやバングラデシュに輸出され、外貨獲得の大きな位置を占めるようになってきた。

また近郊では、野菜栽培が盛んになり、週末に開かれる市場では、たくさんの種類の野菜が溢れんばかりに売られている。多少形の歪んだものや傷ついたものもあるが、ほとんどの場合、無農薬、無科学肥料で昼夜の温度差が大きいため、味の濃い、しかも香り高い野菜が出来るのである。

市場で通常見られるのは、ジャガイモ、赤タマネギ、キャベツ、インゲン、ニンジン、エンドウ、ナス、カリフラワーが主で、季節によってはオクラ、ニガウリ、シカクマメ、ヘビウリ、シロウリ、パパイヤなどが出回る。時々、ハクサイ、ブロッコリーなども出るのだが、ハクサイが玉であるという固定観念を持っている人には、市場でハクサイを発見することはできないであろう。なぜなら、農家ではハクサイの葉を一枚づつはいで、束にして売っているからである。どうしてこうなったのか私にもよくわからないが、多分、結球しなかったか、結球するのを待ち兼ねて、こうなってしまったに違いない。ブロッコリーは、市場で見事な花を見せている。これも菜の花と同じ感覚で収穫したからであろう。

国内での種子生産を可能にした先駆者の努力

時折、友達がブータンの野菜の種子についての問い合わせを送ってくるが、日常的に手に入るダイコンの品種は、TOKINASHI（時無）であり、ネギはKUJO（九条）、エンドウはUSUI（ウスイ）であるなど、日本の品種が導入されている。また果樹もリンゴはFUJI（フジ）、AKANE（アカネ）、TSUGARU（ツガル）などがごく普通に見られるし、ナシは時々二十世紀が出回る。

私（農業隊員）にとってこれ程ありがたい事はない。なぜなら外国へ来て最初に困るのは、始めての品種に出会い、品種特性がわからないと、どういう時期にどのような処置をしてよいのか、まったく手探りで始めなければならない事である。

特に先進国から輸入している種子に関しては、病気や病虫害に対して抵抗性のないものがあったり、栽培時期を限定されるものがある。このような場合、

とにかく一回作ってみないことにはなんとも言えないが、今日種子を蒔いて、明日収穫できる訳ではないので、時間のロスはやむをえない。

けれど、なぜこのヒマラヤの小国に、日本の種子が導入されているのかというと、種子生産の農場を設立したのは、JICA（国際協力事業団）の専門家であった西岡先生なのである。30年近くにも渡り、ブータンでの農場指導と、各種施設の設立に力を尽くしてこられ、基本的な作物については、ブータン国内で種子生産が可能となるように努力されてきた。

多くの途上国の抱える問題として、現在の優良な品種はF1（一代雑種）が多く、種子を半永久的に輸入に頼らなければならない。農家にとってこの種子の購入、またそれに付随する肥料、農薬代は大きな負担となる。これを購入できる資本のあるものは、さらに生産を上げることも可能であるが、そうでない者は耕作のための借金を抱えることになる。これに対して、需要の多い野菜の種子を自国で生産できるというのは大きな強みである。

言葉が通じないなりの苦労と工夫

さて、私自身の勤務地は、首都であるディンプー近郊にある農業試験場である。かつて国立の果樹園であったものが、近年の野菜の需要の上昇につれ、そ菜の品種選択や栽培方法の確立の必要性に迫られたため、私の勤務した年から、野菜栽培の試験も開始された。

しかし初年度は、野山に草がなくなると、遊牧中の牛が農場に侵入し、昼夜を問わず圃場を荒らした。ある日、牛を捕まえて柵の中に追い込んだところ、約半日間で14頭も捕獲した。私は思わず「ここは、家畜試験場なのではなかろうか。」とつぶやいてしまった。とにかく農場が広く、地形的にも丘陵なので、いったいどこの柵を破って侵入してくるか予想もつかない。こうして一秋冬は涙をのんだが、翌年は弱電流の鉄柵を作ってもらう予定である。今は、そのための予算がおりるように願うばかりである。

また、農場労働者の人達は、英語を理解する人が少なく、文字が分からない人も多かったので、作業の際は苗箱を品種ごとに色分けしたり、品種を数字で表したりと工夫を施した。

しかし、何と言っても大変だったのはデータ収集で、最盛期には測定するものが大量にあり、さりとて、こればかりは人任せにもできない。そこで仕方なく、協力隊の全く別の職種の隊員の方に手伝ってもらったり、友人のタイピストの女の子にアシスタントをしてもらったり、どうにか初年度は乗り越えたが、今後、少しずつ農場労働者の人達にも慣れてもらわなくてはならないだろう。

データ採収のように細かい仕事は、言葉でコミュニケーションをとらなくてはどうしようもないが、大抵の農場の仕事は、実際に現物をさわりながら指示できるので、片言のゾンガ語（国語）とネパール語（ブータンでは一般的な言葉）で、どうにかやってゆける。それにしてもやはり、最低限の言葉は必要である。

朝日に照らされ、レントゲンが浮かぶ？

さて、農場の圃場について、今でも思い出すエピソードを紹介しよう。当初、圃場内では、野菜の品種名を記しておくネームプレートがなく、畑にただひたすら野菜が植わっているような状態であった。そこで、何とかネームプレートの代わりになるようなものはないかと、人に相談したり、木の立て札を立てたりしているうちに、レントゲン写真を細く切って、白いペンキで書いたらよかろうという話になった。さっそく病院勤務の隊員から写しそこねのレントゲン写真をもらい、１枚ではペラペラなので２枚貼り合わせ、名前を記入して早々に畑に立てた。その時はなかなか見栄えも良く、まあまあだと満足していた。が　翌日の朝早く畑に行ったところ、野菜のネームプレートに朝日が当たり、胸部レントゲンの胸骨が白く浮き出ている様子は、なかなか不気味で、それが幾つも畑の土の中からニョツキリ立ち、少なくともそれ以降、レントゲン写真をネームプレート替わりに使用することは中止した。

（了）

木島祐子 Yuko Kijima
派遣国：スリ・ランカ
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1988年7月～1988年7月）
出身地：埼玉県
初　出：「日本農業新聞」1990 9.8（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回は、その1つ、スリランカで野菜栽培の指導に活躍した隊員のリポートを紹介する。

*　　*　　*

木島祐子隊員の報告

スリランカと言えば、何と言っても紅茶の国で知られているが、私が赴任した標高1500mの高地では意外にもニンジン、ジャガイモ、キャベツといった野菜の産地でもある。私の現地での活動は「新作目の導入と日本の園芸技術のデモンストレーション」であった。

まず、1アール余りの土地を利用してパイプハウスを作り、「デモンストレーションで育苗したものを農民に配布し、その栽培の巡回指導をする」という計画を立てた。いろいろと試行錯誤を重ね、なんとかハウスが使えるようになったのは、案を出してから4か月以上もたっていた。

それでも育苗をはじめると多くの人がみにきた。とりあえず、試作としてナス150本、トマト80本を植えたが、生育にしたがって苗の本数が減り、結局1人5本までの家庭菜園程度になってしまった。

その後、セロリでも実行し、3軒の農家で栽培指導を行い、まずまずの成果をあげた。

1年で生活に慣れ、もう1年で仕事のメドがついたところで帰国。心残りはあるが、満足した活動ができたと思う。

（了）

村橋美代子 Miyoko Murahashi
派遣国：スリ・ランカ
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1986年7月～1988年7月）
出身地：鹿児島県
初　出：「日本農民新聞」1991.3.26／4.16　2回連載（日本農民新聞社）

海外協力隊で活躍する若い日本女性

（1回目）

青年海外協力隊に参加し、スリランカの国民農協で野菜作りに取り組んだ村橋美代子さんのレポートから苦労話の一端を。

＊　＊　＊

「依頼された業務は①巡回指導②栽培技術の改良③新品種の導入④市場開発であった。

全く機械化されていないので耕うん機を用いて省力化を考えたが、ただでさえ余っている労働力がもっと余る。ネギの土寄せで白い部分を長く太くと思ったら現地では緑の部分の長いのが好まれる。高価なビニールで黒マルチをかけるより安い人件費で人手をかけて除草した方がよい。主食のカレーに使えるカリフラワー、ブロッコリーを栽培してみたが・・・」

（2回目）

スリランカにて

海外で国づくりに貢献する青年海外協力隊。今回はその女性隊員としてスリランカで活躍する村橋美代子隊員のレポート（要旨）を紹介する。

＊　＊　＊

スリランカの農業は全く機械化されていないので、耕耘機を1台買ってそれをまわりの農家に安く貸し、少しでも省力化しようと思ったが、機械が高くて普及しないだろうということで配属先で了承されなかった。もっとも、何もかも機械化されてしまったら、ただでさえ余っている労働力がもっと余ることになってしまっただろう。

栽培技術の改良については、とにかく日本と違うのでなかなか受け入れられなかったし、試みてくれても結果的には現地で行われている方法が1番ということになった。

例えばネギの土寄せ。土寄せすれば白い部分が長くなるし太くなるが、スリランカでは白い部分より緑の部分が長い方が好まれるし、ネギ1本あたりは太くなっても、単位面積当たりの重さを比較すると同じという結果だった。スリランカでは野菜の価格は重さで決まり、日本のように規格がないのである。

また、黒マルチやトンネル掛けを指導してみたが、マルチについては人件費が安いので高価なビニールを使い捨てるより人手をかけた方が良いという結論になった。トンネルは再使用が可能なので、まわりの家でも少々見られるようになったが、貧しい農家には先のことである。

協力隊の活動はボランティアという性格をもつものだが、仕事が遂行できたのも、またスリランカでの2年間生活を無事に送ることが出来たのも、現地の人の協力があったからに他ならない。

（了）

佐々木　透 Toru Sasaki
派遣国：スリランカ
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度2次隊（活動期間1986年12月～1988年12月）
出身地：岩手県
初　出：「日本農業新聞」1989.6.18（全国新聞情報農業協同組合（連））

青年海外協力隊員は、現地の人々と同じ言葉を話し、同じところに住み、同じものを食べ、自らの利益を求めることなく、ひたすら開発途上国の新しい国づくりに協力している。派遣職種はさまざまな分野にわたり、それぞれ活発な活動を展開している。今回は、その1つ、スリランカで野菜栽培の指導に活躍している隊員のレポートを紹介する。

＊　＊　＊

野菜栽培の指導で活躍

スリランカは、インドの先端に浮かぶ北海道より少し小さめの島である。そこで私は、青年問題雇用省から、見渡す限りの山々のすべてが紅茶にうまった標高1800メートルの山岳地帯ヌワラエリヤに配属された。青年団の中で、省から農業経営のためのローンを借りているメンバーに、栽培と経営のアドバイスをするのが活動だ。

取り組むべき問題や協力活動の課題は山積していたが、ポイントを激変する天候に対処する技術においた。具体的にはマルチ栽培による省力化、省農薬・肥料、浴光催芽で強健な芽を出し、カットし生育スピードをはやめるなどだ。結果は大変良好だったのだが、対象区をエキ病でほぼ全滅させてしまったので、見かけの総収量はまあ良いというほどで、農民に対するアピールの力は弱かった。

現在は、少し暖かい1500メートルの地域で、1週間ごとに、は種する回転率の早い軟弱野菜や、環境変化に強い中国野菜で天候の激変を回避し、危険度を分散させる方法をデモンストレイトしている。これら野菜は、ジャガイモをしのぐ高収益となる。

長年の慣習や生活習慣などが、新しい技術の普及の妨げになっているが、タイトな日本ではどうしても不発に終わってしまいがちな、青年のエネルギーを発揮する場は、やはり協力隊活動ならではと感じた。

（了）

塩見慎次郎 Shinjiro Shiomi

派遣国：エティオピア
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1986年8月～1988年8月）
出身地：京都府
初　出：「日本農民新聞」1989.6.20（日本農民新聞社）

国際協力事業団（＝ＪＩＣＡ、柳谷謙介総裁）では、開発途上国に熱意と卓越した技術を持った青年海外協力隊や海外開発青年を派遣して、現地の新しい国づくりを応援している。

今回は、アフリカ・エチオピアで、野菜の栽培技術の普及・定着に熱意を燃やす塩見慎次郎さん（31才）の近況レポート（抜粋）を以下に紹介したい。

＊　＊　＊

豊かな食生活に貢献

エチオピアは「アフリカの角」と呼ばれる東アフリカに位置し、国土は日本の約３倍の面積を有するが、人口は３分の１の4200万人で、100を越える部族が存在すると言われる。それぞれの部族は異なる言語、文化、習慣を持ち、そのことがこの国の社会に対し、あらゆる面で様々な影響を及ぼしている。

主要農産物は、コーヒー、テフ（ヒエの１種）、トウモロコシ、ソルガム、柑橘類、綿花等で、国営農場では機械化された大規模農業が輸出向けの換金作物主体に行われているのに対し、農民の共同農場や私有地では、役牛を利用した小規模農業が主となっている。

テフは人々の主食であるインジェラ（発酵させて焼いた薄いパン）の原料である。そのインジェラを手でちぎり、ワットと呼ばれるシチューをつけて食べるのが習慣で、人々は長い歴史を通じて培われてきたこの食生活を頑固なまでに守り通してきた。そのため、この料理に使われる野菜（トマト、トウガラシ、タマネギ、ニンニク、ショウガ、ジャガイモ）以外のものは、その栽培・消費ともに普及、浸透しにくいようである。

また、１日に１度しか食事をしない人が多く、"ボルディ"と呼ばれる地酒（トウモロコシやソルガムから作ったどぶろく）を好んで飲むので、仕事に酔ってやって来たり腹が減って力仕事ができず、思うように仕事が運ばないこともしばしばだ。

食習慣と厳しい気候条件、農民の経済力不足により、ほとんどの野菜・果樹（熱帯果樹を除く）は栽培されていない状況下で、私がまずやるべきことは、ガンベラ（アジスアベバから西へ800km程行った人口5000人程度の町）の地で、どんな野菜・果樹が栽培可能なのかを知ることであった。様々な種類の野菜や果樹の栽培試験を行い、最も有力な数種類を選抜した。そしてそれらの種　苗等の植物材料を多数作って周辺の農家や共同農場へ配布し、栽培指導も併せて行った。

ガンベラに限らず、この国には農業のみならず他産業においても大きな潜在力がある。日本人の枠にとらわれず、どんどん進んで他国の組織とも交わり、情報を交換し、協力し合って、この国に対しての援助のあり方がどうあるべきなのか、私たちに出来ることは何なのかを考え、それを実践してゆければどんなにすばらしいだろうか、そしてこの国が、外国からの援助に頼ることなく、立派に１人立ちしてゆける国になれば、この国にとっても人々にとってもどんなに喜ばしいことか、などと思案している毎日である。

（了）

三木　誠　Makoto Miki
派遣国：ガーナ
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度3次隊（活動期間1987年3月～1990年3月）
出身地：東京都
初　出：「海外新聞」1988.11.1（(社)日本海外協会）

現地の人たちと共に

私は、青年海外協力隊隊員として昭和62年4月よりガーナ共和国に派遣され、首都アクラから内陸へ約1000km入ったナブロンゴで野菜の園芸指導を行っています。

こちらでは、乾期の11月から3月までの約5ケ月間、まったく雨が降りません。雨期は、日本の梅雨とはだいぶ違いドラム缶をひっくり返したような雨が降った後、晴れ間が広がります。住民たちは、雨期が始まると家族総出で家のまわりを耕して早生のアワを栽培し、収穫後にコーンか落花生を植え、雨期の間に1年分の食糧を確保します。

私は、ガーナ教育省のもとで、家庭の都合により小・中学校をドロップアウトした生徒を対象にナブロンゴの職業訓練校で栽培技術の取得と普及をめざしてトレーニングを行っています。

学校の実習で作物栽培をしていて、水・動物といった問題が大きな妨げとなっており、病虫害の発生以上に深刻なのです。当地は、土地が粘土質のため雨が降り続くと"畑が池"のようになってしまいます。そこで、30cmの高ウネを作りました。一方、乾期は雨が降りませんので近くの井戸から水を汲み灌水して稲ワラマルチによって水の蒸発をおさえています。

また、住民がニワトリ・ヤギ・ブタ・牛を放し飼いにしているので、これら動物がちょっと目を離したスキに畑の作物を食い荒します。私の学校では、定植前のトマトの苗を一晩で食い荒らされ、あわてて稲ワラで編んだローカルマットでフェンスを作りました。ところが、乾期で食べる草がなくなると牛が"フェンスを食べ"できたスキ間からヤギ・ニワトリが侵入して、毎日が動物との戦いです。

村の巡回では、乾期に主にトマト栽培をしました。当地では、日本でいう加工品種のものが栽培されています。今まで当地の人たちは、無肥料、苗床で育苗し、それから本畑へ移植して活着後チッソ肥料を与える方法をとっており、このやり方だと移植のさいに苗を根元から引き抜くようなことが行われ、これが根の切断による生育不良につながっている。

そこで私は、まず、みんなに牛糞を拾い集めさせ、これを有機肥料として利用、また、育苗時発芽の後、仮植をしてから根鉢をつけたまま定植するよう指導しています。

このように、まだまだガーナの農業には、数多くの問題がありますが、日本で学んだことを基本とし"この地に適した農業"を農民とともにがんばってやっていこうと思います。

（了）

星　洋介 Yosuke Hoshi
派遣国：ガーナ
職　種：野菜
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1988年1月～1990年1月）
出身地：新潟県
初　出：「農村報知新聞」1989 3.28（㈱農村報知新聞社）

正しい農業の方向づけ

ガーナに野菜栽培の指導員として赴任してから早半年が経つ。私が配属されたのは首都アクラからトーゴ寄りに110km離れたソガコペという小さな村である。この村でローマンカソリックの神父が主軸となり職業訓練校を開講しようとしている。この学校は男子向けのAコースと女子向けのBコースがあり、Aコースは農業、農業機械、建設、木工、Bコースはドレスメーキング、ホームサイエンスタイプである。

私はここで農業の授業と実習を受け持つことになっていた。2月末に現地に赴任したときには、校舎は完成しておらず、また生徒の募集も行われていなかった。本格的になり出したのは5月。生徒募集、入学試験があり、関係機関からの代表が教師に面接をもったりした。開校は6月と一時は決定したものの現在（7月20日）に至っても開校がなされていない。現在は9月からとの噂だけである。こういう事に関してガーナはとてもルーズな国なのである。

その間、私の仕事は4エーカーのメイズ（デントコーン）と4エーカーのシトロネラ（石鹸の材料となるイネ科植物）の管理、そして1アールほどの菜園での野菜作りであった。菜園は3人のイタリア神父への野菜供給という単なる個人的目的の菜園であった。しかし自由になる畑を持つことは貴重でもあった。ガーナに協力隊としてやって来て、白人神父のために野菜作りをすることにジレンマを感じてはいたが、それならばそれで開校まで自由に野菜栽培をしてみようと思った。

種子は沢山手元にあった。自分が日本から持ってきたもの、神父がイタリアからとり寄せたもの、またアメリカのピースコーからも提供があった。ガーナでもガーナシードカンパニーという種苗会社からローカル種を購入することができる。トマト、ナス、オニオン、キャベツ、ニンジン、オクラ、キュウリなどである。ここでガーナの野菜について少し触れておきたい。

アクラでは、だいたいの野菜が手に入る。既述の野菜の他、ニンニク、ショウガ、スイカ、レタス、輸入物だがジャガイモ、時折貧弱ではあるがダイコンも見ることがある。しかし首都から離れ、村に入ると野菜は非常に限られてくる。だいたいどこにでもある野菜はトマト、ナス、オニオン、オクラくらいである。他の野菜はガーナ料理に必要とされないためであろう。ガーナ料理は野菜について言えば、トマトとオクラがあればこと足りる。アクラではかなり需要がある。外人が多いからだ。ほとんどの野菜は外人あるいは外人向けレストランのために栽培されているといってもいいように思う。

品質について言えば、まだまだ改良されていいと思うものばかりだ。例えばトマト、オニオン、ニンジン、は非常に小粒である。トマトは生食にする習慣がない。全て煮て、つぶしてしまう。だから大きく育てる必要もないのかもしれない。ナスは水にさらしても苦味が抜けない。ニンジンは直径1cm～1.5cmの小さなものばかり。キュウリは大型で味も大味である。

ガーナの栽培法をみていると面白い事がある。デントコーン、オクラでみたのだが、1ヵ所3～4粒蒔きする。それはいいのだが発芽後それを間引こうとしない。株数が多ければ収穫もまた多いと思い込んでいる。トマトにしても腋芽つみはしない。放任している。トマトの型が小さくなるのも当然である。またこれから考えると、ニンジンもへたすると間引きしていないのかもしれない。

私が初めに手がけたのはナス（千両二号）、メロン（アメリカ種）、ニンジン（ニューキングチャンテネー）、スイカ（アメリカ種）、トマト（アメリカ種）、レタス（イタリア種）、スイートコーン（ハニーバンタム）である。おわかりの通りガーナのローカル種はつかっていない。ほとんど興味本位に、果して上手くいくかという心境でのスタートだった。おおざっぱに結果を述べておきたい。

ナスはチャノホコリダニに悩まされはしたが、更新せん定して2ヵ月半の間収穫してこれた。メロンも収穫できた。気温が高いせいか結実から成熟までがすごく早かった。結実して約30日後には完熟して離弁するといった具合である。ニンジンは病虫害をまったく寄せつけなかった。ガーナにはニンジンを好む虫がいないのかと思ったほどである。レタスもまた病虫害がなかった。しかし抽台が早いので毎日少しずつ食べるということは難しい。スイカは育苗型、直播型と二度挑戦したが、いずれも害虫の餌と

なってしまった。

スイートコーンはいくらか収穫できたがよくなかった。見ていると、草丈1mにも達しないうちに雄穂が出はじめた。栄養生長が十分行われないうちに生殖生長へと移行してしまうらしい。トマトは草勢も良く花も多くつけたが結実しなかった。調べてみると気温30℃以上の高温では花粉の発育停止、めしべの障害などが起きるとのこと。ヤシの葉で日陰をつくってみたりしたが結局1つも結実しなかった。現在ガーナ種のトマトを栽培しているが、これだと問題なく結実する。全体を通して感じることは野菜の一生のサイクルがすごく早いということ。興味もあるところなので、授業がはじまったら生徒とともに生育調査、降水量や気温変化などの調査をやっていきたいと思っている。

現在、2作目に入っている。新たにブッシュを切り開いて広げた畑もある。ここの菜園の土質は粘土質。雨が降ればグチャグチャ、乾けばカチカチというものだ。そのため中耕作業の回数が多くなる。赴任して半年経つが、土はだんだん良くなってきていると思う。新しく広げた畑と比べるとよく分かる。施肥は牛糞（サラサラに乾燥しており、すぐ使える）、灰である。砂を入れて土質の改良も試みている。ここには化成肥料15−15−15があり、迫肥として使っている。本来なら化成などは使いたくないのである。なぜなら化成は高価でありとても一般のガーナ人は使うことができない。また土にも良くない。実際指導するときには、化成をどれくらいなどとは言えないのである。今は野菜を供給しなければならない責任もあり使っているわけである。一方では雑草を中心とした堆肥作り、木草灰作りなども行っている。また試験的に雑草のすき込みもしている。土中に微生物を増やそうというつもりだ。ゆくゆくは自分の菜園も完全有機栽培にしたいと思っている。

私はガーナに日本農業に辿った道を歩いて欲しくないと思っている。農薬づけの野菜、無機化した土。今から正しい方向づけをして発展していって欲しいと思うのだ。しかしガーナ国民の意識は近代化、より便利なものを欲する傾向が強い。農薬、化学肥料が安価で手に入るようになれば一もニもなく手を出すにちがいない。こんな状態の中では、私の考えはあまりにも無力である。今、私にできることは身近にいるガーナ人たちに、この自分の気持を理解してもらうことだと思っている。将来その人たちが活躍してくれたらという夢をこめて。

（了）

伊藤正彦 Masahiko Ito
派遣国：ガーナ
職　種：野菜
隊　次：昭和63年度2次隊（活動期間1989年1月～1992年1月）
出身地：宮城県
初　出：「日本農民新聞」1992.1.4（日本農民新聞社）

青年海外協力隊は、アジア、アフリカ、中近東、中南米などの開発途上国の人々のために自分の持っている技術を普及させる目的で各国に派遣されている。今回は、ガーナで現地の人々と一緒になって活躍している隊員のレポートを紹介する。

*　　*　　*

たい肥の重要性を指導

ボルガタンガ、アクラより約800km北に位置する州都が私の任地です。だいたい5月から10月までが雨期で、この時期、現地の人々はミレット、ソルガム、落花生、ビースやその他ビトー、アレフなどといった現地野菜などの作物を作ります。乾期は日中、最高気温が摂氏50度になる日もあり、風景は荒涼とした半砂漠化と化します。この時期に一部のかんがい用水が使える農民だけがトマトやタマネギといった野菜を栽培し、他の人々は農作業をほとんどしません。

さて、こうした環境のもとで4人の研修生に対して私の農業指導が始まったのです。彼らとともに泥でたい肥小屋作りを始めるのと並行し、デモンストレーション・ファームを作りました。畑は80平方メートル位で、そこにソルガムの茎で柵を張り巡らします。これは乾期でもまた、かんがい用水がなくても野菜作りができることと、たい肥の効果との関係はどの程度かを示すためのものです。

まず乾期における野菜への水の供給のために、雨期の終わりころより畑の隣りに穴を掘り、わき水によって水を補いました。この地下水は、水位が毎日低下するのでその度に20～30センチほどの穴を掘ります。

この穴は乾期の終わりには深さ2mのすり鉢状の穴になり、雨期にはここに雨水が貯まって次の乾作期にはこの雨水を利用して野菜栽培を断続できることを、彼らに認識してもらいました。

そして、乾期には石のように硬くなる地面もたい肥を施与することで柔らかくなると同時に水分を長く保持し、植物体の大きさが施与した所とそうでない所とを比べ、たい肥がいかに重要であるかをも、納得してもらいました。

ところで私が常に活動の中で心がけているのは、農民たちの今の経済力に見合った農法を紹介し、指導するということです。

例えば彼らは私に「ポンプをくれ」といったことがありましたが、ポンプを入手してどれだけの現金収入を上げられるか、ガソリンやオイル代など高価なものをどうやって補うか、メンテナンスはきちんとできるのか――などの理由で断りました。別に意地悪をしているのではなく、たとえポンプがあったとしてもガソリン代が続かず、他のガーナ人に売ってしまうことになるのでしょう。

大切なのは、それに代わるものを何か工夫してつくるということ、彼らがやれることからやっていくというその積み重ねだと思います。そしてまず自分が彼らの側に立ってものを観て、彼らにとってそれが無駄でないか、無理がないかを考えなければならないのです。

彼らがたい肥による野菜の通年栽培を習慣とし、彼らの食料事情が向上されることを念じつつ、今日も私と研修生の活動は続きます。

（了）

****

南　雄三 Yuzo Minami
派遣国：マラウイ
職　種：野菜
隊　次：平成元年度3次隊（活動期間1990年3月～1992年3月）
出身地：鹿児島県
初　出：「農村報知新聞」1991.8.8（㈱農村報知新聞社）

第2の心のふるさと

私は、今アフリカのマラウイにおいて、野菜栽培に従事しています。勤務先の農場はマラウイの障害者の社会復帰をめざしている所です。現地のワーカーたちは、普通一般的な野菜栽培の技術は知っており、私が野菜栽培技術そのものを、助言する事はありません。そのうえ、当然の事ながらマラウイの気候からの違いがあります。例えば5月下旬から7月下旬まで日本の冬を思わす程、気温が下がる事、そして、10月から雨季に入り3月下旬頃終わる事、その間ほとんど毎日雑草刈りをしなければならない事、日光が差した時を見計らって薬剤散布しなければならない事等です。そのため逆に私が彼らから教えてもらった事がたくさんあります。その助言でここの主要嗜好野菜である、キャベツ、トマト、ニンジン等の栽培を行っています。

今農場には、キャベツ、トマト、ニンジンの他ブロッコリー、カリフラワー、セロリー、ピーマン、ダイコン等の高級野菜等16品目を栽培しています。また、3haの野菜園の他に約2.8haの果樹園、5棟の養鶏舎もあります。果樹園では、リンゴ、マンゴー、パパイヤ、グレープフルーツ、レモン、グラナディ等が植えられています。果樹園は2人のワーカーによって管理されていますが、十分に管理出来ず、所々に病害が見られます。

養鶏の方は、トーカイという品種の鶏を南アフリカより購入し、管理しています。養鶏の管理は、ワーカーも行いますが、障害者も一般管理を行っています。そして当農場は障害者のリハビリの場であり社会復帰の場でもあるのです。農場での収益は慈善団体であるMACOHAに還元しなければならないため、経営はあまりうまくいきません。MACOHA自体も慈善団体であるため、なかなか、運営は苦しいものになっています。

苦しいのは、運営だけでなく、ワーカーの生活も同じです。彼らは泥かべで作った家に住み、電気、水道、ガス等は当然設備されておらず、食物は、主食であるシマです。トウモロコシを粉にした物を使って作った、日本の餅に似たもの、それと副菜はかぼちゃの葉、豆類、これだけです。特別な日には、肉類、魚類が食卓を飾りますが、通常はシマと少しの副菜だけです。その上、シマを作るためのトウモロコシの粉は、彼らの給与のほぼ全部を占めるほどの金額であるのです。

衣服、靴等は、輸入品であり、彼らには、手がでない金額でもあり、衣服は破け、その上素足で生活しています。これだけ見ればかわいそうだと思うでしょうが、彼らは、大変陽気であり、苦しい生活を感じさせない位です。

良くワーカーが、私を自分の家に招待してくれます。そして、私が彼らの家に行くと、大変友好的に、もてなしてくれます。それは自分達の食料も十分ではないのに、私のためにご馳走を作ってくれるのです。私が「満腹だから食べられない」と言っても、彼らは私にすすめてくれます。私はそれを食べながら、もろもろの事情を察すると素直には楽しい気分になれませんでした。

その彼らは、私に彼らの家の中で一番高価な品物を私に見せ「どうだ、これもあるぞ」と自慢するのです。その時の彼らの顔は、農場で働いている時の顔ではなく、本当に楽しそうに自慢するのです。私はふっと心の中で農場でも、これと同じ顔に逢ってみたいと思った事もありました。

それと同時に、本当の幸福とは、という疑問が頭をかすめました。彼らが、自慢する物質は、壊れていたり使いものにならない物が多いのですが、大切に持ち続けているのです。物が人を幸福にするのであれば、彼らは不幸であると言わざるをえません。しかし、彼らと接していると、彼らは、絶対に不幸ではないと考えてしまいます。ならどうして彼らが品物を持っている私達日本人よりも、幸福に見えるのだろうと、考えた事もあります。

それは彼らには、本当の幸福とはなにかということがわかっているのではないか、という結論にたどりつきました。仮に私が、莫大な財を築いても、彼らが感じていることを感じる事は不可能ですし、理解できないでしょう。この事があってから幸福の価値観が私の中で変革していった事は歴然とした事実です。それ以来、私も彼らの考え、感じている幸福を感じられるよう努力しようと思いました。

もし、ここマラウイに来なければニュースや新聞等でのアフリカしか知らなかったと思います。ただかわいそうだとか、表面上の理解しか出来なかった

でしょうし、日本にいれば、心の隅では、遠い国の事だから私には関係が無いと思っていたかも知れません。

子供に関してはもっと深刻な問題があります。教育を受けられず、食料事情は悪く、病気になりやすく、6才以下の乳児死亡率は大変高いのです。親もちゃんとした教育を受けていないため手遅れになったりする事が多いのです。マラウイの子供は、家の手伝いをし、ある時は、貴重な労働者です。水汲み、開墾、植え付けなど休む間もなく働いております。

そんな子供達が死ななければならない事実はあまにも無惨な事です。しかし、こういう出来事は長い歳月繰り返されて来たことでもあります。私は近くの子供達の美しく、澄んだ瞳を見ていると、優しい気持ちになってきました。彼ら子供達が今後のマラウイを担って行くのです。私はいつまでもこのままの瞳で、今後のマラウイを見続けていってもらいたいと思いました。確かに、この国は、農業国で、国の基本は第一次産業です。工業等はほど遠いものです。

しかし、私は彼らが国の基本政策である、第一次産業拡大に力をいれ、いまよりも発展することを願わずにいられません。そのために、当農場で行っている野菜栽培が何かの役に立ってくれることを願っています。農薬等を使用することも指導していますが、いつか私が指導した事が必要になることがあった時、頭の片すみでも、昔、日本のボランティアが何か言っていたと思い出してくれる事があったら、私は涙がでるほどうれしいのです。私は農業は一朝一夕で結果は得られず、早急な発展を遂げることは不可能だと思います。

現地語に、PANGO NO PANGO NO=ゆっくり、ゆっくりという意味ですが、その言葉どおり私も溶け込んでゆきたいし、マラウイ国もゆっくり、ゆっくり発展してゆけばよいと思いました。このようなことを考えるようになったのも、協力隊に参加出来たからです。

今まで遠い国だったアフリカに来て、そこに住む住民が、こちら側が恥ずかしくなるくらい気持ちはすっきりしていて素直でした。これらの貴重な体験は、これからの私の人生において大きな意味を持つでしょう。

そして、金持ちの日本から貧しいアフリカ、しかし、心はどちらが貧しいかと考えさせられるアフリカ、かけがえの無いことを教えてくれました。

マラウイは私の第二の心のふるさとです。

(了)

太田恵美 Megumi Ota
派遣国：ニジェール
職　種：野菜
隊　次：昭和63年度2次隊（活動期間1989年1月～1992年4月）
出身地：熊本県
初　出：「農村報知新聞」1990.2.8（㈱農村報知新聞社）

いつか実を結ぶことを信じて

夜の9時、遠くで聞こえるのは子供の遊ぶ声、人々の話し声、ラジオの音、どこかでミレツトをつく杵の音、あたりは灯りもなく、ただあるのは、恐いくらい美しい満天の星空。どこからともなく、太鼓の音も響いてきた。今日も一日が終わろうとしている。灼熱の昼間とはうってかわって、静かでホッとする夜のひとときである。

ここ地の果てニジェールは、アフリカの北西。マリやアルジェリアと隣接し、国の北部にはサハラ砂漠も位置する内陸国である。ニジェールの気候はケッペンの区分によるとサバンナ気候と砂漠気候である。雨期と乾期があり、6月下旬から9月が雨期にあたり、それ以外は乾期である。乾期も2つに分かれ、11月から1月までは朝晩など肌寒く、長袖が必要であり、3月から5月までは極乾期で日中は50℃以上にもなり思考能力がほとんどなくなってしまうほどである。

私の住んでいる村は、首都ニアメの北西60km、ニジェール川沿いの村である。人口は4000人、村には電気、水道はない。ランプと井戸（川）の生活である。この村に赴任して8カ月近くになるが、この村に外国のボランティアが入るのは初めてで、最初は大変だった。皆、珍しがって30分おきに様子を見に来たりしたものである。共稼ぎの家に育った私は近所づきあいもそれほど深くはない環境にあったためこういう状態にへきえきしたりもした。又、赴任当時は極乾期にあたっていたため、どうしようもなく暑く、土の家でぐったりしていた日々もあった。が今では、ほとんどニジェール人化、村民と変わらない生活を楽しんでいる。村の主要作物はミレット、リルゴー、オクラ、ニエベで雨期には、婦人達によって少量の野菜も作られている。村における菜園の悩みは、水と囲いの問題。水の問題というのは水量豊富なニジェール川がすぐ横を流れているにもかかわらず、又井戸があっても資金等の問題で貧しい村人はそれを有効利用する事ができないというのは、農家では家畜を飼っており、それらの家畜は集められて放牧されるわけだが、その家畜が、ミルの茎で作った柵を食べてしまったり、壊したり、これもまた資金等の問題で頑丈な金網の柵を作ることはできない。といったような問題もあり、村における野菜栽培の普及の大きな障害となっている。

今手がけている仕事はモデル菜園作り。これは1年後に予定している共同菜園の予行演習という意味も含まれている。基礎的な栽培技術（堆肥づくりや育苗）のデモンストレーションはもちろんなのであるが、この村の野菜園芸は、まだまだ進んでいないため、技術の向上を目ざすというよりは、彼らの野菜に対する注目度を高め、共同作業等行う事によって、組織作りを行ってゆきたいと思っている。又、村の食生活はかなり単調で貧しいため、食生活の改善に役立てばと思っている。現在、第1回目の堆肥作りはすでに終わり、柵作り、耕起もほぼ終えたところで、やっと畑らしくなったところである。

無い物を高いお金を出して買うより、ある物を工夫して使うことがこの国には重要である。たとえば堆肥。この国には家畜が多く堆肥の材料となる草やミルの茎、稲わらなどは家畜のえさになることが多く、沢山使うことはできない。そこで考えついたのだが、ある日村の中をポケーッと歩いていた時のことである。ミレットを脱穀した時に出るカス、米でいうなら籾殻にあたるものが、村のあちこちに捨てられているのである。これを堆肥に使えないかという事である。これなら羊や牛も食べない。これは籾殻のような感触であるから堆肥になるのに時間がかかるかもしれないが、十分使えそうである。また、乾燥の激しいこの国ではマルチとしても利用できそうなのである。

実際には菜園作りを手懸けているうちにいろいろアイデアが生まれたり、問題が生じたり、農家の人に現地の知恵を教わったり、いろいろと発見の多い日々である。一年中青々と野菜が絶えず、村人の寄り所となるような菜園づくりができたらと考えている。私自身の力ではこの国の社会を変えることはできないが、できる範囲で村人と一緒になって、村の活性化、経済力向上のお手伝いができたらと思う。こういった草の根の活動がいつかは大きな実を結ぶことを信じてやまない。

（了）

阿部吉夫 Yoshio Abe

派遣国：ザンビア
職　種：野菜
隊　次：昭和59年度1次隊（活動期間1984年8月～1987年7月）
出身地：新潟県
初　出：「農村報知新聞」1988.10.28（㈱農村報知新聞社）

農業発展の一役担う

アフリカ南部にあるザンビアは、国土の大部分が標高1,000m以上のサバンナ性高原である。1年は雨期と乾期とに分かれ、気候は熱帯的だが全般的に涼しく、4月から10月まである乾期のうち、6～7月は寒くて暖房を必要とするほどである。

内陸国という障害はさまざまな部分で影響を及ぼしているが、農業に関しては、国民の目を食糧生産に向けさせることで団結力が生まれたようだ。自給自足を声を大にして訴える大統領の指導のもと、農業に対する政策強化は目を見張るものがあった。広大な国土を有し、豊かな自然環境に囲まれていることが、農業を発展させる下地となっていたのかも知れない。国民の関心が農業に集中しているこの国で、3年間の隊員生活を送ったことは、喜ばしくもあり身の引き締まる思いであった。

赴任先はザンビア園芸訓練センター。ここはチャプラ灌漑事業の母体として発足した施設で、農業者育成、農業普及員養成を主に、ザンビア農業発展の基となる人材の確保を目的としている。参加生徒は全国の州農業関係機関からの代表者であり、終了後は農業普及員として、農家のアドバイザーを務めることになっている。彼らの大半は農業に関する知識が豊かで、専門分野に対する私の知識不足を見せつけられるほどであった。

同センターで私は、野菜部門のスタッフとして学校運営に参加、実習の指導にあたることになった。

雨期と乾期がはっきりしているザンビアでは、大規模農家は別としても、個人農家にとっては、安定した収穫を得るのは大変なことだ。乾期の水不足は、特に頭を悩ませる問題になる。灌漑設備がある程度は整っている学校周辺の農家でさえ、乾期の作付けには手をやいている。

主作物であるトウモロコシは、雨が降り始める11月頃に播種され、収穫は乾期の3月頃。収穫時期には、人々の動作がいきいきとして見える。だがザンビアでは、トウモロコシを収穫したその時点から、流通に対する不安がつきまとっている。道路の不備、輸送トラックの故障、貯蔵庫の不備、その他さまざまな障害が待ち受けている。"自然の悪ふざけ"という理由だけで、食糧不足の問題を片付けられるだろうか？　雨が降らないからではなく、人的な不備がせっかくの収穫を殺している部分も多いような気がする。

私の担当業務についてもふれておこう。生徒の理論習熟度が高いこともあって、教育方針は実習重視である。言い換えれば、将来普及員となる生徒がフィールドで直面する問題に農作業を通じてふれ、学び、解決策を見出す実践型授業だ。協力隊員という立場の私としては、農作業を媒介として技術移転を図り、ザンビアの農業発展の一役を担ったつもりである。

具体的には、降霜期の育苗の際は、ビニールを利用して苗床を防寒し、効果を上げることができた。また乾期には、強い日差しを遮るためにグラスの茎でヨシズを作り、降雨期には激しい雨を避けるため、竹のフレームにビニールの覆いを付けたハウスを作った。このように、変化に富んだ気象条件のもとでの実習ができ、それなりに機に合った対策を生徒に教えられたと思っている。

（了）

小泉雅弘 Masahiro Koizumi
派遣国：ボリヴィア
職　種：野菜
隊　次：平成3年度3次隊（活動期間1992年4月～1995年4月）
出身地：神奈川県
初　出：「NGO協力情報」1993.7.25（(社) 国際食糧農業協会）

ボリビアの協力援助に参加して

空気が薄い！　ここはボリビア

私は、青年海外協力隊野菜隊員としてボリビアに赴任した。メキシコ・クエルナバカ市での夢のような語学研修が終わった後、いよいよ南米大陸に上陸。しかし日本で、この国の事情を知っている人はそう多くあるまい。

ボリビアの首都ラ・パスに着いて、最初は元気が良かった。しかし、JICA事務所で説明を聞いてるうちに、吐けない気持ち悪さに襲われ、ベッドに横たわり、酸素マスクの世話になった。そう、ここは富士山よりも標高が高いのだ。せっかくの歓迎会なのに、暗い部屋の中でひとりポツンと寝るはめになり、コカ茶のみが私の御馳走となった。

かくして、協力隊マラソンのスタートは切られたが、トラック一周目で転び、最後尾で競技場を出て行った感じである。

目を見張る町での生活

日本を抜け出して早くも11か月、任地に着いてから9か月が過ぎた。私はボリビア人に似ているのであろうか？　確かに色は浅黒く、目も大きく、ジャガイモが大好きである。多分、徐々に現地の人と同化しているためと思われる。

ボリビアの大きな町には、食べ物、飲み物は大体揃っている。白人（美人）が多く、テニス、プール、ディスコ等娯楽もあり、特に日本人には和風レストラン、カラオケ、増えるワカメ、みそ、醤油等、日本食を売る店も豊富で生活には困らない。

確かに町を少し出ると、粗末な家が目に付き、貧しい人も多いようだが、目立つのは日本ではとても買えない（作れない）ような立派な屋敷である。お手伝いさん付き、プール付き、ランドクルーザ付きの家に優雅に住んでいる家族が多く、飼われている駄犬がどこか立派に見えてくる。彼らを見ると、日本人以上に豊かな暮らしをしているようで、本当に途上国なのかと目を疑う。いや、これが途上国の特徴であって、金持ちに金が集まるシステムになっているのだ。

また、ボリビア人の他、スペイン、ドイツ、韓国、中国などの人達もおり、混血が進み、人種構成は複雑だ。ちなみに、町より少し離れた場所に日本人移住者の村（主に九州と沖縄の人の2か所）があり、それぞれ農業で生計を立てている。

協力され隊の苦労話し

しかし、これはあくまで町中とその周辺であって、日本の国土と同じ面積を持つ、私の赴任地サン・イシドロ村になると話は違う。

標高1,500m、人口約3,000人、水道無し、電気は夜7時から11時まで、警察、病院等の施設はなく、定期的なバスもない。TVは辛うじて入る。しかし、何もない不便な所ほど協力隊らしいと考えているので、私はこの村を結構気に入っている。雨量は少なく、乾燥しており、周りにはサボテンが多い。年間気温も20℃前後で大変過ごしやすい。町からこの村に戻ってくると、妙に落ち着く。

村人のほとんどが農業に従事している。ここは野菜の栽培に適しており（年間を通じて暑からず寒からず、川のため水は枯れず、乾燥していて病虫害の発生が少ない、耕地がある等の理由による）、農産物の産地となっている。主に栽培されている野菜はジャガイモ、トマト、トウモロコシ、エンドウ、インゲン、玉ネギ、人参、キュウリで、他にモモやブドウなどの果実もある。モモの木の下でジャガイモを栽培する光景も見られる。畑を整地するためトラクター、化学肥料、農薬、鶏糞、有機質肥料等を使用しており、生産性は比較的高い。

問題は、野菜の価格が天候に左右されやすい、値段が安い、農薬を使い過ぎている、出荷地まで遠く輸送が不便である……などが挙げられる。さらに農民は、地主、専属の小作人、日雇い小作人に分けられ、労賃が安い（1日約450円）ということも、大きな悩みのタネである。

私の目的は、ここサン・イシドロ村の気候、土壌に適し商品価値の高い、新しい野菜を普及させることであった。しかし現実は、配属先の試験場での栽培に追われ、近くの農家の見回りをしているうちに時が過ぎてしまった。普及は並大抵ではないことを、今更ながら肌で感じている。しかも、長年畑を耕し

ながら現在の合理的な農業を営んでいる彼らに、私は何が協力できるのか、いつも頭を抱えている。専ら教えられているのは私の方であって、今は、協力され隊ではないかとさえ思う。

トイレとドラムカン風呂がプライベート

また、南米の人は働かないと言われるが、ここの人達はよく働く。子供達も水汲み、子供の世話、店の手伝い、父親に昼食を届ける等よくやっている。農民は他に仕事がなく、一生畑で終わる人も多いだろうが、彼らと話をしていると、嫌々働いているようには感じられない。なぜだろうか。嫌だと思っている人は、他の職を見付けているからなのであろうか?

また、現地の人達はとにかく話し好きだ。私の場合、主に野菜について質問しながら会話を続けていく。私のスペイン話は、9か月を過ぎた今でも、それほど上達していないようだ。何といっても、相手と話をしている時、分かっていないのに分かったような振りをするのは嫌なものだ。けれど、これはどうしようもない。

それにしても、仕事でもプライベートでも、いつでも周りには人がいる。いないのは、トイレの中とドラムカン風呂の中だけだ。そのために、いつも何でもいいから共通の話題を見つけておくことが大切だ。そして積極的に外に出て、人と関わっていくことを常に心掛けている。

この国に見る日本経済の凄さと課題

私は高校生の頃から協力隊に参加することを決めていた。現在も2000人以上の隊員が世界のどこかで活動している。我々ひとりに対して、日本政府は何千万円もの予算を付けて送り出してくれている。私が途上国で生まれていたら、外国に行くことさえ難しかったであろう。

こんなに日本から離れている国でも、ジムニーが走り、マリオブラザーズが画面からピコピコ流れ、ソニーのラジカセで音楽が聞ける。日本の経済力の凄さを感じる。また、ボリビアに対する援助額は世界でトップであり、影響は測り知れない。

ボリビアはアフリカ、アジアのような気候、砂漠化、人口爆発、内戦、難民等の深刻な問題を抱えている国とは、同じ途上国であっても根本的に違う。だからこそ、このような現状に精通した人材を育て、どうしたら効率の良い援助が出来るかが、これからの課題であろう。ボリビアは広いし、この点まだまだ人材が不足している。

その中でも、最も充実すべきものは医療、衛生、教育関係であろう。私の村を例に挙げると、高校生が円の面積の出し方を知らない。子供が病気になったからと、夜中に家族全員で10km以上歩いて私の下宿先（奥さんが看護婦だったので）へ来る。子供が道端から直接水を飲んでいることなど、まだまだ挙げれば切りがない。私の故郷はど田舎だなあと思っていたが、上には上がある。本当に世界は広いのだ。

現在、仕事は順調と言えず、熱意ある隊員を見ると、うらやましく思う私であるが、自分は自分なりに頑張っていきたい。今日も南十字星を見ながら寝ることにしよう。

最後に一句

"ボリビアの息吹感じるナスビかな"。

（了）

板橋宏暁 Hiroaki Itabashi

派遣国：コロンビア
職　種：野菜
隊　次：昭和62年度3次隊（活動期間1988年3月～1990年3月）
出身地：宮城県

初　出：「野菜園芸技術」1990.2.13（(社)全国農業改良普及協会）

南米コロンビア、コーヒーと美人の国。私が青年海外協力隊の合格通知に書き込まれてあった派遣国名を見て、初めに頭に浮かんだ印象であった。正直言ってコロンビアが南米にあるという事は知っていたが、その正確な位置さえ理解していないという有様で、喫茶店で日頃何気なく注文していた、ブレンドコーヒーのベースにコロンビア産のコーヒーが、主として使われている事など、コロンビアに着任してから知ったという、何とも、コロンビアに申し訳ない話である。

早いもので、ここコロンビアに野菜隊員として着任してから1年半が過ぎてしまった。私が働いている、チキンキラーという小さな街は、首都ボゴタから、130キロメートル程の北東に位置し、バスで3時間程の道程である。標高が2,600メートル、平均気温14～17度、年降水量700～900ミリ、首都ボゴタと似た気候風土であり、乾季が、1月～3月、7月～9月。雨季が、10月～12月、4月～6月と、約3ヶ月ごとに変りながら、1年が過ぎていく。四方を山々に囲まれた、長さ4キロ、幅1キロ程の併置に、市街地があり、人口が4万とも6万とも言われ、人の出入の激しいこの国の町々では、正確な人の数さえ解らない。この小さな町に7つもの教会がある。街の中心には、バシリカという大きなカテドラルがあり、良くは知らないが、由緒があるらしく、通常、教会はイグレシアと呼ばれ、カテドラルと言う名は、日本の寺院式に言えば総本山にあたるらしく、3年前の、ホワン・パブロ二世の南米訪問の折、彼はこの町を訪れ、ミサを開いた。その場所が、今は、パルケ・ホワン・二世と言う名の大きな公園になっている。

この町の教会のひとつに、聖母マリアが現われたという、伝説の井戸があり、ビルヘン・デ・チキンキラーと呼ばれ、国内では有名である。そんな訳で、この町の人々は自分の町を、コロンビアの宗教の主府だと誇っている。大きな地場産業もないこの町は、多くのコロンビアの山間の町々がそうである様に、農牧業が中心の生活である。

ここでこの町の主な農作物と農業形態を説明すると、酪農、ジャガイモ（約5種）、トウモロコシ（2種）、インゲン、豆エンドウ、小麦。

果実では、クルーバー、（トマトーデーアルボル）（両種共ジュース用）等が、主要農産物である。農地の割合が、平地3、山地7といった具合で、コロンビア全体に言える事だが、平地は、少数の大地主が押さえ、一般農民は、山地、又は、農業不適地に生活の基礎を置いている。畑作に適していると思われる平地のほとんどに、放牧の為の牧草が作付されてあり、ほんの一部が畑作（トウモロコシ、小麦）に使われているにすぎない。大多数の農民は、傾斜地に土地を持ち、日銭の入る乳牛を平均2頭、多くて10頭、養う為に山の頂上まで拓き、牧草を植えている。主作物のジャガイモの栽培法というと、耕起は傾斜地の為、牛2頭立ての鋤か、人手による。種イモは全て暗所催芽。うね幅、1m前後、株間、約50cm。人によるが、ひと握りから、ふた握りの高度化成肥料、10―30―10（国の機関推奨）をほうり込み、ひと鍬土を入れ、ひと穴に30gから60g程の種イモを3、4個入れ、覆土は約15cm～20cm、出てきた芽は一切、芽かきなし放任、ジャガイモの株間に、エンドウかソラ豆を、必ずと言える程蒔く、収穫まで1、2度の土寄せ、あとは数回の農薬散布を行なう。ha当り、種イモが約1トン、化成肥料が、種イモと同じ重さか倍。栽培期間が約半年、収量が13tから20t、時にもよるが、売上げが120万ペソ（日本円約40万円）、平均経費が五割前後かかり実収として60万ペソ（日本円約20万円）。大卒男子の初任給が、10万ペソ前後という所から見ても収入の程が解る。もちろん、一般農家は、1haどころか平均1反前後の作付が平均であろう。病害は種イモからの持ち込み病が多く、種類も多種にわたり、害虫も名の知れたもの、名の知れぬもの、10種前後に及び、時として収量がほとんどなしという事も珍しくない。そんな農民達が集まって、つい5年程前、農業協同組合を作る話が持ち上がり、発足の運びとなった。組合員75家族、総勢300名程であるが、何せコロンビアの農業組合の歴史が浅く、彼らは右も左も解らない。そんな中で協力隊要請の話となって、村落開発普及員の相馬隊員（私より3カ月先着任）と私が、チキンキラーの農協に配属されたのである。

さて、着任当時の我農協はいかなる物であったかと言えば、組合長、理事会、会計、販売部、組合員と、ちゃんとした区分けと、役職名は揃っているが、

しかし、何ひとつとして円滑に動いてはいなかったのである。野菜栽培指導員という事で配属されたものの、組織名はあって活動なし、事務所もなければ野菜を作る土地すらない、おまけに私も着任したばかり、まだ言葉もろくに喋れない。ただ、ひとつの救いは相馬隊員と前組合長（私の下宿先主人）の間に出きあがっていた、展示農場構想だけであった。あまり良いとは言えぬ出だしであったが、日本を出て間もない頃である。胸の熱い思いはいやがうえにもえていた。

今考えれば、組合員達が、後日我々と前組合長の活動を誤解して、嫉妬の眼で我々を見ていたと言う事も、もっともな話であるが当時、組合長の言うには、皆んな非協力的で誰ひとりとして我々に土地を提供してくれないと言うので、展示農場を前組合長の義理の母親の土地に作る事に決め、着任して間もなく、展示用ビニールハウスの建設から我々は着手し始めた。裏山から木材を切り出し、家型のミニハウスを作り、そこに、トマト、キュウリ、ナス、ピーマンと、標高2,000メートル以下の、ティエラカリエンテと呼ばれる暖地の作物を栽培し、組合員達の注意と意欲の向上を狙っての計画である。

我々は愚かにも組合員達が、我々の活動を両手を広げて拍手で迎えてくれるものとばかり思っていたのである。ビニールハウスもでき、収穫が始まっても、誰ひとりとして訪ねてこない。それでも我々は待ち続けた。だんだんと焦りが怒りに変っていった。「何故、誰もこない！ 我々は誰に呼ばれ、誰の為、ここにいるんだ。」我々を訪ねてこない組合総会があっても集まらない。来ても平気で、１時間、２時間と遅れて来る。会う約束をしても、すっぽかされる。我々は彼らの無関心に憤慨し、人間の保守性を批判し始めていた。我々が動きもせずにただ待ち続けていたという、過ちにも気がつかずに。我々が彼らを本当に理解し始めたのは、昨年の11月、前組合長が経済的理由から（組合に経済的余裕がない為、無給）辞任し、唯ひとつの組合員との窓口も失い、活動を続ける為には自らの足を使い、コミュニケーションを取らなければならなくなってからであった。組合員達の家を巡回していくうちに、彼らの側にも様々な理由がある事をだんだんと理解出きはじめたのである。

前述した様に、彼らの多くは７割の内の山岳と言ってかまわぬ様な土地に住み、遠い所では市内に出るまで、山道を２時間、３時間とかけて出て来なければならず、毎週、火・水曜日に市内の市場に買い出しに出て来るものの、両手にかかえ切れぬ程の荷物を下げて山道を帰らねばならず、なおかつ、公的な情報伝達手段といえば、ラジオ放送のみであった。何かひとつの用事をしに街に出て来るのにもとてつもない時間が必要になってくるのである。又、アンケートを取ることによって、彼らの生活の苦しさも良く解って来た。彼らのなかには、我々がどこで、何の目的で活動しているのかさえ知らぬ者さえいたのである。訪問した多くの家で我々は、もてなされ喜ばれた。楽でもない生活のなかから我々に、山盛りにしてだしてくれるジャガイモと米と、ひと切れの肉の昼食が、一体何を意味するものなのか？我々は、ひとつ、ひとつ、彼らに対する誤解をといていった。と、同時に彼らも我々を受け入れ始めてくれた。先に彼らの誰ひとりとして我々に土地を提供してくれなかったと書いたが、彼らにとって人に貸せるべき土地もないし、かつ前組合長は、ろくに人に話もせずに自分勝手に展示農場構想を決めていたらしく、彼らから見れば我々は、前組合長個人の為に働いているかの様に見えたのは、当り前の話だったのである。

我々は幸いにして、彼らを理解し始める事ができた。と、同時に組合にも朗報が転り込んだ。昨年より交渉していた、国連開発計画より、実質的に無利子による援助を受けられる事になり、本年６月より、会計・販売・市場調査等の講習会に始まり、念願の農協の農場も、10年契約の賃貸ではあるが我々は手にする事ができ始めて活動の場を得る事ができたのである。相馬隊員は毎週日曜日、地域５地区を巡回しながら、農協理論と子供達を中心に折紙教室を開いているし、私も野菜栽培の講習会を約１カ月半、自転車で１時間山道を農協の農場まで出かけ、出席者のなかから意欲的な若い人材を見つけ出すことができたし、彼らの栽培法、経営事情を知る事ができた。

今、我々は新たな計画にたって進んでいる。各戸にわずかに開かれた猫の額程の土地に野菜を作らせ、今まで購入していた分を自給し、なおかつ、彼らの食生活を豊かにしていこうとするものである。半径約10キロ四方の山々に点在する組合員の居住区を５地区に分け、各地区に１戸、野菜の苗作りの基地を作り、苗の配布と技術指導を行い、とにかく、野菜作りに親しんでもらい、組合員のみならず、地域農民をも巻き込んでいきたいと考えている。つい先日、計画を実行しはじめたばかりであるが、以前の様に、待つのではなく、我々が彼らの所へ足を運ぶことを第一の基本として。

（了）

広瀬　泉 Izumi Hirose

派遣国：コスタ・リカ
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1986年7月～1988年7月）
出身地：東京都
初　出：「農村報知新聞」1989.8.28（㈱農村報知新聞社）

生活や生き方を見直す

派遣国は中米のコスタリカ共和国。アジア圏を予想していたので意外だった。正直いって聞いたこともなく、どこに位置するのかも知らなかった。コスタリカはスペイン語で「富める海岸」という意味で、パナマの北隣りに位置する小さな国である。四国と九州を合わせたくらいの国土に、約250万の人が住んでいる。主な産業は、コーヒー、サトウキビ、バナナの栽培と牧畜という、まさに農業国である。太平洋とカリブ海にはさまれた狭い地域で、中央高地は気温20度C前後と過ごしやすい。季節は12月から4月までが乾季、5月から11月までが雨季に分かれている。

私は農牧省配属となり、中央高地の一都市カルタゴの農業改良普及所に赴いた。カルタゴ近郊はイラス山という火山のふもとで、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、キャベツといった野菜の産地である。ここでコスタリカ人の農業技術者と一緒にカリフラワーとブロッコリーの試験栽培を行うことになった。自分には少し難しいのではと思ったが、着任当時は乾季を目の前にして、その年の作付けは終わっていたため、次の雨季までは同僚の手伝いをしながら勉強する時間もある。栽培管理を手伝ったり、他の農業改良普及員の農家廻りについていったりした。

普及所には、野菜、果樹、コーヒー、営林それぞれの部門の技術者が1名ずつと獣医がいる。やがて雨季が近づいて試験を始める時期になっても、計画とはうらはらに準備はいっこうにはかどらない。農牧省ではこの地域に試験場を持っているわけではなく、栽培試験は農家の休耕地を借用し人手も農民の手を借りるわけだが、同僚の話ではその予定地がなかなか決まらない。次には、種子が手に入らないという。結局、栽培計画は流れてしまった。本当に必要な試験だったのか疑問である。

時間が過ぎていく中で、私は同じ普及所で働いていたソシアルワーカーの女性と知り合いになった。彼女は大学生だが、卒論のために一時期この普及所にいて地方の村をまわり、子供たちの絵画教室や婦人の手芸グループを指導していた。また、家庭菜園普及のために野菜の種子を配ったりもしていたので、彼女に頼んで2、3の小学校を紹介してもらい、学校菜園づくりに通うことにした。最初の要請内容と同じことをするようになったのだが、限られた時間の中で、自分でもできることをやりたかったのだ。

コスタリカでは、小学校の課業に農業の時間がある。といっても、きっちりとした教育目標や指導要領があるわけではない。菜園づくりに熱心な学校もあれば、補習授業に使うところもある。カルタゴの中心街からバスで40分ほどのタプロンという小さな村の小学校が初めて訪問した小学校だった。校庭も狭ければ、畑も猫のひたいほどだったが、女性の校長先生は快く私を受け入れてくれた。

レタスやタマネギなど、時間と手間のかかるものより、給食用にはクラントロというセリ科の香草や、モスターサ（カラシ菜）、二十日大根といった、栽培期間の短い緑の濃い野菜が喜ばれる。子供たちは、私が行くと我先にと手伝いたがる。特に男の子は女の私に力仕事をさせるのは恥と思っているらしく、私の手から農具を奪おうとする。小学生ながらもカバジェロ（紳士）なのだ。

農業国だから、野菜のつくり方や食べ方がよく知られているかというと、そうでもない。間引きをすることを知らなかったりする。子供達も教室にいるより外に出てワイワイできるからこの時間が好きなだけかもしれない。でも、農業と聞いただけで「ダサイ」なんて言う日本の子供に比べるとなんと無邪気なことか。

私は全任期を学校菜園で通したわけではなく、その後、任地を変わってキャベツの苗づくりをした。今考えても何をしたらいいのか常に迷ってばかりで、あちこち手を出してはやめてしまうことが多かった。もっと小学校通いの活動を深めていけばよかったと今でも思っている。

5月15日は農業の日である。カトリックの暦で農業の守護聖人サン・イシドロの日なのだ。このころ、イシドロと名のつく村や町ではお祭りがあり、全国的にもフェリアと呼ばれる市が立つ。タプロンの小学校ではこの日を祝って学芸会が開かれた。校長先生はソシアルワーカーのアナ・リヒアと私を招待してくれた。朝9時頃、国家と国旗掲揚をもって開幕。学年ごとに寸劇や詩の朗読が続く。どれも農作物の恵みを称え、労働を称えるものだった。

最後に、校長先生が結びの言葉の中で、遠い国か

ら来た私のことに触れ、「神様がイズミを私たちのところへ送ってくださいました。だから神様に感謝しましょう」ということを言ったのだ。その言葉に私はいたく感動したと共に、援助とか技術移転とか、頭でっかちに考えている自分を恥ずかしく思ったのだった。

この2年間は自分にとって何だったのだろう。今でも時々考える。行く前の自分と今の自分では、どこがどう違うだろう。まず、以前は何の疑いもはさまずにいた日本の生活に不便さを感じるようになったことだ。ゴミが多い。3度の食事をつくる度に不燃ゴミが出る。不要品でも捨てられない。もったいないと思う。

次には、気が長くなったこと、年齢を気にしなくなったことなどだろうか。そして日本の行事や昔からの生活の知恵に気がつくようになった。どこにいても新しい発見がある。

生活や生き方を見直すために、貴重な経験だったと言える。この経験をどう展開するかがこれからの課題である。

(了)

間瀬朝夫 Asao Mase

派遣国：コスタリカ
職　種：野菜
隊　次：昭和62年度2次隊（活動期間1987年12月～1990年12月）
出身地：愛知県

初　出：「日本農民新聞」1990.6.21（日本農民新聞社）

青年海外協力隊（中村武事務局長）は、日本の技術を持った青年を海外に派遣して、開発途上国の新しい国づくりを支援しているが、その隊員の１人、コスタリカで野菜栽培に従事する間瀬朝夫さんのレポート（抜すい）をここに紹介する。

＊　＊　＊

コスタリカで野菜栽培に取り組む間瀬朝夫さん

「コスタリカ」と聞いて、正確な位置、地形を連想できる人が、果たして何人いるだろうか。この国は北をニカラグア、南をパナマに挟まれ、北西から南東方向にやや細長く位置している。

私の任地であるアルファロルイス郡・サルセロは、ほとんど全域が牧草に被われ、続いて野菜、花き、果樹の順で栽培面積が広い。最近の作付動向は、野菜が拡大しつつある。これは消費生活がより先進国的な大量消費型となり、現金収入の増大が望まれていることなどの原因によるものと思われる。

私の配属先であるコーペアグリマル農協では、野菜の生産過剰問題を解決すべく、加工冷凍野菜をアメリカ合衆国へ輸出するプランを立てた。私もこれに焦点を当てた技術改良のために呼ばれてきたのである。しかし最近は、加工冷凍野菜から、「ミニ野菜」を新鮮なまま冷蔵した物が輸出の目玉商品になりつつあり、すでにプランそのものが時代遅れになり実行があやぶまれている。

着任してまず私に与えられた仕事は、「発泡スチロール製育苗箱（コスタリカ製）を用いた育苗法の確立」ならびに「一般栽培技術の改良」であった。慣行法苗床での苗の損失が私が思っていた以上に大きいこと、そして日本式の堆肥入り床土を用いたほう方法が、省農薬を含めて多くの問題解決の一助となる事がわかってきた。現在では、なんとか一通りの技術移転も完了しつつある。

短い期間に取りあえずでも形に成ったものを残して行けるのは、本当に幸運だったと思う。一方、技術の普及という面で不十分な事も多く、ただ自己満足に終わる危険も大きい。ただ、実際に与えられた技術を取捨選択し、実行に移していくのは農家自身であることを考えれば、その選択肢を１つでも付け加えた事が、「技術の進んだ国」で活動する協力隊員として精一杯の仕事ではないかとも思っている。

（了）

執印祐輔 Yusuke Shuin
派遣国：コスタ・リカ
職　種：野菜
隊　次：昭和63年度1次隊（活動期間1988年7月～1990年7月）
出身地：宮崎県
初　出：「農村報知新聞」1990.9.8（㈱農村報知新聞社）

理解し合えるよう心がける

現地の農業事情

私の配属先、グレシア農業改良普及局は標高1000～1500mの中央高原にあり、このあたりでは主にコーヒー、サトウキビが栽培されている。そして、それらの低木期には、土地の有効活用としてトマト、ピーマン、キュウリ、インゲン、フリホーレスといった蔬菜類も栽培されている。コスタ・リカの気候は雨期（5～11月）と乾期（12～4月）に大別されるため、栽培期は雨期に集中。乾期に栽培に携わっているのは、灌漑設備（ディーゼルポンプ）を所有している農家のみで、大部分の農家は、雨期の始まる5月より野菜類の播種を始めている。

この地域は、大部分の農地が傾斜地にあるため、雨期の集中的豪雨（2000～2500mm）による土壌侵食が激しい。そのため、蔬菜類の栽培に関しては、元肥という感覚での施肥法はとられておらず、作物の生育段階に応じた化学肥料の連続追肥という方法がとられている。なお、肥料の種類形態は、10－30－10、12－24－12、15－15－15、18－5－15－6－2という化学肥料が主であり、単肥は硝安、硫安、尿素のN分肥料が主である（リン酸分の単肥はない）。またこの地域は、年平均気温が20～28℃と蔬菜栽培に適しているため、育苗という栽培感覚に乏しくもっぱら直播き慣行となっており、その後、追肥、間引き、土寄せを行っている。

しかし、雨期の高湿度のため病害の発生が激しく、幼苗期のうちから高濃度（200倍）の薬酸（ダコニール、コサイドボルドー、マンネブ、メタラキシル、カスミンボルドー）に防除を頼らざるを得ず、そのため、木の老朽化は激しい。

トマトの場合など、化肥連続追肥、多回数にわたる薬散により株を早めに生長させ、花房に果実が揃った時点（完熟、未熟無関係）で一斉に収穫してしまうという栽培方法である。そのため、使用品種は芯止まり形質のものとなっている。さらに、この地域は火山灰土粘土質土壌であるため、雨期の土壌侵食と重なりCaMg、P_2O_5、Bなどの溶脱が激しく、その対策として12－60－0、塩化Ca、硫酸Mg、ホウ酸などの葉面散布で回避策を取らざるを得ないといった状況である。

配属先での活動

コスタ・リカには熱帯農業研究所（CATIE）という研究機関があり、グレシア農業改良普及局では、そこより8種類の品種（ハイブリッドを含む）のトマト、ピーマンの種子を借り、標高1500mでの品種比較試験、および病害に対する4、5種類の農薬適合試験を行っている。また、以前から台湾専門家による協力活動も行われており、現在、彼らのプロジェクトであるブドウ栽培を委託され、その管理にもあたっている。その他、乾期の強風に対して各地に防風林を設置するため、育林にとりかかるという動きも出てきている。日常活動では、普及員が随時各農家を巡回し、栽培法などの助言にあたっている。

また、この地域にはコーヒー、サトウキビの精製工場があり、毎年12月～2月の精製期が終わると膨大な量（100t）の残さが放置され、自然発酵堆肥として市販されている。よって現在、これらの植物性堆肥と鶏糞、化肥施用の育苗定植区と直播慣行区の2種類の栽培方法を用い、年間5回のトマト栽培も試みている。これにより、病害虫発生の度合などを考慮しながら、当地域（標高1080m）での作付時期および栽培方法を決定しようというものである。この他、キュウリの木炭施用区、無施用区に分けた栽培試験も試みた。

今後の活動は、前述したトマトの年間栽培がメインになるが、さらにグレシア地区の新たな導入作物として、乾期におけるスイカ、メロンの栽培も検討中である。

活動上の苦労

赴任当初は、言語の相違による苦労が痛切に感じられたが、時間が経過するにつれて多少は理解できるようになり、現在の時点では大きな苦労にはなっていない。

一番悩んだのは、着任当初、何の依頼もなかったことだ。毎日、普及員と一緒に農家を巡回するのみで、当地域の問題も十分理解できず、いったい自分は何をしたらいいのかと焦るばかりであった。それ

でも、まず、自分が動いてみなければ何もわからない。私なりにいろいろ考えて計画を立案するのだが、障害も少なくなかった。たとえば、トマトの直播法と育苗法の比較栽培試験を計画し、配属先に計画書を提出して実行の段階に入ろうとするのだが、人がいないという理由で1カ月もの間、身動きの取れない状態が続く。こんなことはたびたびであった。

また、常にのんびりペースで生きている彼らの性格にも悩まされる。あるときは、トマトの支柱を立てる時期に来ても支柱が立てられず、病気を未然に防ぐことができなかった。意見がうまくかみ合わないことは頻繁で、普及員には必ず相談を持ちかけ、お互いにとことん理解し合えるよう心がけている。

（了）

林　かおり Kaori Hayashi

派遣国：グァテマラ
職　種：野菜
隊　次：昭和63年度3次隊（活動期間1989年3月～1992年3月）
出身地：長野県
初　出：『農村報知新聞』1990.11.28（㈱農村報知新聞社）

野菜の輸出で経済支える

グアテマラ共和国は850万人の人口と、日本の約3分の1の国土面積をもち、メキシコの南隣に位置する国である。人口の半分以上はインディオと呼ばれる原住民で占められており、彼等は今でもその独特な民族衣装を身にまとって生活している。このような光景を見られるのは、数多い中南米の中でも今やここだけとなってしまった。ここでは今と昔が微妙に混ざりあい、そして伝統が静かに息づくところだった。

この国は農業が経済の中心であり、輸出額の3分の2は農産物に支えられている。従来より、海岸近くの低い土地を利用してコーヒーや綿花、バナナ、それにカルダモンと呼ばれる香辛料などを、プランテーション型で生産しているのである。

その昔、プランテーション型農業は、別名（植民地農業）とよばれ、それらの輸出を目的とする単一作物の栽培を大規模に行う方法で、作物は主に支配国のために作られるものであった。しかし近年では、多少の工業化も進んだため農業の面でもかなり変化を見せているようである。

首都の西側からメキシコ国境までには標高2000m前後の高原地帯が続き、そこでは5年程前から野菜栽培が盛んに行われるようになった。そこは肥沃な国土と温暖な気候（年平均気温15℃～23℃）とに恵まれたところである。

昔から国民の主食は"トルティーヤ"と呼ばれるトウモロコシの粉を練って薄くのばして焼いたものと、インゲン豆であり、日本ほど野菜を食べる習慣は無かったのだが、最近ブロッコリーなどの野菜が換金作物として価値がでてきたため、盛んに栽培されるようになり、今では輸出している作物の約5％ほど占めるくらいまでなった。今後ますます、増加して行くであろう。

私がグアテマラで勤務している場所は、首都のグアテマラ　シティーから西へ64kmほど行った所のチマルテナンゴ市という名前でやはり野菜栽培の盛んな市である。日本でいう農業試験場で働いている訳なのだが、仕事の関係上、種苗関係や野菜輸出会社の人達と知り合う機会が多い。そこで彼らに、グアテマラの野菜輸出会社の話しを聞いてみた。

現在、野菜を輸出している会社は全国で大小含めて約30社ほどで、その経営者はみんなグアテマラ人だそうである。そしてどの会社にも農業技術者（大卒以上の人達がほとんどである）がおり、その人達は会社が持つ担当地区を巡回しながら農民を集めて、各野菜の栽培方法を説明したり、技術指導を行ったりと、品質向上のために努力しているようである。そして栽培された野菜は、週に2～3回まわってくるトラックに積まれて工場に集積される。ここで例えば、ブロッコリーなら花蕾を一口大に切り分けられて箱詰にされて輸送用コンテナでそのまま空港へ送られる。

野菜の主な行き先はアメリカ、ヨーロッパ（イギリス、ベルギー、オーストリア）などである。これらのやり方はカリフォルニアの野菜流通に似ている。グアテマラ人がカリフォルニアで学んできたのか、アメリカの会社の必要性に応じて行っているのかは定かではないが、多分その両方なのではないかと思われる。輸出される野菜は沢山あるが、そのいくつかを挙げてみると、まずブロッコリー。これは最近多く輸出されており、ブロッコリーだけを扱っている会社だけでも7社もある。他にもサヤエンドウやサヤインゲンを輸出していて、サヤインゲンはフランスタイプと呼ばれるもので、日本のものより若取りをして出荷する。これらの野菜は年平均2000kgから数トンほど輸出されている。

このようにグアテマラでは、野菜の輸出が経済を支えているのだが、今後は国内で土地を持てない農民たちに土地を貸し、栽培技術を教えたうえで、最終的には独立させる。そしてそういった人々も野菜の輸出が出来るようにという目的を持った事業を行っているところがある。そこの技術を教えている人は「野菜の輸出？これからも増えるだろうね、だってやりたい人は沢山いるんだから」と、コメントしてくれた。メキシコの次に巨大消費地、アメリカに近い国グアテマラ。ブロッコリーに次いで今度はアスパラガスの栽培が増えている。メキシコに続き、日本への野菜輸出国になる日も近いのではないかと思う。

グアテマラは今日も民族衣装のひとびとが行き交う。私はこの光景をいつまでも見ていたいと思う。(了)

小坂重樹 Shigeki Kosaka

派遣国：グァテマラ
職　種：野菜
隊　次：平成3年度3次隊（活動期間1992年4月～1994年5月）
出身地：大阪府
初　出：「農村と都市を結ぶ」1994.3.10（農村と都市を結ぶ編集部）

グァテマラでの海外青年協力活動

恵まれた気候の豊富な野菜

グァテマラは、メキシコ、ホンデュラス等と国境を接する中央アメリカの国です。面積は約11万平方キロメートル(北海道と四国を合わせたより大きい)、農業人口が大半を占める農業国で、熱帯性気候と火山性土壌に恵まれ、高度差に応じて多種の作物がよく採れます。

さて私が生活しているのは、首都であるグァテマラ・シティからバスに乗って約1時間行った、チマルテナンゴという町です。標高約1800m、年間の平均気温は17～18℃であり、まさに野菜栽培にはぴったりの場所といえるでしょう。

その証拠に、首都からチマルテナンゴを通り、グァテマラ第2の都市ケッアルテナンゴを結ぶ国道沿いには、見事に手入れされた畑が見られ、ここ一帯に野菜栽培地帯が連なっていることがわかります。

またチマルテナンゴの市場には、日本で見ることのできるほとんどの野菜が並んでいます。見かけない野菜は、白菜や小松菜などの漬け菜類、白菜、大根、ナス、オクラくらいでしょうか。ここが、フィリピンとよく似た緯度に位置する国だとは、とても信じられません。このように、グァテマラは恵まれた気候による高い栽培技術により、アメリカ、メキシコをはじめ他の国に野菜を供給する重要な輸出国でもあります。特に輸出向けに作られているブロッコリー、カリフラワー、キャベツ、にんじん、インゲンなどは輸出業者が直接農家に指導をしているようで、十分に手をかけた良い品ができています。

種子の生産を課題として……

さて、私が配属されている国立科学技術庁・チマンテナンゴ農場では、とうもろこし、フリーホール(いんげん豆)、小麦、病虫害、薬草などそれぞれの研究室を持ち、中でも主食を扱う研究室が重要視され優遇を受けています。

この国で日本のコメに相当する物が、とうもろこしとフリーホールです。そのため、以前から力の入れ方も違っていたのでしょうか、現在では、とうもろこしはタネの生産、販売といった仕事にまで幅を広げています。

というのも、野菜栽培に十分な技術を持ち気候も申し分のないグァテマラ、チマルテナンゴですが、実は残念なことにそれらを産みだす野菜の種子のほとんどを輸入に頼っているのが現状です。

こういった形での外貨の流出も、大きな額になるようで、何とかそれらの種子をグァテマラ国内で自給しようというのが大きな課題であり、私が前任者から引き継いだ仕事でもあります。種子の輸入先はヨーロッパやアメリカの種子会社のもの、またアメリカを経由して日本の種子も使われています。

種は生命の源、品種改良に取り組む日々

現在、私が扱っているのは、にんじん、ブロッコリー、そしてカリフラワーです。カリフラワーは、チマルテナンゴで昔から作られていた種類を栽培日数の短縮を目的とし、集団選抜の方法を使って改良を続けています。

にんじんは、前任者が日本から取り寄せた「黒田五寸」と、こちらでよく栽培されている「チャンテナィ」、そして輸入種子を扱う会社から手に入れた、まだ名前のついていない実験品種、これらの間で種子生産の可能性を調べています。

現在のところ、「黒田五寸」「チャンテナィ」「実験品種」の三種の中では、実験種子がなかなか良い成績を収めています。その理由として、チマルテナンゴは前にも述べたように年間を通じて温度差が少ない場所です。そのため黒田五寸、チャンテナィは、ほとんどが栄養生長から生成生長に移行せず花をつけません。ところが実験種子の方は、少ない温度差に敏感に反応するため、十分に種子をつけることができたというわけです。

最後にブロッコリーですが、前任者がF1作出をねらって、葯培養で作り出したものを人工交配し、その特性を検定しようと試みていますが良い結果が出ません。今後、改めて花粉培養で両親となる個体をつくる必要があるようです。

以上が、今まで私が行ってきた活動と実験の大まかな状況です。この農場では毎年2月、3月に発表

会の形をとってその年の実験結果を報告しています。今度の発表会には、この実験の成果をもとに素晴らしい結果発表ができることでしょう。

我々協力隊員は、人と人とを通じ技術移転を行うのが大きな目的です。しかし、今のところ、こちらが教えているのではなく、逆に現地の人々から学んでいるような、心とか人生とか、何か目に見えない様々なものを教えてもらっているような、そんなグァテマラでの活動です。

（了）

大道雅之 Masayuki Omichi

派遣国：ホンデュラス
職　種：野菜
隊　次：昭和60年度1次隊（活動期間1985年7月～1987年7月）
出身地：兵庫県
初　出：「農村報知新聞」1990.6.8（㈱農村報知新聞社）

あっという間の2年間

ホンデュラスの農業事情

中米のほぼ中央に位置するホンデュラスは、国土の65%が山岳地帯という中米で最も山地が多い国である。気候は乾期（12～4月)と雨期(5月～11月)に分かれ、海岸地帯と南西モスキート地帯は高温多湿の熱帯性気候だが、中部高原地帯は年間を通じて、15～27度としのぎやすい。

栽培されている作物も各々の地域によって異なり、北部海岸地帯ではバナナ、パインナップル、ヤシなどがアメリカ資本の下で大々的に生産されている。南部海岸地帯では輸出用メロンが試作され、中部高原地帯ではジャガイモ、フリホーレス(インゲン豆)、トウモロコシが自給用に栽培されている。コーヒー、サトウキビは高原地帯を除いて全国的に栽培されている。

農家の形態は、大型機械をフルに活用してバナナやヤシなどを栽培する近代化された大規模農家と、主食のトウモロコシとフリホーレスを栽培する零細自給農民とに大別されるが、大多数を占めるのは後者で、化学肥料や農薬を購入することもできず、その生産性は低い。また両者の中間に、2～5ヘクタールの耕作面積を持つ自立志向型農民がわずかにいる。

協力隊員がスタートさせたプロジェクト

私は標高1640mの高地にあるインティブカ県の県庁所在地ラ・エスペランサ（人口約5000人)の天然資源省(日本の農水省にあたる)エスペランサ支局農業試験場に赴任した。支局内のラ・エスペランサ・プロジェクトが配属先である。

このプロジェクトは青年海外協力隊員が中心となり、日本政府からの援助資金を基金として1983年に開始されたもので、目的は、①ホンデュラスで栽培されていない作物の中から栽培可能なものを選択し、少しでも農産物輸入を減らす、②一般農民の現金収入の道を拓く、③ホンデュラスの栽培作物に多様性を持たせる、④可能ならば輸出農産物を作る――の4点。発足時は野菜隊員1人で始まったプロジェクトだったが、現在では野菜・花卉・果樹・畑作・キノコ・農産物加工・病害・虫害・市場調査の各部門からなる大がかりなものとなっている。

ラ・エスペランサ地方には大規模農園がほとんどなく、耕作面積が1戸当たり3～5アールの零細農民のほかは自立志向型農民がわずかにいるばかりである。野菜はほとんど栽培されておらず、ただ1つの例外はジャガイモで、7～8年前にスイスの援助で栽培が始まり、自立志向型農民のほとんどが栽培するようになったが、現在、連作障害が大きな問題になってきている。農薬防除も行われているが、多くが作期中1～2回の薬剤散布である。また、首都から遠く（バスで8時間)、交通機関も満足に整備されていない環境にある。

2年間の協力活動

このような状況の中で、私はまず、この地域に適した野菜を選定するため、日本から持参した野菜の種子や首都で手に入る野菜を中心に、約30品目の栽培を試みた。

そして、実とりエンドウ、イチゴなどが有望と考えられ、一部、ホウレンソウ、ネギ、ニンニクなども今後期待できる作物であるという結果を得た。いずれもホンデュラス国内では生産されておらず、隣国グァテマラからの輸入に頼っている作物である。

プロジェクト圃場で生産された作物は、同じプロジェクトの市場調査の隊員と協力して、首都までの輸送試験や市場（主にスーパーマーケット)の動向を調査したが、中にはホワレンソウがわからず、購入や試し販売をしぶるスーパーもあった。人々の購買力は平均すれば非常に小さく、一般には市場での購入が普通で、スーパーマーケットに出入りするのは一部上流階級である。

2年目は品目がある程度しぼられた作物に対して、より地域に適した栽培法の選定に力を注いだ。

また、それと並行して取り組んだのが、零細農民に対する自給野菜の栽培指導と、その収穫物の料理方法を通じての健康・生活改善である。これは、生活改善隊員との協力で行った。

2年間はあっという間に過ぎ去り、成果はあまり大きいとはいえなかったものの、自分なりに努力し、その結果に満足している。

浜田守彦 Morihiko Hamada
派遣国：ホンデュラス
職　種：野菜
隊　次：昭和61年度1次隊（活動期間1986年7月～1988年7月）
出身地：愛知県
初　出：「農村報知新聞」1990.10.18（㈱農村報知新聞社）

何が求められているかを知る

ホンデュラスは中央アメリカに位置し、グァテマラ、エルサルバドル、ニカラグアに囲まれた小国である。国土面積は日本の約3分の1に当る112,100平方キロメートル、人口は約410万である。主な産業は農業であり、牧畜が盛ん。輸出産品としてはバナナ、コーヒー（日本はアメリカに次いで輸出相手国第2位）が挙げられ、大規模なプランテーションがあり、船で輸出されている。

当国では伝統的に栽培されていた野菜（トマト、キャベツ、タマネギ）を除きその栽培は皆無に等しいが、新しい野菜に対する関心は高く、試験的な栽培は行われていた。また従来から栽培されていた野菜においても効率的な栽培方法や新しい品種の導入が望まれていた。しかし国内には野菜園芸に関することを指導できる人材が少ないため、協力隊隊員の派遣が要請されていた。

ホンデュラスは、熱帯雨林気候に属し、雨量が多く（年間約2000㎜）気温も高いことから野菜の栽培にはあまり向いていない。栽培が多いのはユカ（キャッサバ）、トウモロコシなどの伝統作物のほか、バナナ、パイナップル、オイルパームが多く、アメリカ資本による企業経営が行われている。中部山岳地帯には800～1500mの山々が連なり耕地面積は少ない。首都周辺では、少ない平地や緩やかな斜面を利用して野菜や花卉などが栽培されている。首都から北部へ抜ける国道沿いにはイチゴや加工用トマトを大規模に栽培する農家や企業がある。

標高1,700mに位置するラ・エスペランサ（希望という意味）地区では気温が低いため（年平均15℃）、アスパラガス、ジャガイモなどの温帯作物が栽培されている。またJICAプロジェクトによる温帯作物の導入と普及を行う試験場もある。

一方、ホンデュラスの南部に位置するチョルテカ県は雨量が非常に少ない。ここは従来からスイカの産地であったが、近年、灌漑技術の進歩によりメロンの栽培が増えている。生産物は保冷車で北部の港に運ばれ、アメリカに輸出されている。

ホンデュラスにおける農業教育機関としては、国立自治大学農学部、国立農業学校、ジョン・エフ・ケネディ農業高校、パンアメリカン農業大学（私立）があり、上級、中級の農業技術者を養成している。そのほか農業者研修機関として国立農業研究所、農業開発センターがある。

筆者が所属していたのは国立農業学校（通称ENA）である。ENAは3年制の農業短大で全寮制。入学資格は高校（ホンデュラスでは普通科高校は2年制）卒業後の17歳～24歳の男子。授業体系は、1年次に園芸全般、2年次で作物、農業機械、3年次で畜産を履修することになっている。

ENAの教育組織は、一般教育科のほか、園芸科、作物科、畜産科、農業機械科に分かれており、それぞれにいくつかの分野がある。園芸科には野菜果樹、観葉植物、養蜂の各分野があり、野菜分野には筆者を含めて3名の教官が、その他の分野にはそれぞれ1名の教官が配属されていた（全てホンデュラス人）。農場実習において筆者が担当していたのは、野菜分野のうち育苗部門で、年度当初に園芸科担当教官全員で立てた作付計画に基づき、育苗圃に種を播き、本圃に定植するまでの管理を生徒に指導した。

生徒は8グループに別れており、10日ごとに新しいグループが回ってくる。実際に作業を行う前に、30～40分程度の授業を行い、育苗の必要性、良苗の育て方、作付面積ごとの必要な苗数の計算法などを教授した。内容的には日本の農業高校のレベルと余り大差ない。しかしこの国では数学の基礎教育がきちんと成されていなく、分数や小数点以下の計算は苦手である。そのため、肥料計算、必要苗数の算出の時には計算の基礎から教える必要があり苦労した。

ENAのあるカタカマス地方の気候は亜熱帯雨林で、年平均気温が20℃、年間降雨量が1500㎜である。気温の推移のみをみると、一年中同じようだが、住んでみると多少は季節の変化が感じられる。先に作付計画を立てると述べたが、これはどんな作物を、何日おきに、どれだけの面積植えるかという簡単なものであった。しかし乾期、雨期では管理方法も異なるし、乾期には、夜間と昼間の温度が相当違うのでその点も考慮にいれなければならなかった。野菜栽培圃場での問題点としては、連作障害や土壌の流亡、老朽化、化学肥料の連用による塩類の蓄積があげられる。

ENAではトマト作の後、キャベツ、トウモロコシ

を栽培し、連作を回避していたが植物の生長が早いため、作付けのサイクルが早く土地が休まる時間がない。またバナナやキャッサバは一年以上にわたって圃場を占領するため、9ヘクタールある圃場のうち、普通野菜に使える圃場は意外に少なく、休耕させる圃場がないありさまであった。そこで堆肥の利用、異種作物の混作をすすめた。

次にENAで栽培されていた野菜について述べる。ENAでは、国内で一般に栽培されている野菜の他に、ハクサイ、ナス、ズッキーニなど一般にはあまり知られていない野菜の栽培も行われていた。また気温の低い季節には、カリフラワーやブロッコリーの栽培も行っていた。これらの野菜は、栽培的には難しくなく、また連作障害もまだみられないので生産性は高い。しかし従来から栽培されていたトマトやキャベツでは生産物イコール商品となることができるがそのほかのナス、ハクサイは、ほとんど商品とならない。

そこで、野菜全般の利用度向上も考え、調理講習会を開催した。この講習会には首都在住の同期の家政隊員に応援を求め、4日間にわたって野菜を使った料理を指導した。この講習会は好評で、今まで知られていなかった野菜やその料理法を知ってもらうことができた。またこのほかに、食品加工の隊員によるトマトピューレや野菜の瓶詰めなど加工面での講習も行われ、園芸利用部門の開設につながった。そのほか、活動中に通常の授業以外に取り組んだことは、台湾育成の耐暑性ハクサイの導入試験、アスパラガスの導入と作型の開発、栽培指針の作成、ジャガイモやニンニクの導入試験であった。

ENAで栽培されていたハクサイはいわゆるタケノコ型ハクサイで、芯が堅く、キャベツのようにサラダなどには利用できない。ホンデュラスではキャベツなど葉菜類を加熱して利用する習慣が余りない。

そこで、ハクサイにおいてもサラダに利用することも念頭におき、耐暑性ハクサイの導入試験を行った。その結果、導入9品種のうち3品種については収量も高く栽培に適していることがわかった。今後は台湾の種苗業者を通じて種子の購入がなされるかもしれない。

アスパラガスについては一部地域で栽培が始まり、需要もあり単価が高いので栽培試験を行った。その結果、生長が早く休眠もないので、年2回収穫が可能であった。圃場を替えて収穫すれば周年出荷も可能であると判断し、栽培面積を拡大した。ジャガイモやニンニクは一般に利用されており需要は高い。しかし高冷地のみで栽培されていたり、グァテマラから輸入されているのでその栽培や植物体の形態を知らない生徒が多数いた。そのため、教育も兼ね栽培試験を行ったところ、11月に種いも（球）を植え付ければ2月には小さいながらも収穫が可能であり耐暑性品種を使えば十分生産できることが分かった。

以上、ENAにおいて2年間の活動について述べたが、途上国に限らず、技術指導を行う場合、指導できることは自分が今まで経験したことしか伝えることができない。しかし私は日本において、現場での実務経験（営利的な栽培に関する）はゼロに等しかった。また日本での実際栽培に関する知識は現地ではほとんど通用しなかった。そこで役に立ったのは栽培植物に関する基礎理論であった。現地に行ったら、まずそこの環境（気候的、社会的）を良く観察し、何が必要で、何が求められているかを見極めることが必要だろう。それができるためには実際の技術以上に基礎理論の勉強が重要だと思う。

（了）

伊崎弘志 Hiroshi Isaki
派遣国：ホンデュラス
職　種：野菜
隊　次：平成元年度1次隊（活動期間1989年7月～1991年11月）
出身地：愛媛県
初　出：「全国農業新聞」1990.12.21（全国農業会議所）

現地にあう農業技術

私の任地ホンデュラス（中米）は、北緯15度前後に位置し、昼間は暑いものの湿気がないため過ごしやすいが、夜は肌寒い。

このように一日の気温差が激しいことから、野菜はキャベツの作付けが多く、また美味しい。ほかにアスパラガスやリンゴも栽培されているが、ここの気候にあった野菜を見つけ出すのは困難だ。私たち協力隊員は、現地のスタッフと共にホンデュラスにあった野菜を見つけ出そうと農業試験場で試作を続けている。

この中で、私たちが日本で学んだ農業技術がすんなりと受け入れられないことを知った。肥料は、日本では9割以上が化学肥料に頼っているが、この地では有機質肥料しかないことだ。農薬は、害虫予防にニコチン液や食酢25倍液が使われている。ニコチン液は神経毒として昆虫に効くが、アオムシには効かない。一方、食酢25倍液はアオムシに効く。ほかの害虫予防としては、ニンニクやトウガラシを一緒に植えているが、あまり効果が無いようだ。

だからといって、日本と風土の違うホンデュラスに日本流の農業技術を押し付けても何ら解決しないだろう。急速な改善は期待できないが、この地にあった無理のない方法で、実験と研究を重ね、この地にあった野菜作りに努力したい。

（了）

菊地撤吉 Tetsuyoshi Kikuchi

派遣国：ホンデュラス
職　種：野菜
隊　次：平成3年度1次隊（活動期間1991年7月～1993年7月）
出身地：東京都
初　出：「農機新聞」1993.3.23（㈱新農林社）

農場の全てが水没 竹の根に照りつける太陽

ある雨の月曜日の朝の事だった。前の週から降り続く雨と同じように、スコールと、しとしと降り続く雨が、今日もまた一日中くりかえされるのかと思われる朝だった。

午前6時少し前に起床し、身支度を整えて、いつものように食堂に行き、下宿の大家と挨拶まじりに雨の朝を呪うかの様にけだるい朝食が始まる。

数日間の集中豪雨

先週末の金曜日、夜半頃、突然街中が騒がしくなった。首都テグシガルパ～サンペドロスーラ間の2大主要都市を結ぶ主要道路が、およそ中間地点である任地コマヤグアとサンペドロスーラよりの次の都市シガテペケ間との道路上で、土砂崩れがあり、道路遮断で、都市は、パニック状態に陥った。

この数日間の集中豪雨によるものだと、誰にでも判断できるものだった。

7時ちょっと前、いつものように配属先の同僚たちが、ピックアップで迎えに来た。「パッパァーン」クラクションの音と共に、相手は、血相を変えながら車から降り、家の中に飛び込んで来た。「農場が水浸しだ！」いつものように、雨期には、農場のあちこちに水溜まりができ、作物を失ってしまう。でも今は、雨期と言えども、降り続く雨が、前年にも増して多いような気がする。

同僚は、心配になって日曜日も見に行ったと言い出した。そして、この雨じゃもっとひどい状態になっていると感じているようだ。ピックアップに乗り込み、農場に着いてみると、やはり水浸しになっていた。

同年4月に、雨まじりの突風により、農具資材置き場・作業場の大半、事務所の屋根等が、吹き飛ばされた。建物の修理が終わると思われる頃、7月初旬、再び雨により農場近くの河川の決壊により、圃場は、ひざ下20～30センチ位の水であふれ、所々、水浸しになった。建物の改築の後、河岸の修繕として、15メートルの高さで石材を積み上げた。

水浸しの圃場に着くさま、川がみえる所まで、同僚たちと神に祈るような思いで、歩いて行き、そこで、信じらないような光景を見ることになった。

川幅が3倍に

川幅は、2倍いや3倍近くに広がり、対岸は、すでに決壊していた。水量も増え、1.5メートルの高さの河岸も、役割りを果たすには、少なすぎると思われるくらいだった。その日は、雨の降る中、労働夫たちに、農業資材の撤収を任せ、自分たちは、今年配備したばかりの小型スプリンクラーの固定箇所を外す作業にあたった。

昼近くには、雨足も弱まり、いつものようだと思われた頃、労働夫の1人が、川が決壊しそうだと告げる。すぐさま、圃場より高い小高い丘の上にある事務所に上がり、上流を見てみると、こげ茶色の土砂混じりのだく流が、辺り一面をのみ込んでいる。

同僚と自分は、あわてて丘を駆けおり、労働夫たちを、圃場より少し高い作業場まで追いやった。「作業場まで走れ、何やってんだ早くしろ！」いつにないヒステリックな声で、いつの間にか怒鳴っていた。

それから間もなく圃場では、川に近い場所から川の水が押しよせ、少しずつ圃場を水浸しにしていった。

増える川の水量

雨は、弱まっているのだが、盆地であるコマヤグアは、山々に降り注ぐ雨も影響してか、川の水量は、増える一方だった。

作業場と農具資材置き場のある、圃場より少し高い所で、労働夫たち、同僚たち、そして自分は、呆然としながら、川の増水にのみ込まれる圃場を見つめていた。

それと同じ頃、農場内にある貯水池の水も、支流の増水により排水口だけでなく、圃場に近い方の堤防からも、水が圃場にあふれ出していた。

同僚たちは、いつものように、カーラジオを鳴らしていたが、流れているのは、いつもの、テンポのよいラテンミュージックではなく、ヒステリックな声が聞こえる地元ニュース局だった。

もうすでに水没した村もあるらしく、コマヤグア

に隣接するアメリカ軍基地からは、ヘリコプター6、7機の編隊が、超低空飛行とホバーリングで、人命救助にあたっていた。

自分たちの願いもむなしく、圃場は、水浸しで、今にも地表面を、覆いつくされそうになろうかとしている頃、自分達の目の前で、さらに、信じられないような光景を見ることになる。それは、川の上流から再び、こげ茶色のだく流が、いや先程の物より、いく倍も強大なだく流が全てをのみ込もうとしているかのように、こちらに迫ってくる。同僚たちと自分は、トラック・ピックアップ数台を、小高い丘の上の事務所に移動させ、労働夫たち、同僚たちと一緒に事務所に避難した。その間も、だく流は、圃場のあらゆる物をのみ込んでいた。

圃場にある、とうもろこしは、草丈2メートル近くある。そのとうもろこしも、半ばぐらいまで、水に浸かっていた。自分達は、増水する水面を、恨めしい気持ちで、傍観していた。

それから数分もしない内に、2メートル近くある草丈のとうもろこしは、水面下に隠れ、草丈3メートル以上あると思われる、防風林として植えられている小竹が、頭のてっぺんを水面から、のぞかしているだけだった。圃場は、完全に水没である。

シャッターも押せず

この光景を見ている同僚たちは、唖然として、何を失うのかも忘れてしまってしまうかの様であった。責任者である農場所長がカメラを圃場に向け、信じられないといったように、首を振りながら、1枚、2枚と写真を撮り、そして3枚目を撮った後、恐ろしくてそれ以上シャッターを押せないとばかりに、胸元までカメラを下げてしまった。水面は、先程まで自分たちのいた、農具資材置き場の所まで上昇していた。

ラジオからは、マシンガンのように、ヒステリックな声で、近況のニュースが入る。いつまでも自分たちが、農場にいるのは、危険だと言うことが解るのが、少し遅すぎたようだ。

コマヤグアから農場近隣の町までのびる未舗装道路は、所々で水没し、また、土砂の流れる川と化していた。労働夫たち、同僚たちそして自分は、2台の四輪駆動のピックアップに、分かれて乗車し、コマヤグアまでの帰路の途中で、水没した道の対岸を眺めていた。

今来た道を、逆戻りし、今ある水面より高い位置を選びながら、迂回する行動をとったことが、功を奏した。途中ぬかるみに一台のピックアップが、スタックしたが、もう一台のピックアップを使い、ロープで引っ張り上げて無事、脱出できた。

コマヤグアに着く手前を流れる川の本流に、架かる橋の途中まで来たとき、案の定、川の水面は、上昇し、橋桁の腹を擦りそうな勢いだった。川の両岸は、広がり、河岸にあった物は全て押し流され、川の上流からは、色々な物が流れてきた。家畜の牛、大木、家の残骸、自転車、オートバイ、しまいには、車両まで流れてくる始末で、全ての物を、のみ込んでしまうような勢いで流れている。都市の中では、街路は、小川と化し、河岸に近い高校も一時は、土砂まじりのだく流にのみ込まれるか、否かまで、被害は、悪化した。

土砂の除去作業を

その日は、土砂くずれによる、主要道路を覆う土砂除去の作業、川の増水による被害の復興作業、水没地域の住民の避難・救助作業等で、警官及び消防士たちにもまして、町の住民たちは、夜も徹して動き回っていた。まるで、世紀末のように。

数日間、惨事の余韻は続いた。

雨も上がったある日、小高い丘の上の事務所から圃場を眺めると、土砂混じりのだく流により、作物は、すべてなぎ倒され、その上を土砂が、覆っていた。一部の小竹が、押し流され、ある部分は、農場外にまで押し流されていた。

地表に、あらわにさらけだされている竹の根を、太陽が、容赦なくギラギラ照らしつけていた。全てのものが、強大なだく流のために、土砂を被り、ギラギラと照らす太陽の下では、いつもと変わって、土の色だけのベールで包まれた、不思議な世界だった。

昨年、92年10月頃の出来事であった。

（了）

村上　健 Takashi Murakami
派遣国：パラグアイ
職　種：野菜
隊　次：昭和62年度3次隊（活動期間1988年3月～1990年3月）
出身地：大阪府
初　出：「農村報知新聞」1990.7.8（㈱農村報知新聞社）

"今、実を結びかけている"

関心高いトマト栽培

私が青年海外協力隊員の野菜隊員として、ここパラグァイのプラス・ガライという村に赴任してきたのは1988年5月末。亜熱帯の暑い国を想像していた私は、その夜、下宿農家の隙間だらけの板張りの部屋のベッドで、与えられた一枚の毛布にくるまってパラグァイの冬の寒さを身をもって知ることとなった。プラス・ガライは首都アスンシオンから東方約150kmのところに位置する、電気・ガス・水道の一切ない典型的な農村である。

300戸余りある農家は、だいたい10ヘクタール前後の土地を持つ小農で、中心的な作物は綿、主食であるアンディオカ（キャッサバ）、サトウキビである。トウモロコシや落花生、ポロトと呼ばれるささげの一種など自家消費用に少し作られている。野菜類の栽培も比較的盛んでニンジン、ジャガイモ、タマネギ、キャベツなどの出荷量も多い。なかでもトマトは、市場価格が他の野菜に比べてかなり良いので農家の関心を集め、近年、盛んに栽培されるようになっている。

栽培のレベルは、パラグァイでトマトの栽培を定着させてきた日系農家の方々の影響もあって結構高い。移植はしないが播種床できちんと育苗し、定植後は支柱を立てて誘引、第一花房の下のえき芽を残して2本立てに整枝している。

多い病害虫の被害

私の職場は、農牧省農牧普及局（SEAG）のプラス・ガライ事務所である。SEAGは、パラグァイ各地に事務所を置いて普及活動を行っているが、ここプラス・ガライ事務所は、農村開発プロジェクトの一つとして、日本の資金援助で建てられたものだ。現在、SEAG職員と協力隊員が7名ずつ働いている。

私が赴任した当時、このあたりは森を切り拓いたばかりで事務所もまだできておらず、ようやく建物の基礎工事が始まったところであった。もちろん圃場も何もない。やるべきこともわからない。私を含めた3人の協力隊員は、職場もないまま暗中摸索の状態でこの村に住むことになった。

とりあえず私は、農家を訪ね歩いた。そして、畑を見せてもらい、話を聞いているうちに、トマト栽培の技術改善が必要だと感じるようになった。実際、トマト栽培農家が特に熱心で、また苦労もしていたからである。一番の問題は病害虫であった。ウイルスがかなり多発しており、そのほかにもりん紋病、斑点もしくは斑点細菌病のような症状も出ていた。実に病害が多い。すべて知識不足からくるもので、人々は菌も細菌もウイルスも区別せず、すべてウイルスと呼んでいた。予防に対する認識も欠けていた。

そこで、私は、とりあえずウイルス株の見分け方だけは教え、見つけたら抜いて遠くに捨てるか焼くかすること、また農薬は病気の防除を目的とするもので、蔓延してからでなく初期に濃度・量・回数を守って使うこと、この二点を指導して回った。

育苗など実演指導

病気以外の問題はそれほどなかったが、改善の余地があるとすれば、育苗（定植のとき根を引っこ抜くように苗床からとる）や土壌のことだろう。私は下宿先で苗床を作り、堆肥を作ってみた。苗床は中に落ち葉と牛糞をたっぷり詰めて水分を十分に含ませ、その上に床土を入れたいわゆる踏込温床のようなもの。堆肥は落ち葉、牛糞、枯れたサトウキビの葉などを積んだ。

落ち葉を集め始めた最初のころ、日本人が何か変わったことを始めたぞという顔で遠くから見ていた人も、そのうちに興味を持ち、何をやっているのか尋ねてくるようになった。そしてそれを機会に堆肥のこと、苗のことなどを話し、苗床が完成してトマトの苗を作り始めてからは、多くの人がわが家に見に来て質問などしてくれるようになった。

さらに、トマト栽培の簡単なテキスト（移植と敷ワラのすすめ、定植時の注意、病害）を作って配ったところ、一軒のトマト農家が、このやり方で作りたいから教えに来てくれと言ってきた。行ってみると、私がテキストに図で書いたように、移植床まで準備してある。「これでいいか？」「ウン、バッチリだ」

そして、畑に使う堆肥をその農家の親子と作り始

めた。「今までのやり方より仕事が増えるだろう」と私が言うと、高い化学肥料を買うことを考えたら、肥料を作るぐらいの仕事は何でもないよ」と笑い、「誰が見ても良い苗だ。うちに来る人は、この苗を見るといろいろ聞いてくるよ」と、うれしそうに言ってくれた。

堆肥は、もう一軒の農家でも作り始めている。その人も「作り方だけでなく、簡単な理論も教えておいてくれ。そうしたら、お前が日本に帰ったあとも我々が他の人に広めることができるだろう？」と、何ともうれしいことを言ってくれる。

農家を訪ね歩いたり、落ち葉を集めて不思議そうに見られながら始めたことが、今ようやく実を結びかけているような気がする。

こういった活動と並行して、2月（1988年）からようやく使えるようになった事業所圃場では、ブラジル産のニンニクの品種試験を行っている。パラグァイでは、ニンニクはほとんどアルゼンチンやブラジルからの輸入に頼っており、国内に一つだけ産地はあるのだが品質が悪く、在来種の商品価値は、今やほとんどなくなっているのである。そこで、パラグァイの気候にあったブラジル産の良質のニンニクを選び、それを増殖させていくのが目的だ。

こちらの方も順調であり将来、ブラス・ガライが輸入ニンニクを抑える質の良いニンニクのパラグァイ最初の産地となることを夢見ている。残念ながら、そのころには私は日本に帰っていて、一面に広がるニンニク畑を見ることができないだろうが……。

（了）